

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

VII

2001年度大阪市長吉東部地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告



2004. 3

財団法人 大阪市文化財協会

長原遺跡東部地区発掘調査報告 VII

2004.3

本書では、古墳時代中期および平安時代後期の水田、古墳時代後期～奈良時代にかけての自然流路などの調査成果を報告する。

特筆すべきは、奈良時代の自然流路から出土した、墨画土器・ミニチュア土器などの祭祀遺物や、ウシ・ウマの骨を主体とした動物遺存体である。これらの資料を通じて、奈良時代の長原遺跡と都城地域との深いつながりを具体的に知ることができるようにになってきた。特に、出土したウシ・ウマの骨は、遺存状態が良好でかつ個体数も多いことから、長原遺跡のウシ・ウマの形質的特徴を復元できる貴重な資料となるとともに、犠牲祭祀を含む当時の動物利用を知ることができることで重要な点である。

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

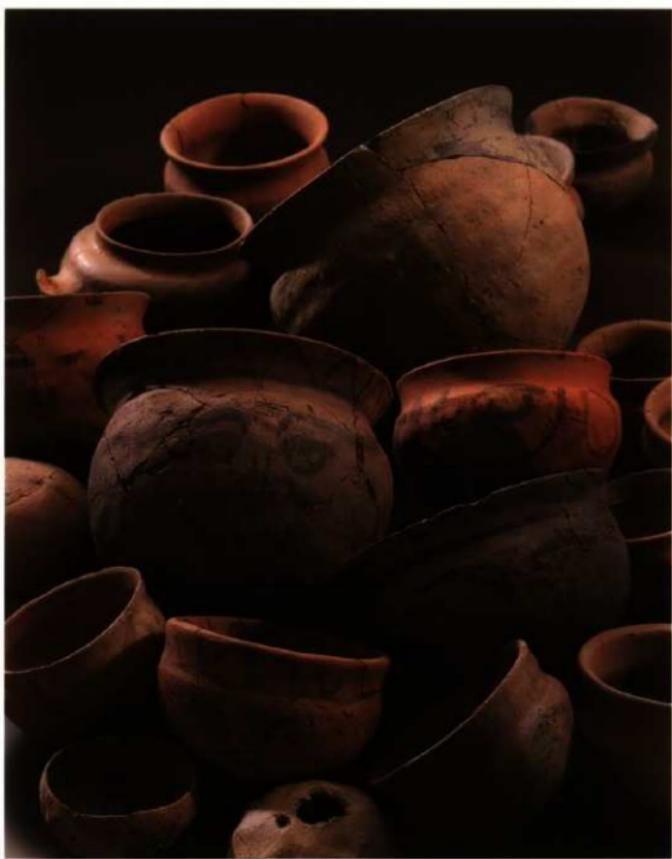
VII

2001年度大阪市長吉東部地区
土地地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告



2004. 3

財団法人 大阪市文化財協会



NR501出土黑画土器

大阪市平野区

長原遺跡東部地区発掘調査報告

VII

2001年度大阪市長吉東部地区
土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告

2004. 3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

本書は、2001年度に行った大阪市長吉東部地区土地区画整理事業に伴う発掘調査の成果をまとめたものであり、シリーズの第7冊目となる。

長原遺跡の調査が開始されて、はや30年の歳月が過ぎた。この間、当地域の歴史変遷と特徴が発掘調査を通じて明らかになってきた。当該事業の対象となる長原遺跡東北地区は、遺跡が地中深く埋もれており未知の部分が多くあったが、ここ数年の調査の進展によって、新たな遺跡の顔が浮かび上がってきた。本書で報告する奈良時代の大量の祭祀遺物や牛馬骨も、これまでの調査研究を進展させる重要な資料となろう。

こうした成果を市民に還元し、地域の歴史遺産を身近に感じ、親しむことができるよう、今後も努力する必要がある。まずは、本書の刊行をもってその第一歩としたい。

最後に、発掘調査ならびに報告書刊行に当ってご尽力をいただいた大阪市建設局ならびに関係者各位に心より感謝の意を表したい。

2004年3月

財団法人 大阪市文化財協会

理事長 脇田 修

例　　言

- 一、本書は、財団法人大阪市文化財協会が2001年度に実施した、大阪市建設局長吉東部土地区画整理事務所による、平野区長吉出戸8丁目の土地区画整理事業に伴う発掘調査(NG01-14、NGは長原遺跡を示す)の報告書である。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市建設局が負担した。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査研究部調査課長京鳴覚の指導のもと、同課調査第2係大庭重信が担当した。調査の面積・期間などは第Ⅰ章第1節に記した。本書の執筆・図録は、京鳴、同課調査第2係長高橋工(当時、現調整係長)・現調査第2係長積山洋の指導のもとに、大庭が行った。
- 一、出土した動物遺存体の同定は、独立行政法人奈良文化財研究所宮路淳子氏・松井卓氏に、木製品の樹種同定は、パリノサーヴェイ株式会社にそれぞれ委託した。各分析結果は、第Ⅱ章に収録した。
- 一、遺構写真は調査担当者が撮影し、一部を徳永園治氏に委託した。遺物写真は、西大寺フット杉本和樹氏および内田真紀子氏に委託した。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料は当協会が保管している。
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には補助員諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表したい。

凡　　例

1. 本書で用いた層位学・堆積学的用語については、[趙哲済1995]に準じる。
2. 遺構名の表記は、溝(SD)、土壌(SK)、自然流路(NR)の分類記号の後に、層位ごとに番号を付している。
3. 水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中では「TP±○m」と記した。挿図中の方位は、座標北である。座標値は、調査当時の日本測地系(國土平面直角座標第VI系)を用いている。
4. 出土遺物のうち、土器・土製品・木製品は報告書の統一番号を付し、動物遺存体については調査時の取上げ番号をそのまま付した。本文では两者を区別するために、動物遺存体の番号をR-と表記した。
5. 本書で頻繁に用いた土器編年や器種分類については次の文献に掲った。本文中では煩雑を避けるため、これら引用文献をその都度提示することは割愛している。古墳時代の須恵器：[田辺昭三1981]、飛鳥・奈良時代の土器：[古代の土器研究会1992]、平安時代の土器：[佐藤隆1992]、鎌倉・室町時代の土器：[鈴木秀典1982]。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 長原遺跡東北地区の発掘調査	1
第1節 経緯と調査地の位置	1
1) 長原遺跡の位置	1
2) 既往の調査	1
3) 発掘調査の経過	5
第Ⅱ章 調査の結果	7
第1節 層序	7
1) 調査地の層序	7
第2節 遺構と遺物	16
1) 弥生時代後期～古墳時代前期	16
i) 溝	ii) 出土遺物
2) 古墳時代中期	18
i) 水田	ii) 溝群
iii) 溝	iv) 出土遺物
3) 古墳時代後期～飛鳥時代	22
i) 自然流路	ii) 出土遺物
4) 奈良時代	27
i) 溝	ii) 自然流路
iii) 出土遺物	
5) 平安時代	53
i) 水田	ii) 土壙
iii) 出土遺物	
第Ⅲ章 遺物の検討	55
第1節 長原遺跡(NG01-14次)調査出土の動物遺存体について	55
1) はじめに	55
2) 出土した動物の概要	55
3) 考察	58
i) 出土動物遺存体の概要	ii) 長原遺跡のウマ

iii) 長原遺跡のウシ	iv) 駅伝馬
v) 牛馬耕	vi) 動物祭祀
4) まとめ	64
第2節 長原遺跡から出土した木材の樹種	70
1) 試料	70
2) 方法	70
3) 結果	70
4) 考察	71
 第IV章 まとめ	7
1) NR501出土の墨画土器と牛馬骨	72
2) 奈良時代の長原遺跡	73
 引用・参考文献	75
 あとがき・索引	

英文目次

原色図版目次

- 1 NR501ウシA出土状況
- 2 NR702出土遺物
- 3 NR501出土遺物

図版目次

- 1 地層断面
 - 上：第4a～7d層(東部南壁、北西から)
 - 中：第4d～10層(西部南壁、北西から)
 - 下：第5b～12d層(東部深掘り、東北から)
- 2 地質痕跡・古墳時代前期の遺構
 - 上：水平断面(中央南壁、北東から)
 - 中：SD901(北から)
 - 下：SD901断面(北から)
- 3 古墳時代中期の遺構(一)
 - 上：第9a層上面検出水田跡(東から)
 - 下：第9a層下面検出溝群(東から)
- 4 古墳時代中期の遺構(二)
 - 上：溝群B～E(北から)
 - 中：溝群Dと南壁地層断面(北から)
 - 下：第9a層下面の窪み群(2・3区、南から)
- 5 飛鳥時代の遺構
 - 上：NR702壺14、横瓶23出土状況
(北から)
 - 中：NR702壺15、ヒヨウタン18出土状況
(北から)
 - 下：NR702大甕24出土状況(北から)
- 6 奈良時代の遺構
 - 上：NR501全景(東から)
 - 下：NR501南北断面(1・2区同壁、北西から)
- 7 奈良時代の遺構と遺物(一)
 - 上：NR501遺物出土状況(2区、西から)
 - 下：ウシA出土状況(2-3区、北から)
- 8 奈良時代の遺構と遺物(二)
 - 上：ウシA中足骨R517・足根骨R518・距骨R519・踵骨R520出土状況(2-3区)
 - 中：イヌ頭蓋骨R593出土状況(2-3区)
 - 下：スッポンR581・582出土状況(1-1区)
- 9 奈良時代の遺構と遺物(三)
 - 上：NR501遺物出土状況(1-1区、東から)
 - 下：NR501遺物出土状況(2-5・3-7区、南から)
- 10 奈良時代の遺構と遺物(四)
 - 上：ウシ後頭骨R421ほか、把手付壺181、短頸壺234出土状況(2-5区、東から)
 - 中：ウシ下顎骨R265ほか、横瓶249、ミニチュア壺91出土状況(2-5区、東から)
 - 下：ウシ椎・尺骨R210、墨画土器132出土状況(1-1区、東から)
- 11 平安時代の遺構
 - 上：第4a層上面検出水田跡(6区、北西から)
 - 中：第3c層基底面検出土壙(7区、北西から)
 - 下：第3～4a層(中央南壁、北西から)
- 12 NR702出土遺物(一)
- 13 NR702出土遺物(二)
- 14 NR501出土遺物(一)
- 15 NR501出土遺物(二)
- 16 NR501出土遺物(三)
- 17 NR501出土遺物(四)
- 18 NR501出土遺物(五)
- 19 NR501出土遺物(六)
- 20 NR501出土遺物(七)
- 21 NR501出土遺物(八)
- 22 古墳時代前期～奈良時代の木製品・石製品
- 23 NR501出土動物遺存体(一)
- 24 NR501出土動物遺存体(二)
- 25 NR501出土動物遺存体(三)
- 26 NR501出土動物遺存体(四)
- 27 NR501出土動物遺存体(五)
- 28 NR501出土動物遺存体(六)
- 29 NR501出土動物遺存体(七)
- 30 NR501出土動物遺存体(八)
- 31 NR501出土動物遺存体(九)
- 32 NR501出土動物遺存体(一〇)
- 33 NR501出土動物遺存体(一一)
- 34 NR501出土動物遺存体(一二)
- 35 NR501出土動物遺存体(一三)
- 36 木製品に使用された材組織

挿図目次

図1	長原遺跡の位置	1	図23	NR501遺物出土状況(7-24~8-30区)	34
図2	長原遺跡の地区割と周辺の遺跡	2	図24	NR501出土遺物(1)	36
図3	長吉東部地区土地区画整理事業施行予定地と既往の調査	4	図25	NR501出土遺物(2)	37
図4	調査地トレンチ配置図	5	図26	NR501出土遺物(3)	38
図5	トレンチ南壁地層断面模式図	8・9	図27	NR501出土遺物(4)	40
図6	第9b層上面検出遺構	16	図28	NR501出土遺物(5)	42
図7	SD901平・断面図	17	図29	NR501出土遺物(6)	43
図8	SD901および第9b層出土遺物	17	図30	NR501出土遺物(7)	44
図9	第9a層上面検出遺構	18	図31	NR501出土遺物(8)	46
図10	第9a層下面・基底面検出遺構	19	図32	NR501出土遺物(9)	47
図11	第9a層下面検出溝群平・断面図	20	図33	NR501出土遺物(10)	48
図12	第9a層出土遺物	21	図34	NR501出土遺物(11)	49
図13	第8b層下面検出遺構	22	図35	NR501出土遺物(12)	49
図14	トレンチ南・西壁地層断面模式図	23	図36	NR501出土遺物(13)	50
図15	NR801出土木製品	23	図37	NR501出土遺物(14)	50
図16	NR702出土遺物(1)	25	図38	第3c層基底面・第4a層上面検出遺構	53
図17	NR702出土遺物(2)	26	図39	第3~4b層出土遺物	54
図18	第6層上面平面図および地区割り図	28	図40	NR501動物種別出土量比	55
図19	NR501東半および南壁地層断面図	29	図41	ウシAの出土状況	57
図20	NR501遺物出土状況(1-1~3-8区)	31	図42	ウシAの出土部位	57
図21	2-3区ウシA出土状況	32	図43	古代のウマ(1)	61
図22	NR501遺物出土状況(3-7~4-14区)	33	図44	古代のウマ(2)	61
			図45	奈良時代の長原遺跡地形復元図	74

表目次

表1	長原遺跡東北地区とその周辺のおもな調査	3	表8	NG01-14次調査出土の動物遺存体	55
表2	2001年度発掘調査の期間など	6	表9	NR501出土動物遺存体一覧(一)	65
表3	NG01-14次調査層序表	11	表10	NR501出土動物遺存体一覧(二)	66
表4	長原遺跡東北地区の基本層序	14	表11	NR501出土動物遺存体一覧(三)	67
表5	長原遺跡の標準層序	15	表12	NR501出土動物遺存体一覧(四)	68
表6	NR501出土遺物一覧(1)	51	表13	NR501出土動物遺存体一覧(五)	69
表7	NR501出土遺物一覧(2)	52	表14	樹種同定結果	70

写真目次

写真1	NR501の動物遺存体検出作業	6	写真4	第5b層内の踏込み(1-2区、東から)	27
写真2	ウシ頭蓋骨取上げ作業	6	写真5	NR501出土製塙土器	49
写真3	NR801木製品出土状況(南から)	23			

第Ⅰ章 長原遺跡東北地区の発掘調査

第1節 経緯と調査地の位置

1)長原遺跡の位置

長原遺跡は大阪平野の南部、大阪市平野区長吉長原・長原東・長原西・出戸・川辺・六反に所在する、後期旧石器時代から近世にかけての複合遺跡である(図1・2)。当遺跡では、1973年に地下鉄谷町線延長工事に伴う試掘調査で発見されて以降、発掘調査が継続して行われており、後期旧石器時代以降の歴史的変遷が明らかになってきた。調査の進展と同時に遺跡の広がりが確認され、現在では東西約2km、南北約2kmの範囲を八つの地区に区分し、それぞれ北・東北・東・東南・中央・南・西・西南地区と呼称している(図2)。

本書で報告するNG01-14次調査が行われた長吉出戸8丁目は、長原遺跡の東北地区に位置する。長原遺跡の中でも、東北地区は低位段丘層以下が地中深くに埋没し、沖積層が厚く堆積している。東北地区の北・東端は八尾市との市境であり、北側で亀井遺跡、東側で木の本・老原・太子堂遺跡と隣接する。

2)既往の調査

長原遺跡東北地区の調査は、1978年に行われた推定城山古墳跡地の試掘調査と、1978年～1985年にかけて、飛行場幹線特殊マンホール建設および地下鉄谷町線延長工事に伴って、城山遺跡の名称で実施された調査が始まりである。その後、大阪市の下水管渠工事などによる断片的な調査が行われてきた(表1)。

1995年度には、当地区が長吉東部地区土地区画整理事業の対象地域となり、以降、年度ごとに発掘調査が継続して実施されている。本事業における埋蔵文化財の取扱いについては、1995年9月、大阪市建設局長吉東部土地区画整理事務所(以下、区画整理事務所と略称する)、大阪市教育委員会文化財保護課(以下、文化財保護課と略称する)、財団法人大阪市文化財協会の3者により事前協議を行い、「長吉東部地区埋蔵文化財に関する協定書」を締結した。発掘調査を実施するに当っては、事業における埋蔵文化財の取扱い全般を協定書に定めた上で、各年度における具体的な内容は年度ごとの契約



図1 長原遺跡の位置



図2 長原遺跡の地区割と周辺の遺跡

書で定めることとした。

1995年度から2000年度にかけて、長吉東部土地区画整理事業に伴って実施された発掘調査は計15件を数える(表1・図3)。まず、初年度である1995年度には、都市計画道路長吉1号線予定地の北端部で1件の調査を実施し(NG95-57次)、飛鳥時代および平安時代の掘立柱建物や古墳時代後期の流路・橋(しがらみ)とされた土手状造構を検出した。

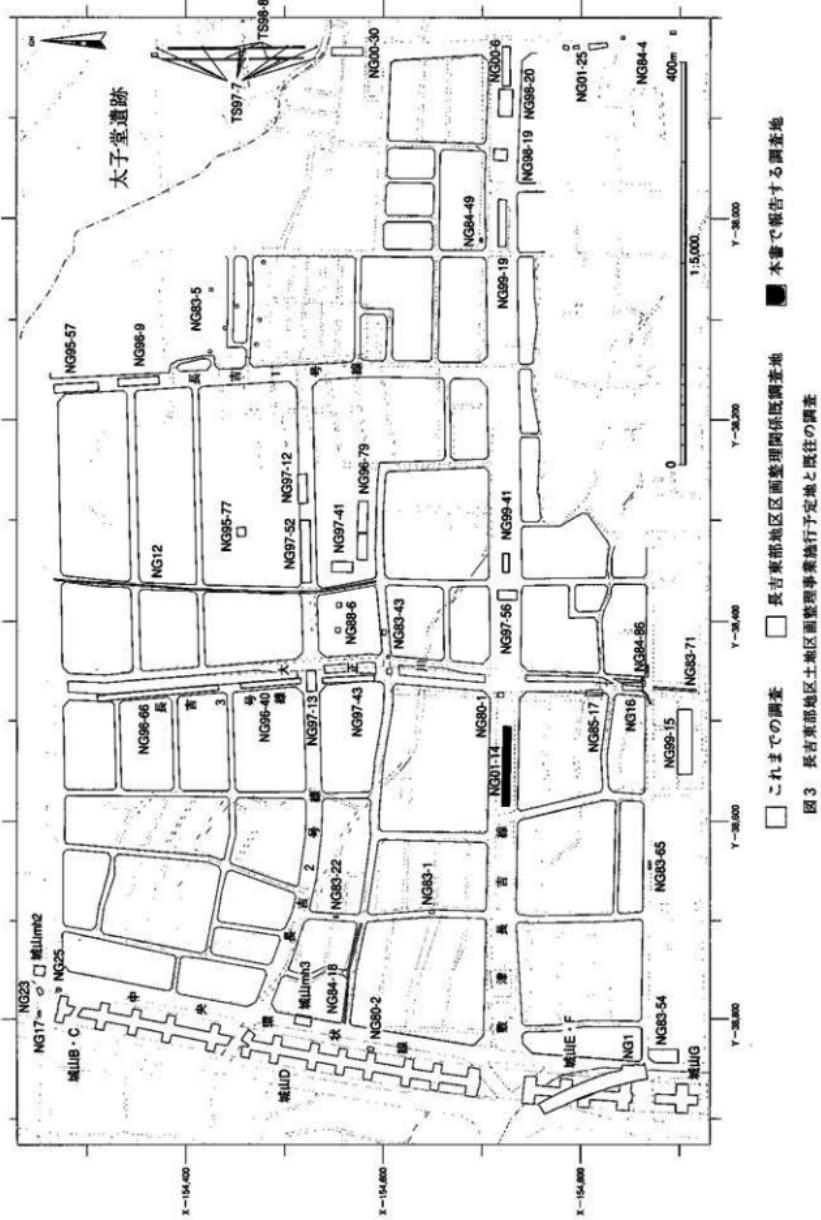
1996年度には、前年度の調査地の南側の長さ42m部分を対象に調査を実施し(NG96-9次)、飛鳥時代の掘立柱建物、弥生時代後期から古墳時代初頭の水田などを検出した。また、この年度には大正川の西側に沿う都市計画道路長吉3号線予定地も調査の対象となり、文化財保護課と区画整理事務所の立会いのもと、5月に2箇所の試掘調査を行った。その結果、1995年度の調査で検出した古墳時代後期の厚い洪水堆積層と同様の地層を確認した。古墳時代以前の造構面はその下に存在することから、現地表下4mまでを調査の対象とすべきとなった。この協議の結果を受けて、長吉2号線との交差点の北側に当る部分で2箇所(NG96-40・66次)の調査を行った。調査では、弥生時代後期の水

表1 長原遺跡東北地区とその周辺のおもな調査

調査	おもな内容	文献
城山mh2	弥生時代前・中期周溝状遺構、古墳	大阪市文化財センター1980
城山mh3	弥生時代中期遺物、古墳時代大溝、奈良時代遺物	大阪市文化財センター1980
城山B・C区	弥生時代中期方形状溝墓、古墳・飛鳥時代自然流路	大阪市文化財センター1986a
城山D・E・F区	弥生時代中・後期急落、古墳時代中期水田・土壙、飛鳥・平安時代溝、中世水田	大阪市文化財センター1986b
城山G区	弥生時代土壤群、飛鳥時代～中世水田	大阪市文化財センター1986c
NG1	弥生時代中期溝・土壤群、古墳時代中期溝、飛鳥時代大溝	大阪市文化財協会1978
77年度試掘	奈良時代溝	大阪市考古資料収集室監修部会1978
NG12	飛鳥時代杭列・流路・土器溝まり、平安時代土壙	大阪市文化財協会1979a
NG16	弥生～古墳時代中期遺物、弥生時代後期・古墳時代前・中期溝・井戸	大阪市文化財協会1979b
NG17	純文時代晚期・弥生・古墳時代後期遺物	大阪市文化財協会1979c
NG80-1	TP+7.2mで奈良時代溝、TP+6.9mで砂層(NG8号)	大阪市文化財協会1981a
NG80-2	弥生・古墳時代遺物	大阪市文化財協会1981b
NG23	弥生時代中期遺物、古墳	大阪市文化財協会1980
NG25	純文時代晚期・弥生時代中期遺物	大阪市文化財協会1980
NG83-1	弥生時代中期住居、古墳時代中期住居	大阪市文化財協会1984a
NG83-5	TP+8.0mで砂層	大阪市文化財協会1984b
NG83-22	TP+7.6mで奈良時代包含層	大阪市文化財協会1984c
NG83-43	TP+7.8mで砂層	大阪市文化財協会1984d
NG83-54	TP+8.1mで砂層(NG5号か)	大阪市文化財協会1984e
NG83-63	弥生時代中期第2層、洋生時代後期上層柱植基	大阪市文化財協会1984f
NG83-65	弥生時代中期遺物、古墳時代中期土壙状墓葬	大阪市文化財協会1984g
NG84-4	古墳時代中期溝・土壙、飛鳥時代水田、古墳時代砂層なし	大阪市文化財協会1985a
NG84-18	TP+8.2mで泥質土壙	大阪市文化財協会1985b
NG84-49	TP+7.7mで砂層	大阪市文化財協会1985c
NG84-86	弥生時代後期～古墳時代中期遺物、庄内期井戸・建物、古墳時代中期土壙	大阪市文化財協会1985d
NG85-17	純文時代晚期遺物	大阪市文化財協会1986
NG86-6	TP+7.8mで砂層(飛鳥時代初頭の須恵器が出土)、飛鳥時代包含層、奈良時代溝	大阪市文化財協会1989
NG95-57	TP+8.2mで砂層(古墳時代後期中葉の須恵器が出土)、古墳時代後期編・平安時代集落	大阪市文化財協会1998a
NG95-77	TP+8.0mで砂層(古墳時代後期前葉の須恵器が出土)、古墳時代後期編	大阪市文化財協会1996
NG96-9	弥生時代後期水田・TP+8.2mで砂層、飛鳥・平安時代奥落	大阪市文化財協会1999
NG96-40	TP+7.5～8.2mで砂層、飛鳥～平安時代井戸	大阪市文化財協会1999
NG96-66	弥生時代中・庄内期水田・TP+7.8mで砂層、古墳時代後期～奈良時代聚落	大阪市文化財協会1999
NG96-79	旧石器時代遺物・TP+7.5mで砂層、飛鳥・平安時代井戸・溝	大阪市文化財協会1997
NG97-12	旧石器時代遺物集中央、純文時代遺物、古墳中期時代木製品・飛鳥時代遺物・掘立柱建物	大阪市文化財協会2000a
NG97-13	古墳時代自然流路、平安時代井戸	大阪市文化財協会2000a
NG97-41	平安時代溝・自然流路、古墳時代水田・弥生時代中期溝・弥生時代前期自然流路	大阪市文化財協会1998b
NG97-43	弥生時代後期溝・古墳時代自然流路・飛鳥時代溝・土壙	大阪市文化財協会2000a
NG97-52	旧石器時代遺物・梅丈時代遺物・古墳時代中期木製品・古墳時代後期土手状遺構・飛鳥時代遺構	大阪市文化財協会2000a
NG97-56	純文時代後期踏込み跡・平安時代土手状遺構	大阪市文化財協会2000a
NG98-19	古墳時代中期土壙状遺構・土師器・須恵器・玉軒・袋塙土器	大阪市文化財協会2001a
NG98-20	古墳時代中・後期流路・古墳時代中期土壙状遺構・堅穴住居・古代～中世耕跡	大阪市文化財協会2001a
TS97-7	平安時代後期井戸・土壙	八尾市文化財調査研究会2000a
TS98-8	奈良～平安時代初期の小穴・中世井戸	八尾市文化財調査研究会2000b
NG99-15	純文時代石器集中墓・弥生～後期・古墳中期急落・飛鳥時代耕跡	大阪市文化財協会2002a
NG99-19	純文時代後期土壙・弥生～古墳時代前期水田・平安時代～近世耕跡	大阪市文化財協会2002b
NG99-41	後期旧石器時代遺物・純文時代早～前朝住居址・古墳時代前期水田・平安時代流路・土手	大阪市文化財協会2002b
NG00-6	古墳時代中期盛土遺構・古代溝・平安時代流路	大阪市文化財協会2003
NG00-30	奈良時代ピット・平安時代土壙・流路	大阪市文化財協会2001b
NG01-14	古墳時代前期溝・古墳時代中期水田・淤泥・飛鳥～奈良時代自然流路・盛土土器・牛馬骨	木曾叢録
NG01-25	中世水田	大阪市文化財協会2002c

田、古墳時代後期から飛鳥時代の掘立柱建物、平安時代の遺構群を検出した。

1997年度には、都市計画道路長吉2号線予定地で3個所(NG97-12・13・52次)、同長吉3号線予定地で1個所(NG97-43次)、同敷津長吉線予定地で1個所(NG97-56次)の合計5個所で調査を実施した。特にNG97-12・52次調査では、旧石器時代の石器製作場、弥生時代中期の水田、古墳時



代の土手状遺構、飛鳥時代および平安時代の遺構群が見つかっており、中でも旧石器時代の石器製作址は、約50点のナイフ形石器や削器とともに14,000点に及ぶ剥片などが出土しており、後期旧石器時代の石器製作技法に係わる重要な資料として注目されている。

1998年度には、都市計画道路敷津長吉線予定地で2個所(NG98-19・20次)の調査を実施し、古墳時代中期の盛土遺構とその周辺から、祭祀に伴うと思われる滑石製勾玉や白玉のほか、多量の土器が出土した。

1999年度には、都市計画道路敷津長吉線予定地で2個所(NG99-19・41次)の調査を実施し、近世から古代にかけての水田・鍛溝群、古墳時代から弥生時代の水田、縄文時代後期の炉跡と土器集積、縄文時代中期の住居状遺構、縄文時代早期の遺構群などを検出した。

2000年度には、都市計画道路敷津長吉線予定地の東端で、1個所(NG00-6次)の調査を実施した。東隣のNG98-20次調査で確認されたものと一連の古墳時代中期の盛土のほか、平安時代の流路を検出した。また、遺構に伴うものではないが、重弧文軒平瓦をはじめとする古代の瓦や和同開珎などの銅鏡が出土した。

以上の調査については、それぞれ次年度に整理作業を行い、「長原遺跡東部地区発掘調査報告」I~VIを刊行し、調査成果を公表している。

2001年度には、都市計画道路敷津長吉線予定地の1個所(NG01-14次)で調査を実施した。1997年度に実施したNG97-56次調査地の西側約150mの位置にあたる。本書では、この調査成果を報告する。なお、整理作業は2002年度に行っている。

3) 発掘調査の経過

今回報告するNG01-14次調査地は、本来の幅が28mの東西道路である敷津長吉線予定地である。

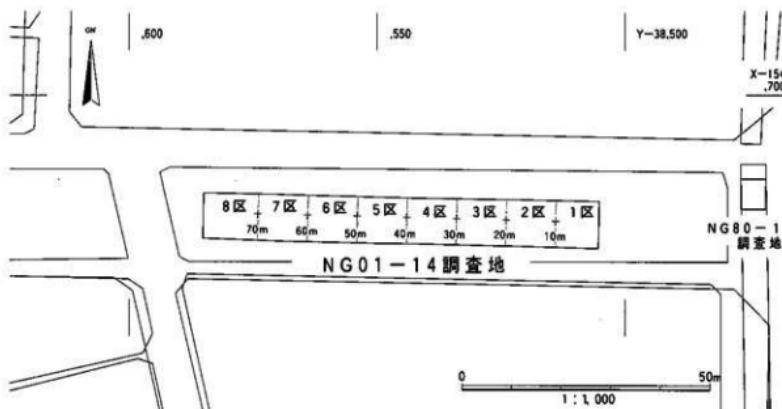


図4 調査地トレンチ配置図



写真1 NR501の動物遺存体検出作業



写真2 ウシ頭蓋骨取上げ作業

下面、第9bi層の上・下面でそれぞれ行った。

第6層の上面で検出した奈良時代の自然流路(NR501)では、土器類とともに、大量のウシ・ウマの骨が出土した。これらの動物遺存体は地下水の影響から検出時の遺存状態は良好であったが、時間の経過とともに急速に劣化が進んだ。そのため、検出作業と同時に、薬品を用いた簡易の保存処理と記録・取上げ作業を進めたが、膨大な量の骨が出土したことから、作業には多大な時間と労力を要した。この間、出土した動物遺存体について、奈良文化財研究所の宮路淳子氏・藤田正勝氏より、現地で指導・教示を受けた。

第9bi層下面で最終の平面調査を終えた後、調査区東半に東西方向のサブトレーナーを設定し、約2.2m下まで掘り下げ、その間の地層の観察・記録を行った。

現地での作業は10月26日に終了し、10月29日から埋戻し作業を開始し、12月7日にすべての作業を終了した。

(大庭重信)

表2 2001年度発掘調査の期間など

計画道路名	調査次数	調査地番	東西×南北	面積	調査期間	担当者
敷津長吉線	NG01-14	平野区長吉出戸8丁目14	80m×9m	736m ²	2001年6月7日～2001年12月7日	大庭重信

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 層序

1) 調査地の層序(図5、表3、図版1・2)

本調査では、現地表下5.8mまでの沖積層上部層を、第0～20層に区分した。地層の観察と記録はおもに調査区の南壁断面で行った。以下、各層の特徴を記載し、長原遺跡東北地区基本層序(以下、RK〇層と記述)【高橋工ほか2000】との対比を行う(表4)。また、表3では長原遺跡標準層序【趙哲済2001】との対比を併せて示す(表5)。

第0層：層厚約140cmの現代の盛土で、RK0層に対比できる。第0層上面の現地表面の標高はTP +10.3m前後である。

第1層：層厚約20cmのオリーブ黒色中～粗粒砂混りシルトからなる作土層である。本層上面には畦畔が遺存しており、盛土造成が行われる直前まで存在していた水田の作土層とみられる。調査区東半の本層下部には、層厚5cm前後の粘質土が分布しており、水田の床土とみられる。RK1層に対比できる。

第2層はRK2層に対比できる江戸時代の作土層で、第2a・2b層に区分した。

第2a層：層厚10～20cmの暗灰色細粒砂混りシルトからなる作土層である。調査区西半に分布し、下面には耕作に伴うとみられる溝がある。

第2b層：層厚10～20cmのオリーブ色シルト質中～粗粒砂からなる作土層で、淘汰が悪い。調査区全域に分布し、下面には耕作に伴うとみられる溝がある。17～18世紀代の唐津焼、伊万里焼などが出土した。

第3層は砂礫を主体としており、第3a～3d層の4層に細分した。調査では第3層までを重機によつて除去した。

第3a層：層厚約15cmの灰オリーブ色シルト質中～粗粒砂からなる作土層である。偽礫を多く含み、淘汰が悪い。調査区東端に分布する。

第3b層：最大層厚40cmの灰～暗オリーブ灰色シルト～礫からなる水成層で、斜交層理をなす。分布域の西端では、上部がやや土壤化していた。

第3c層：最大層厚20cmの灰～暗緑灰色細粒砂～極粗粒砂からなる。調査区西半では斜交層理をなすラミナ構造がよく残っているが、東半では擾乱を受け、下面でヒトやウシの踏込みおよび鶴痕が見られた。両者の境界は不明瞭で明確に区分できなかったことから、第4a層の水田が洪水によって覆われた後、あまり時間を置かずに復旧作業を行おうとした結果と思われる。調査区西部では、本層基底面で土取り穴とみられる土壤を検出した。

第3d層：層厚約5cmの灰色細～極細粒砂からなる水成層である。調査区西部にわずかに残存してい

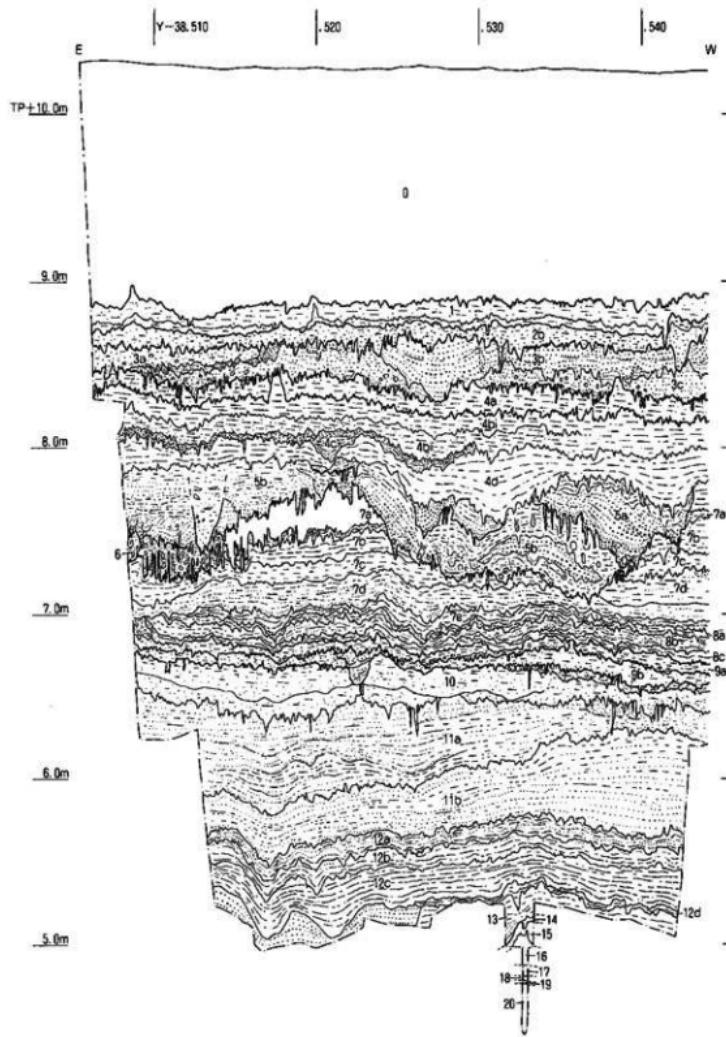
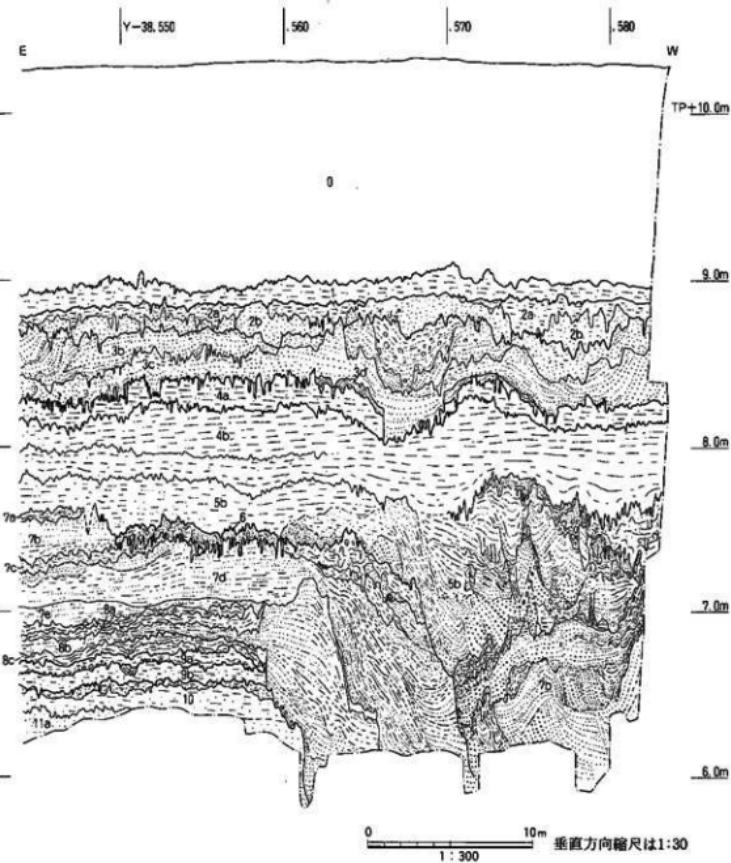


図5 トレンチ南壁地層断面模式図



た。第4a層上面の水田を直接覆う。

第3層からは12世紀代の土師器・瓦器のほか、緑釉陶器が出土しており、出土遺物からRK4Bi~ii層に対比できる。

第4層は細粒物質を主体としており、第4a~4d層に区分した。

第4a層：層厚10~15cmで、有機質に富む暗緑灰~オリーブ黒色砂礫混りシルトからなる作土層である。上面で水田畦畔を検出した。本層より下の約40~60cmの範囲には、酸化鉄が密集しており、特に上部で顕著であった。酸化鉄は根の空隙の周囲に沈着しており、これらの根痕はイネ科植物のものとみられる。12世紀代の土師器・黒色土器・瓦器が少量出土しており、RK4Biii~iv層に対比できる。

第4b層：層厚約20cmの黄灰色シルト質粘土~暗灰黄色砂礫混りシルトからなる。上方へ細粒化する。調査区東半では、砂礫を含まない上部層(第4bi層)と砂礫を若干含む下部層(第4bii層)とに区分できるが、調査区西半では砂礫がほとんど混入せず、細分できなかった。第4bii層には下位層に由来する砂礫粒が均等に含まれることから、作土化されていると判断したが、下限の境界は不明瞭で、耕作に伴う加工痕は確認できなかった。瓦器は含まれず、10世紀代の黒色土器・土師器・須恵器が出土することから、RK4C層に対比できる。

第4c層：層厚5cm前後の黄灰色シルト~礫からなる水成層で、調査区東半に分布する。厚いところでは層厚が約15cmあり、下から極細~中粒砂、シルト、極粗粒砂~礫の薄層が順に重なる。

第4d層：層厚10~32cmの黄褐色~オリーブ黒色シルト質粘土からなり、植物遺体を多く含む。調査区全域に分布し、NR501埋没後の窪地を覆っていた。調査区西端で下面が乱れる箇所があり、ヒトが入込んでいたようである。上部から10世紀代の黒色土器が、最下部からは8世紀代の完形の須恵器壺が出土しており、RK4C~5層に対比できる。

第5層は自然流路NR501を埋める砂礫層を主体としており、第5a・5b層に区分した。出土遺物の年代観から、RK5層に対比できる。

第5a層：最大層厚50cmの灰色粗粒砂~礫からなる水成層である。NR501の東端に厚く堆積していた。8世紀前半の須恵器・土師器やウシ・ウマの骨が出土した。

第5b層：最大層厚100cmをはかり、下部の灰色粗粒砂~礫を主体とした水成層と、上部の暗色化したオリーブ灰色砂礫混りシルト層からなる。前者は流路の中心から離れるにつれ細粒化し、流路外に分布する第6層を覆っていた。また、後者にはドブガイ・イシガイなどの貝の遺骸が多く含まれていた。8世紀前半の須恵器・土師器やウシ・ウマの骨が多く出土するとともに、木製品・鉄製品・モモ核なども出土した。

第6層：層厚10~20cmのオリーブ黒色シルト質極細粒砂からなる作土層で、調査区東端のNR501の南側に分布する。偽礫を多く含んでおり、部分的に極細粒砂~細粒砂のラミナが残存していた。上面および下面には、ヒトやウシの踏込みが顕著である。また、本層下部には炭酸第一鉄粒が点在していた。さらに、NR501の底付近にも本層に対応する暗緑灰色粘土質シルト層が見られた。8世紀初頭の土師器・須恵器が出土し、RK5層に対比できる。

表3 NG01-14次調査層序表

層序	主な岩相	基層 (cm)	主な地質	主な遺物	六段基本層 序との対比	七段基準層 序との対比	時代
0	底土	140			RK0	NG6	
1	オリーブ褐色中～粗粒砂泥りシルト(作土)	20	I 岩野		RK1	NG1	現代
2a	暗灰色細粒砂泥りシルト(作土)	10～20	I 新耕土				
2b	灰オリーブ色シルト質中～粗粒砂(作土)	10～20	I 新耕土	土器器・陶器器(轟津・伊万里)・瓦	RK2	NG2	江戸
3a	灰オリーブ色シルト質中～粗粒砂(作土)	15					
3b	灰色～暗灰色細粒砂(水成)	≤40		土器器・瓦器・漆器陶器	RK4Bi-II	NG4A-B	平安後期～鎌倉
3c	灰色～暗灰色細粒砂(水成)	≥20	I 路込み・瓦器 ▼土器				
3d	灰色～暗灰色細粒砂(水成)	5					
4a	暗灰色～オリーブ褐色砂泥りシルト(作土)	10～15	I 岩野	土器器・瓦器・褐色土器	RK4Bii-iv	NG4Bii	平安後期
4bi	黄灰褐色シルト質粘土(作土?)	12					
4bii	暗灰色帶青苔若手合しシルト(作土?)	12		土器器・瓦器・褐色土器	RK4C	NG4C	平安中～後期
4c	黄灰褐色シルト～壤(水成)	≥15					
4d	黄土～オリーブ褐色シルト質粘土(水成)	10～32	I 粘込み	植志器・土器器・褐色土器	RK4C～5	NG4C～5	奈良～平安中期
5a	灰～オリーブ褐色シルト～壤(水成)	≥85		土器器・瓦器器・動物遺存			
5b	灰～オリーブ褐色シルト～壤(水成)	≥100	I 粘込み・土堆	土器器・瓦器器・動物遺存	RK5	NG5A	奈良
6	オリーブ褐色角理復りシルト質粘土(作土)	20	I NR501-I SD501-I 粘込み	土器器・瓦器器			
7a	暗オリーブ褐色粘土質シルト(褐色)	4					
7b	暗オリーブ褐色粘土質シルト、灰褐色粘土(水成)	15	I NR701	植志器	RK7Ai	NG6B～7A	飛鳥
7c	オリーブ褐色シルト～粗粒砂(褐色)	10		土器器・瓦器器・動物遺存			
7d	暗オリーブ褐色シルト～中粒砂(水成)	15～40	I NR701-I 水平剖面				
7e	暗オリーブ褐色粘土質シルト(水成)	5～10			RK7Aii-iv	NG7A	古墳後期
8a	オリーブ褐色シルト(褐色)	5					
8b	暗緑灰色シルト～粗粒砂(水成)	10	I NR801	木製品			
8c	灰褐色シルト質粘土(水成)	3			RK7B	NG7B	古墳中期
9a	暗オリーブ褐色砂泥りシルト(作土)	5～10	I 岩野 I 潟野	傳式土器・植志器			
9b	オリーブ褐色砂泥りシルト(作土)	5～10	I SD901	植生焼土器・布留式土器・鐵石	RK8A	NG7Bii	弥生後～古墳前期
10'	オリーブ褐色粗粒砂泥りシルト質粘土(水成)	≥5			RK9B	NG8B	
10	暗オリーブ褐色複理復り粗粒砂質シルト(古土壤)	20～30	一水平断面	植生焼土器・サフライト側片	RK9B-10A	NG8B-9A	弥生後～中期
11a	暗緑灰色細粒砂質シルト～粗粒砂(水成)	15～40					
11b	暗オリーブ褐色シルト～中粒砂(水成)	40～60					
12a	暗オリーブ褐色シルト～粗粒砂(水成)	20			RK10Bi-II	NG9Bi-iv	弥生後期～
12b	オリーブ褐色複理複理復り粘土質シルト(水成)	10～20					
12c	オリーブ褐色粘土質シルト(水成)	30～4					
12d	オリーブ褐色粘土質シルト(褐色)	5			RK10Biv	NG9Biv	
13	灰褐色粘土質シルト～粗粒砂(水成)	≤30					
14	暗緑灰色シルト質粘土(水成)	4～6			RK10Bv	NG9Bv	
15	暗褐色シルト質粘土(褐色)	4～12			RK10Ci-I	NG9Ci	
16	暗オリーブ褐色シルト質粘土(水成)	18					
17	暗褐色シルト質粘土(褐色)	6			RK10Ci-iv	NG9Ci	
18	暗オリーブ褐色シルト質粘土(水成)	4					
19	灰褐色粘土(水成)	1			RK11	NG10-11	西魏隋
20	褐浜色細粒砂質シルト	≤25					

□上部突出層

↓下部突出層

一均層内微小造痕

▼茎表面微小造痕

第7・8層は調査区西半の自然流路NR701・702・801内に厚く堆積した砂礫層と、シルト層の互層からなる。流路の外側では細粒化し、細粒砂とシルトの薄層が連続して見られ、一部暗色化する。第7a～7e層、第8a～8c層に細分した。

第7a層：層厚約4cmの暗オリーブ灰色粘土質シルトからなる。有機質に富み、暗色化している。調査区東端のNR501の南肩に盛られた土手内に遺存していた。

第7b層：調査区東半では、層厚約15cmの暗オリーブ灰色粘土質シルトからなる。西側にいくにつれ層厚を増し、灰色粗粒砂層となってNR702下半を埋める。NR702内からは7世紀前半の完形の須恵器大甕や甕が出土しており、RK7Ai層に対比できる。

第7c層：層厚約10cmのオリーブ黒色シルト～極細粒砂からなり、やや暗色化している。有機質に富み、上部は泥質である。調査区全域に分布しており、NR702内にたれ込んでいる。NR702内では7世紀前半の須恵器大甕・横瓶、土師器壺、ヒヨウタンや動物遺存体が出土しており、本層はRK7Ai層に対比できる。

第7d層：調査区東半では層厚20～60cmの暗オリーブ灰色シルト～極細粒砂からなる。西側方にいくにつれ層厚を増し、植物遺体を含む暗オリーブ灰色シルト～中粒砂の互層となって、NR701の下部を埋める。本層を切る水平方向の断層が認められた(図版2)。

第7e層：層厚5～10cmの均質な暗オリーブ灰色粘土質シルトからなる。第8a層を覆う。

第8a層：層厚約5cmのオリーブ黒色シルトからなり、植物遺体を多く含む。地層の上限と下限は明瞭である。調査区全域に分布し、NR801内にたれ込んでいる。

第8b層：調査区東半では層厚約10cmの暗緑灰色のシルト～極細粒砂からなる。西側にいくにつれ粗粒化し、NR801を埋める。NR801内では、下半が植物遺体を多く含む細粒砂、上半がシルトと細粒砂の互層からなる。木錐が出土した。

第7d層～8b層からは、時期を決める遺物が出土していないが、上下の地層の年代観から、RK7Aii～7AiV層に対比できる。

第8c層：層厚約3cmの灰色シルト質粘土からなる。調査区東半では植物遺体の薄層を挟在する。西半のNR801の肩付近でやや層厚を増し、上部は若干暗色化している。第9a層を直接覆う。

第9a層：層厚5～10cmの暗オリーブ灰色砂混りシルトからなる作土層である。本層より下の地層は、調査区東半で確認し、西半では流路群によって削られ残存していなかった。下位には本層の直接の母材となった暗オリーブ灰色シルト質粘土が部分的に残存していたが、多くは耕起により偽礫化していた。上部はやや暗色化しており、上面は植物遺体の薄層で覆われていた。上面で水田畦畔を、下面で等間隔に平行して並ぶ溝群を、基底面で溝SD902を検出した。5世紀前葉の初期須恵器や韓式系土器平底鉢などが出土し、本層はRK7B層に対比できる。

第9b層：層厚5～10cmのオリーブ黒色砂混りシルトからなる。偽礫を含み、地層の下限が明瞭であることから作土層と判断した。上面で溝SD901を検出した。本層およびSD901内からは弥生時代後期の土器や古式土師器が出土し、本層はRK8A層に対比できる。

第10層：層厚20～30cmの暗オリーブ灰色砂礫混り細粒砂質シルトからなる古土壤である。地層の

下限は不明瞭で、植物の根痕が顕著に認められた。上部はやや泥質である。上下の地層と比べて、堅くしまっている。本層を切る水平方向の断層が認められた(図版2)。前～中期の弥生土器細片とサヌカイト剥片が出土した。RK9B～10A層に対比できる。また、第10層の上位には、水成層起源と思われるオリーブ黒色極粗粒砂混りシルト質細粒砂層が5cmの厚さで部分的に分布しており、これを第10'層として区別する。

第11層以深は調査区東半に設定した東西方向の深掘りトレーニングで確認した。人為に係わる痕跡は認められず、遺物も出土しなかった。第11層を第11a・11b層に、第12層を12a～12d層に細分した。

第11a層：層厚15～40cmの暗緑灰色細粒砂質シルト～細粒砂からなる。上部は上位からの生物擾乱によって乱れているが、下半部では水平方向のラミナが発達しており、東側にいくにつれ層厚を増して砂を挟在する。

第11b層：層厚40～60cmの暗オリーブ灰色シルト～中粒砂からなる。上方へ細粒化する。

第12a層：層厚20cmの暗オリーブ灰色シルト～極細粒砂からなる。上方へ細粒化する。植物遺体の薄層を含む。

第12b層：層厚10～20cmのオリーブ黒色粘土質シルトからなる。上面を植物遺体の薄層が覆う。

第12c層：層厚30～40cmのオリーブ黒色粘土質シルトからなる。植物遺体の薄層が何枚も見られる。中位付近に炭酸第一鉄粒が点在していた。

第11a～12c層はRK10Bi～10Biii層に対比できる。

第12d層：層厚5cmのオリーブ黒色粘土質シルトからなる。有機質に富み、地層の上限と下限は明瞭である。RK10Biv層に対比できる。

第13層：下部が灰色粘土質シルト、上部が細粒～粗粒砂からなる。粗粒砂が分布する調査区東端では、層厚は30cm以上ある。下限付近にも粗粒物質が見られる。

第14層：層厚4～6cmの暗緑灰色シルト質粘土からなる。

第13・14層はRK10Bv層に対比できる。

第15層：層厚4～12cmの黒色シルト質粘土からなる暗色帶である。本層から下約20cmの範囲には、根の空隙に沈着した酸化鉄の斑点が密集して観察でき、本層形成時に植物が繁茂していたことが判る。RK10Ci～ii層に対比できる。

第16層：層厚18cmの暗オリーブ灰色シルト質粘土からなる。RK10Ciii層に対比できる。

第17層：層厚6cmの黒褐色シルト質粘土からなる。暗色化しており、地層の上限と下限は不明瞭である。RK10Civ層に対比できる。

第18層：層厚4cmの暗オリーブ灰色シルト質粘土からなる。

第19層：層厚1cmの灰色粘土からなる。

第20層：褐灰色細粒砂質シルトからなる。層厚は25cmまで確認した。

第18～20層はRK11層に対比できる。

第2節 遺構と遺物

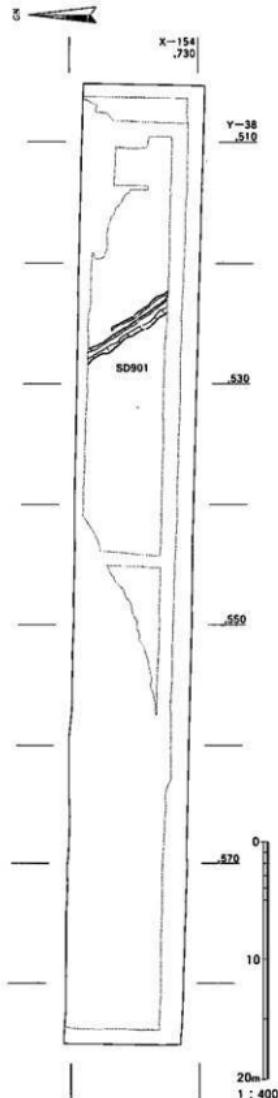


図6 第9b層上面検出遺構

i) 弥生時代後期～古墳時代前期

当該期の遺物を含む第9b層は、調査区東半に残存する作土層であるが、本層の上・下面では耕作に伴う痕跡は認められなかった。遺構は第9b層上面で溝1条を検出した。

i) 溝(図6・7、図版2)

3・4区でSD901を検出した。幅1.5m、深さ0.3mの南東～北西方向の溝で、第9b層上面から掘込まれていた。溝は、地震による水平方向の断層によって分断され、東西に約0.3mずれていた。

溝の埋土は、底付近に加工時の偽蹠を多く含む細粒砂～極粗粒砂層(図7-6層)が見られ、その上には水流があつたことを示す中粒砂～粗粒砂層(同3～5層)や滯水状態を示すシルト層(同2層)が堆積していた。埋土からは外面にタタキを施すV様式系の弥生土器壺の破片のほか、以下に示す布留式土器が出土しており、SD901は古墳時代前期の遺構と判断される。

ii) 出土遺物(図8、図版22)

SD901から小型壺1、小型丸底壺2、壺もしくは鉢の底部3、高杯4が、第9b層から高杯5・6、砥石7・8がそれぞれ出土した。

1は口縁部が内湾ぎみに短く立上がり、体部最大径が中位付近にある。体部の調整は外面上半がナデ、下半が横方向のヘラケズリ、内面はナデおよびハケである。体部の肩付近に沈線が1条巡る。2は頸部の小片を図上復元したもので、体部に対して口縁部がやや発達した形態と考えられる。3は底部に直径1.0cmの小孔が焼成前に穿たれている。4は脚部の上端が細く、下方に太くなりながら屈曲して裾部が大きく開く。布留式中相のものである。

5は、柱状部に3条の沈線と1条の列点文をセットにした文様を3帯巡らせる。色調は橙色を呈し、胎土は精緻である。6は、脚柱部に三方の円形スカシ孔を穿ち、脚端部はナデにより面をもつ。これらは、弥生時代後期中葉のものであろう。7・8は凝灰岩製の砥石である。

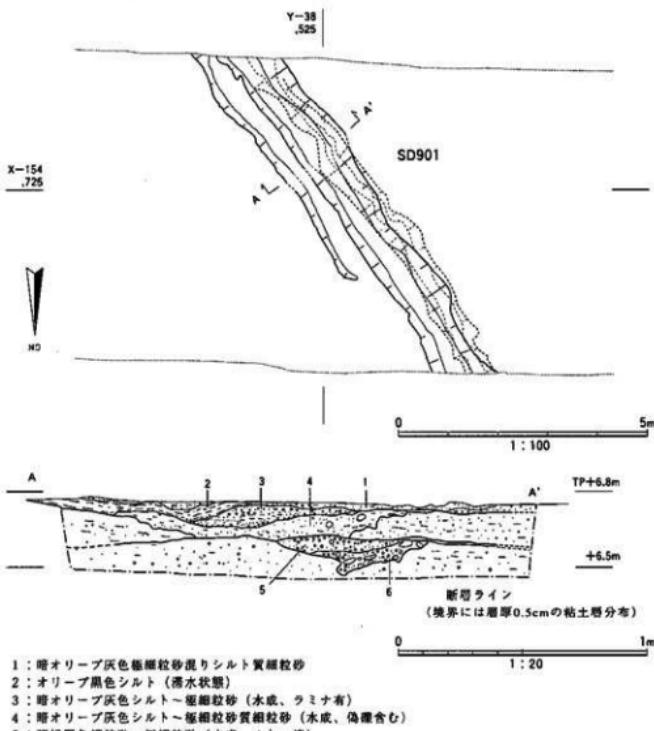


図7 SD901平・断面図

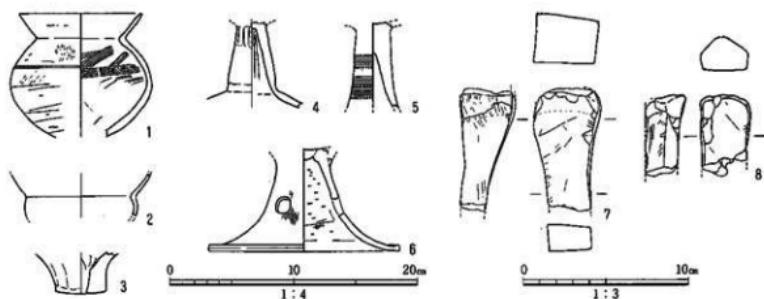


図8 SD901および第9b層出土遺物

SD901(1～4)、第9b層(5～8)

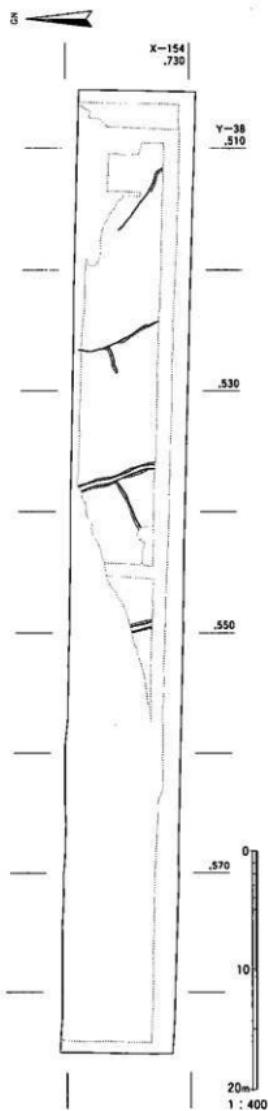


図9 第9a層上面検出遺構

2) 古墳時代中期

当該期の遺物を含む第9a層は、調査区東半に残存する作土層で、上・下面で遺構検出作業を行った結果、上面で水田、下面で溝群、基底面で溝SD902を検出した。

i) 水田(図9、図版3)

第9a層は、植物遺体の薄層・灰色シルト質粘土層で覆われていた。これらの自然堆積層を薄く除去しながら上面で検出作業を行い、低い畦と段で区切られる水田区画を検出した。

水田の区画は、東西からやや北東に振れた方向とそれに直交して造成されていた。区画の境界は、南東-北西方向では幅約0.5m、高さ約0.03mの低い畦畔を、これに直交する方向では、南が高く北が若干低い段を検出した。段として認識した境界部分に本来低い畦畔があった可能性もあるが、調査では確認できなかった。水田面の標高は調査区内でTP+6.7~6.8mであり、わずかに南東から北西の方向に傾斜している。このことから、地形の傾斜に直交した方向に畦畔をつくり、その間の傾斜を平坦にして水田面を造成したと考えられる。7筆の水田面を確認し、一筆の規模は東西が1.0~1.1mである。

第9a層は厚さ約10cmあり、上部の約5cmは泥質でやや暗色化し、下部には第9b層に由来する細かい偽礫と暗オリーブ灰色シルト質粘土層の偽礫が多く認められた。後者は後述する第9a層で検出したSD902の埋土と同一であり、水田はこの暗オリーブ灰色シルト質粘土層を直接の母材として耕起されたと考えられる。

第9a層から出土した遺物は、後述するような5世紀前葉の初期須恵器や韓式系土器のほか、内面をナデ消した須恵器大甕の破片などに限られ、これらが水田の時期の上限を示す資料である。この時期の遺物は第9a層の上下の地層からは出土していないことから、水田が営まれた時期を5世紀前葉と判断した。

ii) 溝群(図10・11、図版3・4)

第9a層を除去し、第9b層上で平面精査を行った結果、規

則的に並ぶ溝群を検出した。溝群は方向やまとまりからA～Eの4群に分けられる(図11)。

A群は調査区東端で南南東～北北西方向に並び、B群はA群の西側で東西に向きを変えて並ぶ溝群である。B群の南側には、C・D群が東西方向に平行して並び、西側で交差する。また、B～D群の一部を切ってE群が南北方向に並ぶ。A群は第9a層の上面で検出した段の高い側の肩に沿って分布するが、それ以外は水田の畦畔の方向や区画とは無関係に分布している。

A・B・E群は長さが1.0～1.5m、幅が0.3m前後ある。これに対しC・D群は、長さが0.5～1.0mと短く、連続せずに円形の窪みとしてのみ検出される個所もある。深さは0.1m前後、断面の形状は不整形で、底は平坦ではなく凹凸をなすものが大半であった。隣接する溝同士の間隔は0.3m前後、芯心の距離は0.7m前後である。

溝の埋土は暗オリーブ灰色シルト質粘土層と第9b層に由来する偽礫を多く含み(図11-3層)、第9a層の下半と共に通する。また、複数の溝の埋土上部には、第9a層の上部に相当する暗オリーブ灰色シルト質粘土層(同2層)が見られ、さらにE群の一部では、水田上面を直接覆う植物遺体の薄層(同1層)が溝上部の窪みにも堆積していた。また、溝群を掘削した際の加工面は、水田作土層の加工面と区別できなかった。以上のことから、これらの溝群は第9a層下面造構であり、第9a層上面の水田面でも溝の一部が窪みとして残存していたと判断される。

底で溝の加工痕跡を探すために、一部の溝について埋土を周囲の土とともに薄くスライスしたが、底付近で動物の爪跡や鋤痕などは確認できなかった。また、C・D群西半の周囲には、溝の一部と認識したものとは別に、円形の窪みが多数認められた。無秩序に分布する個所もあるが、溝の方向と平行して連続するものもある(図版4)。この窪みは直径0.1m前後の規模で、埋土は溝群の埋土と共通する。下位の第9b層を巻き込んで埋土が渦状に変形するものもあり、上から強い圧力を受けた踏込みのようにも見えた。

このような溝群と平面の特徴が類似するものとして、各

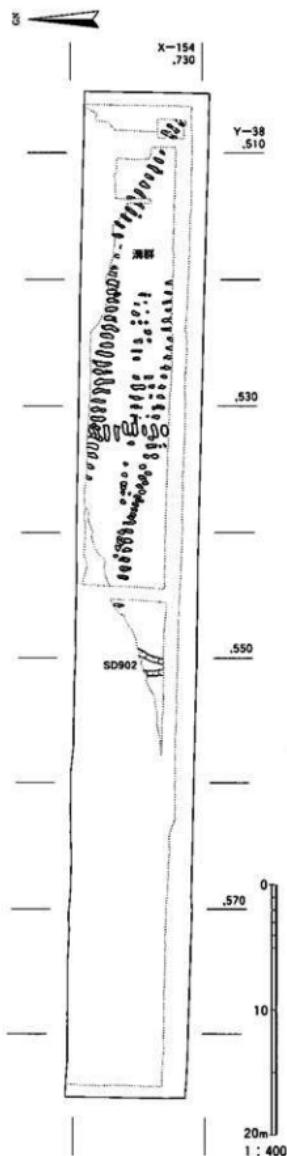


図10 第9a層下面・基底面検出造構

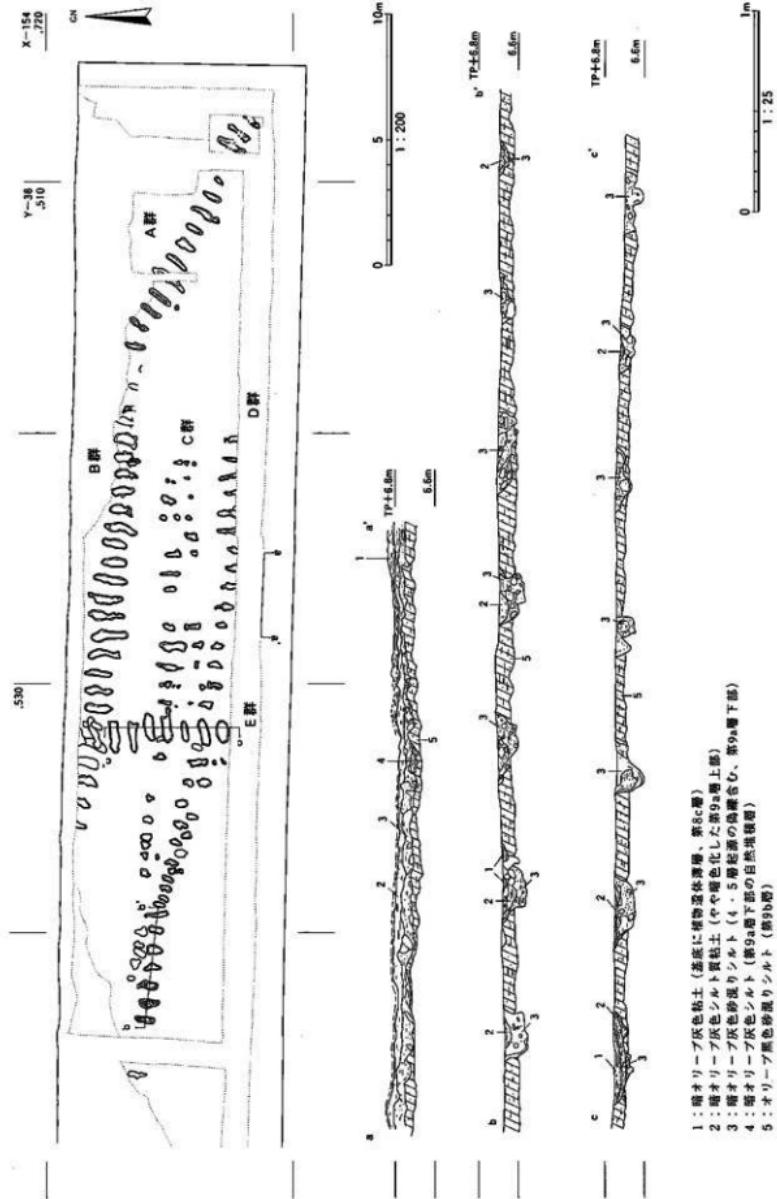


図11 第9層下面検出深鮮平・断面図

地で検出例が報告されている「波板状凹凸面」とされる遺構があげられる。この遺構の性格については、路面に枕木状に丸木を敷いた上を重量物が移動した痕跡[早川泉1991]、道路面の舗装地業の痕跡[飯田充晴1993]、牛馬が歩行した跡[東和幸2002]などの説があり、いずれも道路に係わる遺構と解釈する点で一致する。長原遺跡でも古墳時代後期～奈良時代の類似した溝群が検出されており、これを道路状遺構とする見解がある[京嶋覚2001]。

「波板状凹凸面」を道路に係わる遺構とする根拠としては、平面的な分布状況のほかに、凹凸の検出面やその上で「硬化面」が確認されることが大きい。また、道路の舗装地業の痕跡とされるばかり、溝内の埋土が遺構造成時の客土と認識されている。これに対し、今回検出した溝群の埋土は水田作土層と同一であり、溝と水田の加工面は区別できない。水田が営まれていた期間のある段階に、水田とは異なる目的でこれらの溝群が掘られた可能性は否定できないものの、地層の観察からは本遺構を道路に係わるとする積極的な根拠は見いだせなかった。したがって、溝群の性格については、水田の耕起作業に伴う痕跡の可能性をあげておきたい。

iii) 溝(図10)

5区の第9a層基底面で東西方向の溝SD902を検出した。幅1.3～2.0m、深さ約0.1m以下と浅いもので、自然の窪みであった可能性もある。埋土は暗オリーブ灰色シルト質粘土層である。遺物は出土しなかった。

iv) 出土遺物(図12、図版22)

第9a層出土遺物のうち、須恵器有蓋高杯蓋9、韓式系土器平底鉢10、同甕体部片11、石製平玉12を図化した。12はC群の溝の一つから出土したものである。

9は口径11.9cm、器高4.6cmの蓋で、中窪みの小さなつまみを有する。天井部と体部の境界の稜線は水平方向に鋭く突出し、口縁端部は明瞭な段をもたずに丸くおさめる。天井部外面には不整方向のヘラケズリを施し、内外面の調整は最終的にすべてナデによって仕上げている。TK73型式に併行すると思われる初期須恵器である。

10は口径12.4cm、器高10.0cmに復元できる韓式系土器平底鉢である。器壁が厚く、口縁部を短く折り曲げている。体部に細密な格子タタキを施したあと、口縁部をヨコナデし、体部下端をヘラケズリ調整している。底部にはゲタ状の圧痕が残る。外面には煤が付着しており、胎土中に雲母粒が多く含む点が特徴である。11は外面に繩席文タタキを施している。同一個体の破片が散乱して出土したが、復元することができなかった。10は朝鮮半島南部地域の特徴をよく残す平底鉢であり、9と同じ頃のものと考えられる。

12は幅1.0～1.2cm、厚さ0.2～0.3cmの平玉で、上端に小孔を穿っている。色調は濃緑色を呈し、石材は蛇紋岩と思われる。

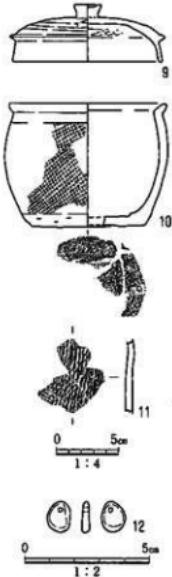


図12 第9a層出土遺物

3) 古墳時代後期～飛鳥時代

奈良時代の自然流路の調査を終了後、調査区西半でこれに先行する自然流路を検出した。流路の埋土は第7b～8b層に分けられる。

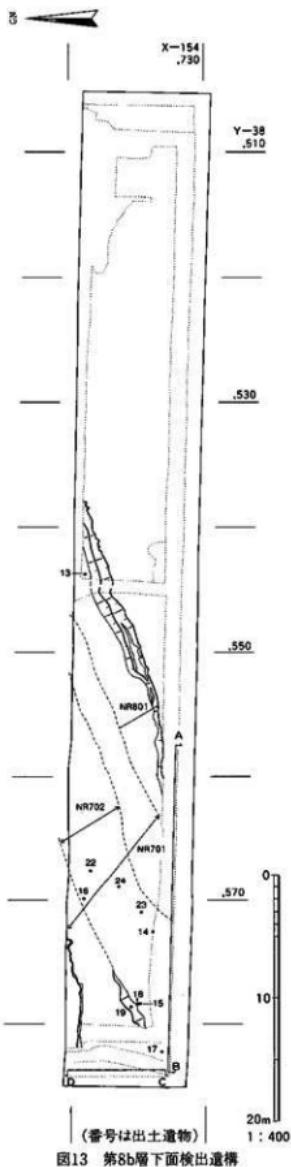
i) 自然流路(図13・14、図版5)

調査区西半で検出した北東～南西方向の自然流路で、周囲の地形から判断して東から西に蛇行しながら流れていると考えられる。下位の地層を大きく削っており、掘削限界深度のTP+6.2m前後まで掘下げたが、流路の底を確認することはできなかった。埋土は砂礫層の切合によって3層に大別でき、各砂礫層の間には暗色化したシルト層を挟む。また、流路外の調査区東半でも、これに対応する地層の重なりが確認でき、流路内で厚い砂礫層は東側にいくにつれて細粒化しながら層厚を減じ、その上には流れがおさまったことを示す暗色化した泥質な地層が薄く堆積していた。このようなサイクルが3回確認でき、下位から第8b～第7b層に区分した。流路は3回の大きな氾濫によって埋没しており、古い順からNR801、NR701、NR702と呼び分けて報告する。

NR801 植物遺体を多く含むシルト～中粒砂層(第8b層)で埋る自然流路である。第8b層は流路外の調査区東半では、灰色シルト質粘土層(第8c層)を直接覆っていた。調査区西半で南肩を検出したのみで、北肩は後の流路を埋める砂礫層で削られているため、規模は不明である。流路内の第8b層上位には暗色化した薄いシルト層が分布しており、これは流路外の調査区東半に分布する第8a層に相当すると考えられる。

NR801東端の肩部から、自然木とともに木鍤13が出土した(写真3、図15)。

NR701 NR801よりもやや北側へ移動し、シルト～中粒砂層(第7d層)で埋る自然流路である。第7d層は流路外の調査区東半にも連続しており、ごく薄い暗オリーブ灰色粘土質シルト層(第7e層)を直接覆う。南壁断面で南肩の一部を、調査区北西端で北肩を確認した(図14)。幅は約11mである。また、第7d層の上位には植物遺体を多く含むシルト～細粒



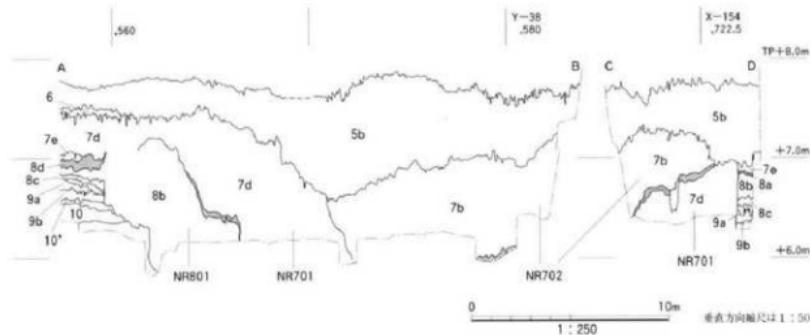


図14 トレンチ南・西壁地層断面模式図(位置は図13に示す)

砂層がたれ込んでいた。これは流路外に連続して分布する第7c層に対応すると思われる。第7d層から遺物は出土しなかった。

NR702 粗粒砂層(第7b層)で埋没する自然流路である。調査区東半に分布し、第7c層を直接覆う暗オリーブ色粘土質シルト層と対応すると考えられる。後述する奈良時代の自然流路NR501に切られている。

NR702中央付近の砂層中から、土師器壺14、細頸壺16、杯C20、ミニチュア高杯21・22、須恵器横瓶23、大甕24が、調査区南西隅の流路肩付近で須恵器壺17が出土した。ほとんどが完形品であり、特に大甕24は掘下げ中に口縁部を破壊してしまったが、体部は完形の状態で砂層中に埋没していた。出土状況から、比較的近接した場所から流されてきたと推測される。また、NR702の底に堆積した暗色化したシルト層(第7c層)の上面では、土師器壺15、須恵器大甕19、ヒヨウタン18が隣接して出土した。土師器壺15とヒヨウタン18は直立した状態で接しており、須恵器大甕19はシルト層上面に接してつぶれた状態で出土し、復元するとはば完形になる。ヒヨウタン18は下半部のみ残存していたが、出土状況からみて容器として用いられた可能性がある。

なお、後述する遺物の年代観からNR702は7世紀前半に埋没したと考えられる。NR801・701から



写真3 NR801木製品出土状況(南から)

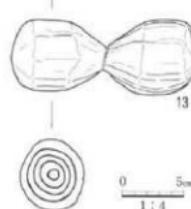


図15 NR801出土木製品

は年代を決める遺物が出土していないが、下位の第9a層から古墳時代中期の遺物が出土している点から、古墳時代後期頃とみておきたい。

ii) 出土遺物(図15~17、原色図版2、図版12・13・22)

上述したように、NR801内の第8b層からは木錘13が、NR702内の第7c層上面からは土師器壺15、須恵器大壺19、ヒヨウタン18が、NR702内の第7b層からは土師器壺14、細頸壺16、杯C20、ミニチュア高杯21・22、須恵器壺17、横瓶23、大壺24が、それぞれ出土した。

13は木錘である。長さ15.0cm、厚さ6.1cmで、丸太材の両端および中央部を整形したものである。材質はコナラ属アカガシ亜属である(第Ⅲ章第2節)。

14は体部が球形で、すぼまった頸部から口縁部が外湾する壺である。体部外面に継および横方向の細かいハケを施したあと、口縁部内外面にヨコナデを施す。体部内面はナデ調整が基本であるが、最終的に上半から頸部にかけて、右上がり方向に粘土を搔き取るようなケズリを施す。残存状態は良好で、使用した痕跡がほとんど認められない。15は頸部があまりすぼまらない壺で、底部は平底に近い。体部および底部外面にタテハケを施したあと、口縁部内外面にヨコナデを加える。体部内面の調整は下半が粘土を搔き取るような粗いナデ、上半がヨコハケ後ナデである。生駒西麓産の胎土で、外面の一方には煤がこびりついている。16は口縁部を失した細頸壺で、扁平な体部とやや外反ぎみに立上がる細長い頸部をもつ。外面調整は、体部下半がヘラケズリ、上半が横方向のヘラミガキ、頸部がヨコナデである。胎土は精良である。20は口径17.2cm、器高6.0cmの杯Cである。底部外面にヘラケズリを施したのち口縁部に横方向のヘラミガキを加え、内面にはラセンおよび放射状の暗文を施す。21・22はミニチュアの高杯で、21は脚裾部をタテハケ、22はユビオサエで仕上げている。19は口径32.4cm、器高60.8cmの大壺である。体部は上部に最大径があり、外面の上半2/3に継方向の平行タタキ、下半1/3に不整方向の平行タタキを施したのち、上半部にカキメを巡らす。内面には同心円状の当て具痕が残る。当て具痕は下半1/3と上半2/3で原体が異なっており、下半の当て具痕は底部の最終整形時に付いたものである。口頸部には粗雑な沈線を3条巡らす。24は口径32.4cm、器高60.2cmの大壺である。体部外面は上半に横方向の平行タタキののち、底部付近に不整方向の平行タタキを施す。内面には同心円状の当て具痕が見られるが、中位付近の当て具痕はナデ消されており、底付近には最終整形時の当て具痕が見られる。口頸部の中位付近には粗雑な沈線を2条巡らす。17は完形の壺である。口縁部から体部まではナデ調整、体部下端にはヘラケズリを施し、底部には糸切り痕が見られる。底部には直線1条の線刻がある。23は完形の横瓶で、製作の手順がよくわかる資料である。まず、俵状の体部を外面平行タタキによって成形したあと、一方に偏ってカキメを巡らせ、その後に口の部分を粘土を貼付けて閉じ、再度この部分にタタキを施す。口縁部は体部の整形後に付けられており、内外面をヨコナデで仕上げている。体部内面には同心円状当て具痕が見られ、体部片方の口を開じた部分にも当て具痕がある。

以上のNR702出土遺物のうち、土師器の杯C20や壺14・15は飛鳥IIに属するものであり、ほかもほぼ同じ頃のものであろう。

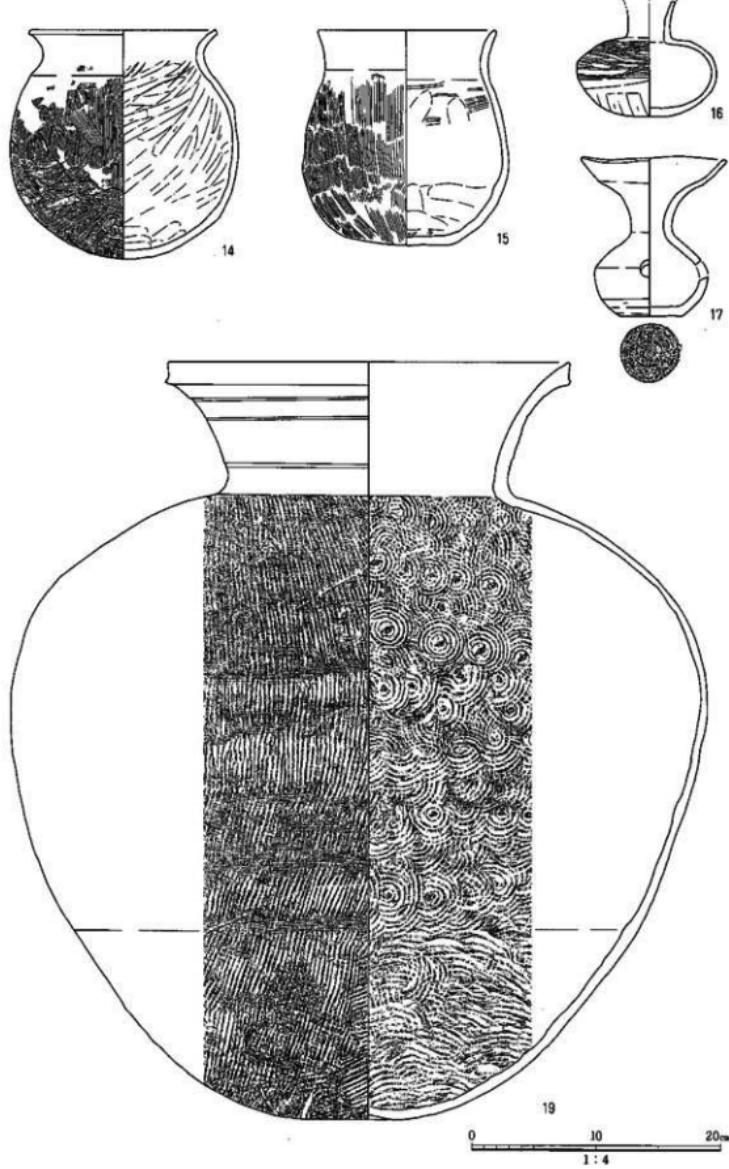


圖16 NR702出土遺物(1)

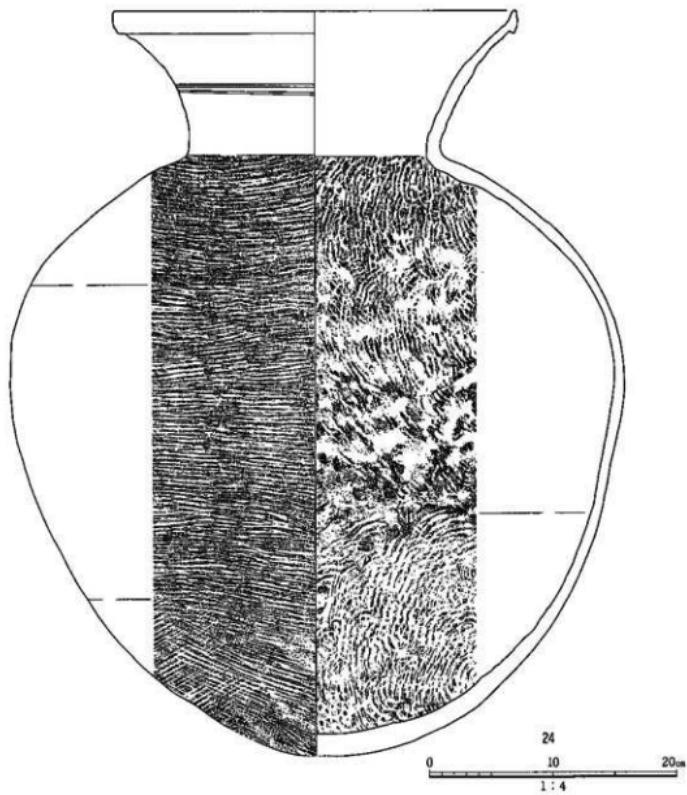
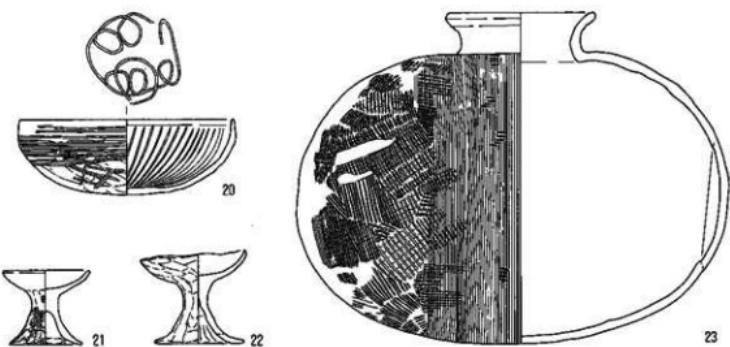


図17 NR702出土遺物(2)

3) 奈良時代

湿地環境下で堆積したとみられる第4d層を除去後、砂礫層で埋る自然流路NR501を検出した。流路内からは奈良時代のミニチュア土器・墨画土器を中心とした多量の土器類やおびただしい数のウシ・ウマの骨が出土した。また、調査区のはば中央で溝SD501を検出した。

i) 溝(図18)

SD501は幅0.5m、深さ0.1mの東西方向の溝である。第6層上面から掘込まれており、埋土は第5b層に相当するオリーブ褐色シルト層である。東側は第5a層によって削られており、端は確認できなかつたが、本来はNR501と連絡していた可能性がある。遺物は出土しなかつた。

ii) 自然流路(図18~23、図版6~10)

NR501は東から西に蛇行しながら流れしており、調査区内の東半と西端で分かれて検出した。東半では、東から北西に湾曲する流路の南半部分を確認し、西端では北北東~南南西方向に向きを変えている。西端で流路の全体を検出し、規模は幅約11m、深さ約1mである。また、東半の流路南肩には、幅1.5m、高さ0.2mの土手が盛られていた。

NR501は砂礫層と有機質を多く含む砂混りシルト層との互層で埋っており、第5a層、第5b層、および第6層に大別した。

第6層は東半流路の最下部で確認した暗緑灰色粘土質シルトおよび黒褐色シルト~中粒砂層である(図19~16・17層)。上半にはシルト~細粒砂を埋土とする踏込みが認められた。土手の外側に分布するオリーブ黒色シルト質極細粒砂層(同10層)に対応する。

第5b層は、東半の流路下半部および、西端の流路全体を埋め、東半では下部の灰色砂礫層(同9層)と、上部の有機物を多く含むオリーブ黒色砂混りシルト層(同4層)とに分けられる。上部層には、現地で生息していたものとみられるドバガイやイシガイの殻が多く含まれていた。南側の流路外に分布するシルト~細粒砂層(同3・5~8層)に相当し、最上部の細粒化した部分(同3層)が第5b層上部に対応する。また、1・2区間に設定した南北畦と南壁の境付近では、本層内から掘込まれた土壤があり、埋土には偽縛がレンズ状に薄くなつて並んでいたことから(同5層)、水を多く含む場所で掘り返されたと考えられる。また、流路外の第5b層(同21層)内では、ヒトや偶蹄類による踏込みが顕著であった(写真4)。

第5a層は、NR501を最終的に埋める灰色砂礫層であり(同2層)、調査区東半にのみ分布する。1・2区間に設定した南北畦断面では、下位の地層を削ってシルト~砂礫層が厚く堆積していた(同12~15層)。

NR501内からは、墨画土器やミニチュア土器を中心とした土師器や須恵器・木製品・鉄器のほか、ウシ・ウマの骨を中心にイヌ・スッポンなどの動物遺存体が多く出土した。図20~23は遺物の出土状



写真4 第5b層内の踏込み(1~2区、東から)

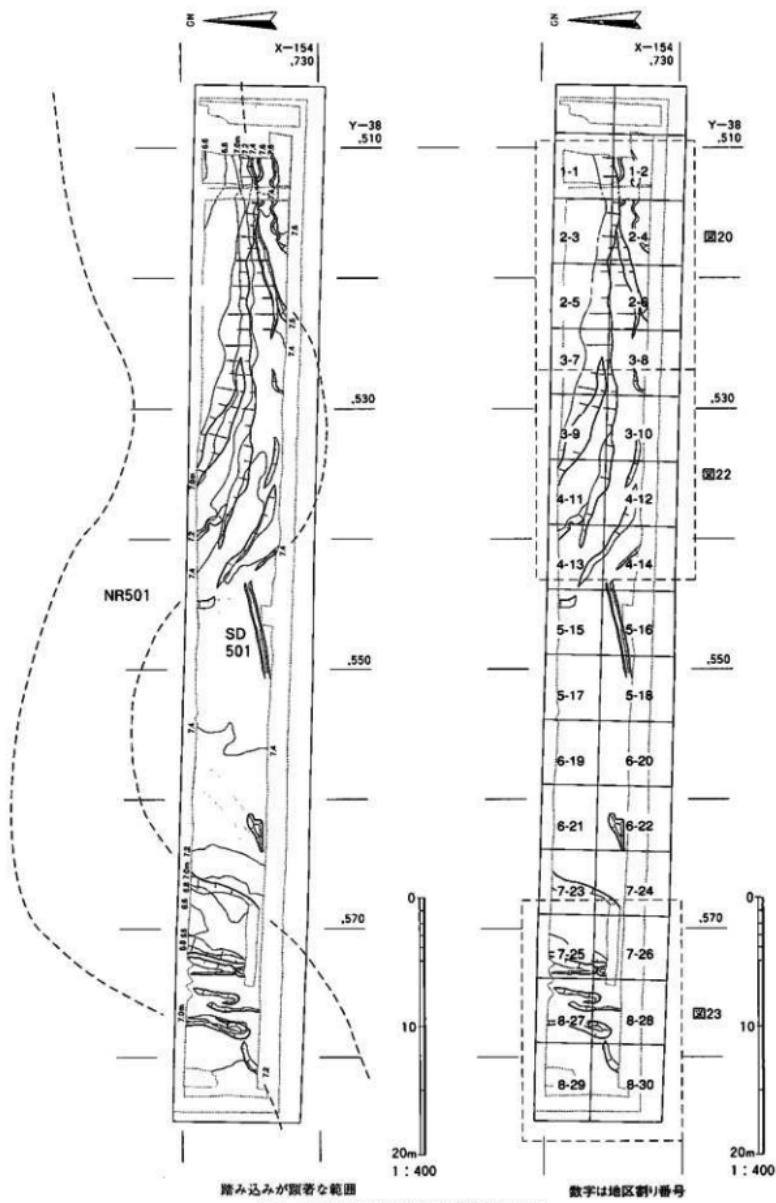


図18 第6層上面平面図および地区割り図

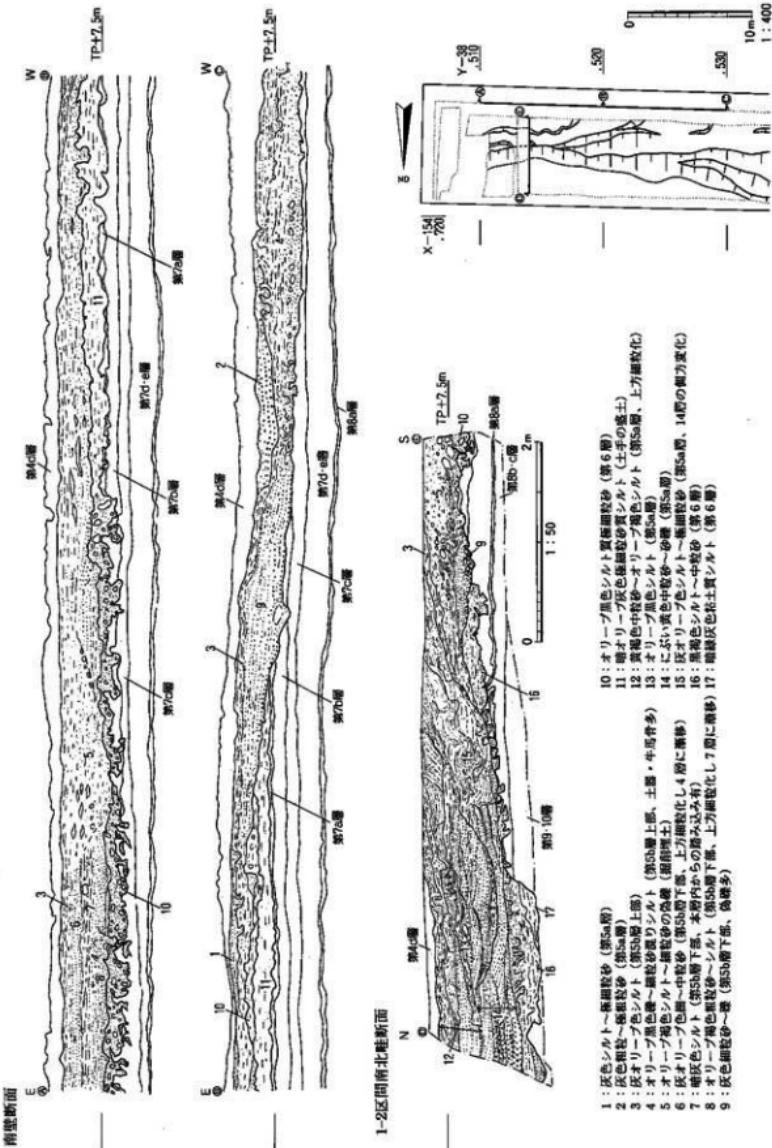


図19 NR501東半および南壁地層断面図

- 1:灰色シルト～薄間氷鉄(第6番)
- 2:灰色粗粒～極粗粒(砂礫)
- 3:灰色リーフシルト～薄間氷鉄(第5番上層)
- 4:オリーブ色シルト～薄間氷鉄(第5番下層)
- 5:灰オリーブ色シルト～薄間氷鉄(第5番下層)
- 6:灰褐色シルト(第5番下層、本層内から上の層のみ有)
- 7:灰褐色シルト(第5番下層、本層内から上の層のみ有)
- 8:灰褐色粗粒シルト(第5番下層、本層内から上の層のみ有)
- 9:灰色細粒砂(第5番下層、本層内から上の層のみ有)
- 10:オリーブ色シルト(第6番)
- 11:オナリーブ色細粒砂質シルト(土手の底土)
- 12:黄褐色中粒砂(オリーブ褐色シルト(第5番上層、上方細粒化))
- 13:オリーブ褐色シルト(第5番上層)
- 14:いぶい黄色地帯(第5番上層)
- 15:オオリーブ色シルト～中粒砂(第5番)
- 16:黒褐色シルト(第5番)
- 17:暗褐色灰岩質シルト(第6番)

況図である。図中の土器・木製品は報告書の統一番号で表記し、動物遺存体は調査現場での取上げ番号をそのまま付している(本文ではR-と表記)。また、遺物の出土地点は、調査時の地区割りを図18右のように細分して表記した。遺物の分布は、出土層準や出土状況および組成からいくつかのまとまりに分けることができる。以下では、まとまり毎にその特徴を記述する。

流路東端の1-1、2-3区では、第5a層が第5b層を削って厚く堆積しており、第5a層下部の砂疊層(図19-14層)からは、須恵器・土師器などの土器類とともに、ウシ・ウマの骨が散在して出土した(図20)。土師器・須恵器は完形に近い杯類が目立ち、土師器ミニチュア壺・墨画土器壺もある。墨画土器は顔を表現した132・134や、直線のみで構成される147・153などがあるが、縦方向の直線を巡らせたものが目立つ。また、今回の調査で出土した3点の墨書土器(中、井?、四?)も、この範囲から出土した。後述するように、この範囲の第5a層から出土した土器は、西側の第5b層出土土器よりも型式的にやや新しい傾向がある。

1-1区の第6層内からは、2匹の小型のスッポン(R581・582)が約0.8m離れて出土した(図20、図版8)。ともに全身骨格がほぼ遺存しており、甲羅を上に向いた状態であった。R582は甲羅の上に首がのびた状態で頭が乗っていた。このほか、2-3区からも別個体のスッポンの下頸骨(R602)が出土している。大阪府下の例で、牛馬骨が大量に出土する湿地や流路跡からスッポンやイシガメの出土がしばしば報告されており、肉食性の亀と牛馬利用残滓との関連性が指摘されている[久保和士1999a]。本例も、流路に投棄された牛馬の残滓を目的に流路内に集まってきた可能性がある。

2-3区では、一頭分のウシの骨がまとめて出土した(図21、原色図版1、図版7・23)。これをウシAとする。角の付いたままの頭蓋骨(R595)が南東端の流路肩にあり、そこから北西側に約0.4m離れて胴体部分の骨がまとまっていた。椎骨はつながったままで、北西にややずれた位置からは肋骨が並んで出土した。このことから、このウシAは当初から肉が付いた状態でこの場所にあり、まず頭部から胴体が離脱したあと、肉の腐朽とともに肋骨が椎骨から離脱して低い側にずり落ちたと推測される。周囲には下頸骨や後足の骨が散乱していた。左右後足の各部位はほぼ遺存しており、中足骨(R517)・足根骨(R518)・距骨(R519)・踵骨(R520)はつながったままであった(図版8)。これに対し、左右前足は脛腓骨以下の部位がまったく認められなかった。当初から両前足が存在していないかったと考えられる。ウシAの下からは、ウマ下頸骨(R540)やイヌ頭蓋骨(R593)など、別の動物の骨も出土している。

ウシAは、第5a層の最下部に相当する砂疊層(図19-14層)が側方に細粒化した灰オリーブ褐色シルト～極細粒砂層(同15層)に含まれており、穴を掘って埋められた痕跡は認められなかった。1・2区間の南北畦断面の観察によると、15層は畔の上端付近まで分布していることから、11層堆積時の水位は少なくとも底から約1mはあったと予想される。ウシAは、第5a層を堆積させた河川の氾濫時に、水流の弱くなった流路の肩付近で埋没したものとみられる。

ウシAの西側には、約1.5mの範囲で遺物が出土しない空白地があり、これをはさんで西側の2-5、3-7、3-9区の東西約10mの範囲からは、多くの土師器・須恵器・木製品やウシ・ウマの骨が出土した。多くが第5b層下部の砂疊層から第5b層上部のシルト層に含まれており、第5a層の砂疊

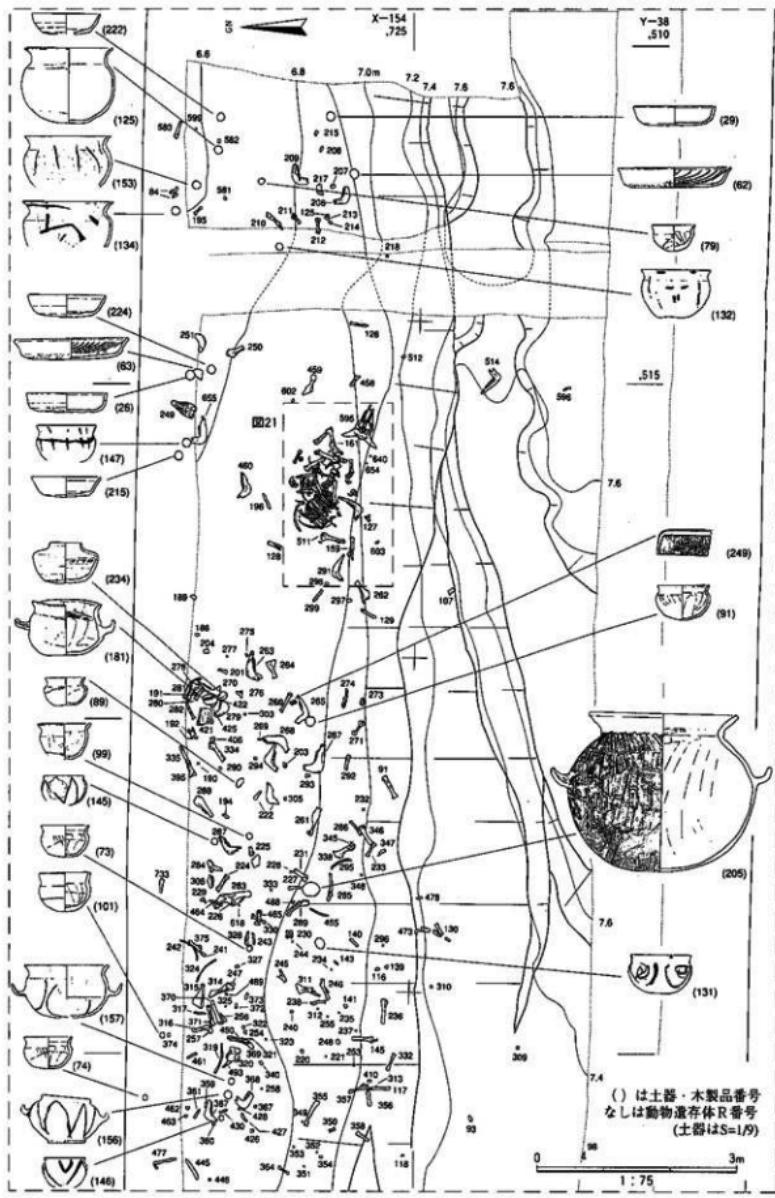


図20 NR501遺物出土状況(1-1区～3-8区)

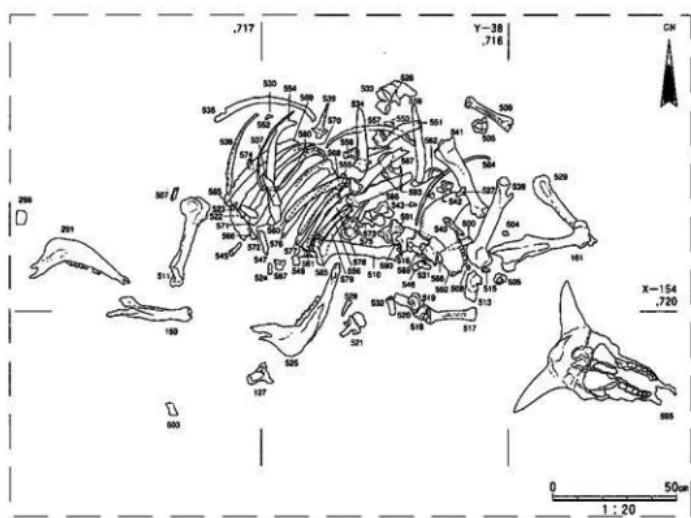


図21 2-3区ウシA出土状況

層から出土した遺物は少ない。

この範囲の遺物の分布をみると、ウシ・ウマの各部位の骨と土師器・須恵器が混在した状態であり、上述したウシAのような肉がついたままで埋没したこと示すものは認められなかった。複数の骨には刃物による切痕が認められることから(第Ⅲ章第1節)、死後に解体された骨をまとめて投棄したと考えられる。

木製品は、横櫛・曲物の底板・留針・火鑽板などが出土した。2-5区では、横櫛249がウシ下顎骨(R265)・ウマ中足骨(R266)と隣接して出土しており(図版10)、3区でも別個体の横櫛250が出土している。

この範囲から出土した土器類の組成をみると、東側の1-1、2-3区と比べて、杯類が少なく逆にミニチュア壺が多いという特徴がある。また、墨画土器も多く出土し、鋸齒状に斜線を巡らす145・146・156や、口縁部内外面に波状文を施すといった特徴や顔の表現が共通する128・130・142などが、近接して出土する傾向にある。さらに、把手付壺および壺も5点あり、墨画のある156・157は隣接して出土する。このように、共通する特徴をもつ個体がまとまって出土する傾向が見られることから、遺物の分布状況は祭祀の使用や投棄の単位をある程度反映している可能性がある。また、東側の1-1区と2-3区との間に認められる土器の特徴の違いは、出土層準が異なることや、若干の型式差が認められることから、時間差を反映したものと考えられる。

西端のNR501でも、土師器・須恵器やウシ・ウマの骨が出土しているが、量は少ない(図23)。土師器には顔の表現のある墨画土器や、ミニチュア土器も含まれる。

iii) 出土遺物(図24~37、写真5、表6・7、図版14~22)

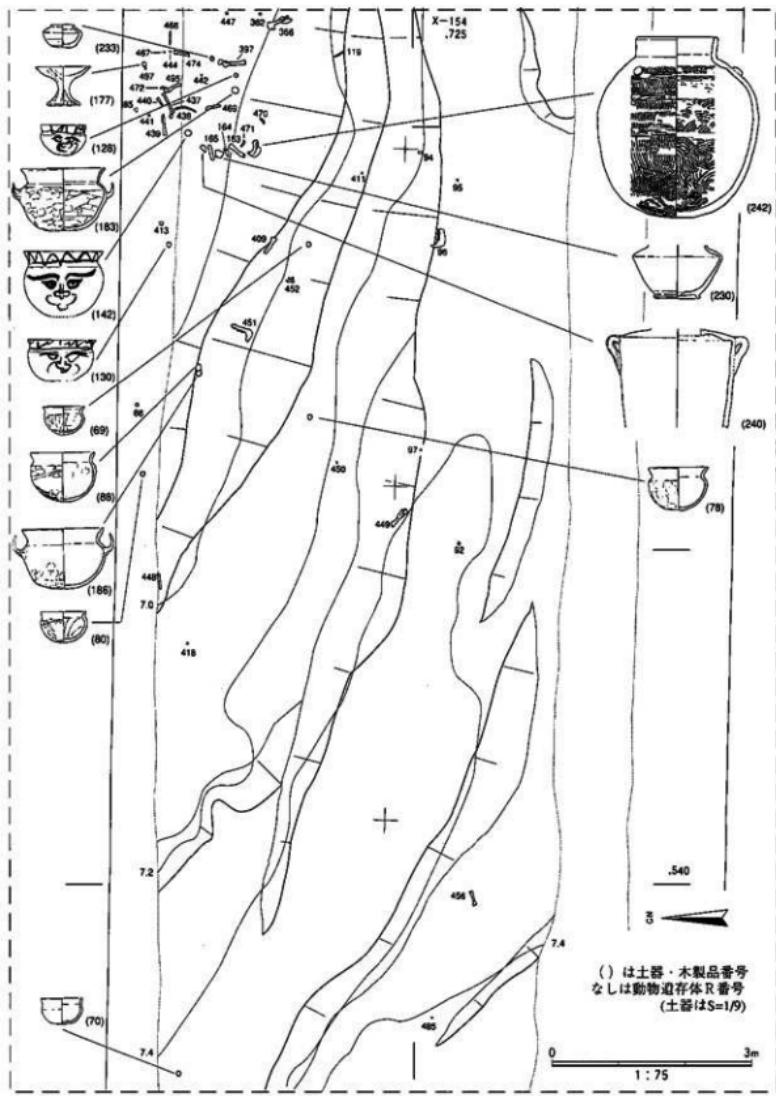
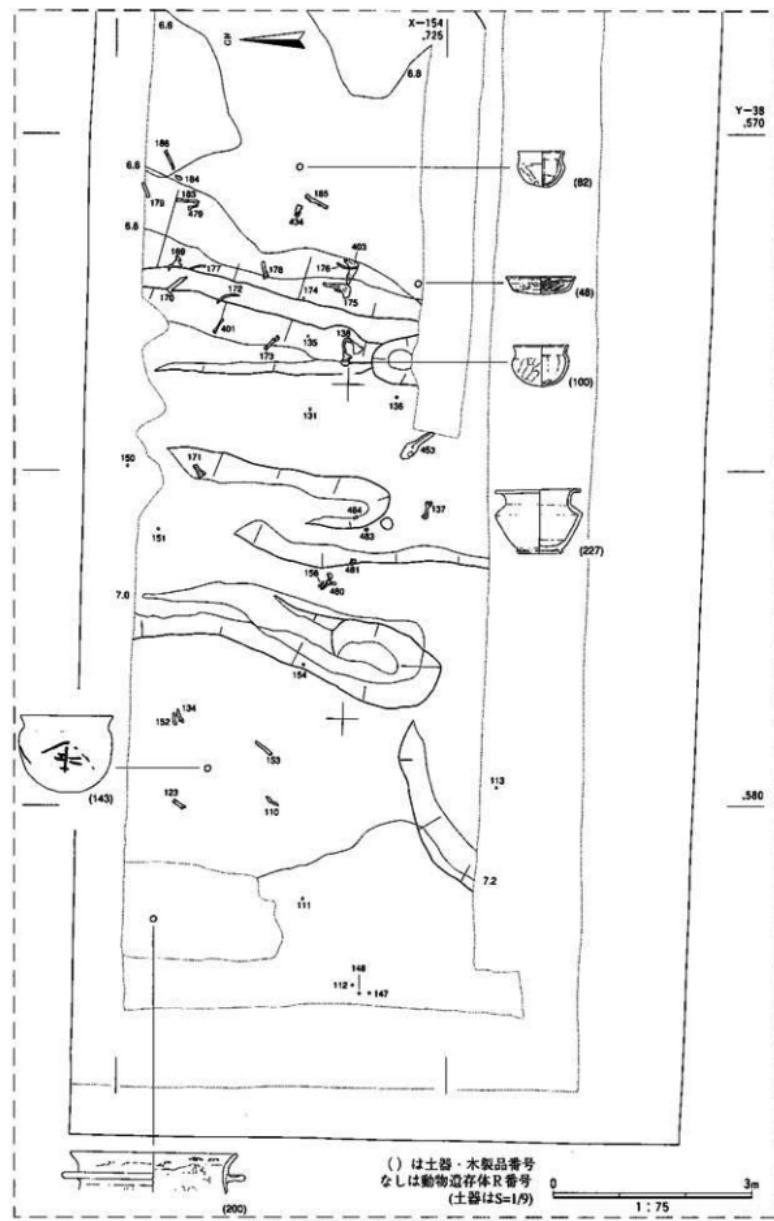


図22 NR501遺物出土状況(3-7~4-14区)



NR501から出土した遺物のうち、動物遺存体については第Ⅲ章1節でとりあげ、ここでは土器・木製品・鉄製品について報告する。なお、各遺物の法量、色調、出土地区および層準については、表6・7に示す。

土器類は、須恵器に比べて土師器の割合が圧倒的に多く、なかでも祭祀的な色彩の強いミニチュア壺・墨画土器が目立つ。

土師器の杯・皿類は、内面に暗文をもたない25~39と、暗文をもつ40~64に大別される(図24・25、図版14)。両者の比率は3:5で、暗文をもつものがやや多い。29・30・40・43~45・49・50・62~64は第5a層、25・26・28・31~39・41・42・46~48・51・53~55・58~61は第5b層、27は第5a~5b層、52・56・57は第6層からそれぞれ出土した。

暗文をもたないものは杯に限られ、おおまかに平らな底部から口縁部が斜めに開いて立上がる25・26・28・29・33・34・36~39と、丸みを帯びた底から口縁部が斜めに開いて立上がる27・30~32・35に分けられる。口径は13.0~16.6cm、器高は2.8~4.3cmのものがあり、ややばらつきがみられる。39は口縁端部をつまみ上げ、底部外面にヘラケズリを施したのち口縁部外面にヘラミガキを加えており、後述する暗文をもつ杯の影響を受けたものと思われる。それ以外は口縁端部を丸くおさめるか、内傾し面を有するものが主体を占め、外側調整は口縁部に横方向のナデを施し、底部にはユビオサエの痕が顯著に残る。

暗文をもつ杯・皿類は、杯C・杯A・皿Aに分けられる。

杯Cは40~44・52・56がある。40~44は口径11.9~13.4cmの小型品である。40・43は口縁端部が斜め外方に折れ曲がり、42は口縁端部をつまみ上げている。40・41は口縁部外面に横方向のナデを施し、それ以外は外面にナデ・ユビオサエの痕が残る。43~45は内面に1段の放射状暗文とラセン状暗文が見られ、40~42にも1段の放射状暗文が残る。56は口径12.7cm、器高4.3cmと杯部が深い。外面は底部にヘラケズリを施したあと口縁部に横方向のヘラミガキを加えている。内面は1段の放射状暗文とラセン状暗文をもつ。ほかの杯より下層の第6層から出土しており、型式学的にも古い。

杯Aは小型の47~49、中型の50・51、大型の58~64がある。47・48は口径11.7~12.3cm、器高2.8~3.1cm、49は口径14.2cm、器高3.3cmである。外側調整は口縁部に横方向のヘラミガキを施し、底部にナデおよびユビオサエの痕が残る。内底面にラセン状暗文を施し、47は口縁部内面に2段の放射状暗文を、48は連弧状暗文と放射状暗文を、49は1段の放射状暗文をもつ。47の放射状暗文は48・49に比べて細かい。50・51は口径15.3~16.8cm、器高2.4~2.8cmと浅い。外側調整は口縁部が横方向のナデで、50は底部にユビオサエの痕が残り、51は底部全面にヘラケズリを施し、口縁部と底部の境界に部分的にヘラミガキを加える。内面にラセン状暗文と1段の放射状暗文をもつ。50は色調が灰白色を呈し、ほかと異なる。57は口径18.2cm、器高5.2cmと深い形態のもので、58~64は口径19.4~20.7cm、器高3.5~4.0cmである。ともに口縁端部をつまみあげており、62~64は口縁端部の外への張出しが強い。また、58・59は口縁部と底部との屈曲が強い。58~61は外側調整が口縁部に横方向のヘラミガキ、底部には58・60・61がヘラケズリ、59がナデを施す。また、58・59は内面にラセン状暗文と2段の放射状暗文を、60・61は連弧状暗文と放射状暗文をそれぞれもつ。62~64は口縁部外面の

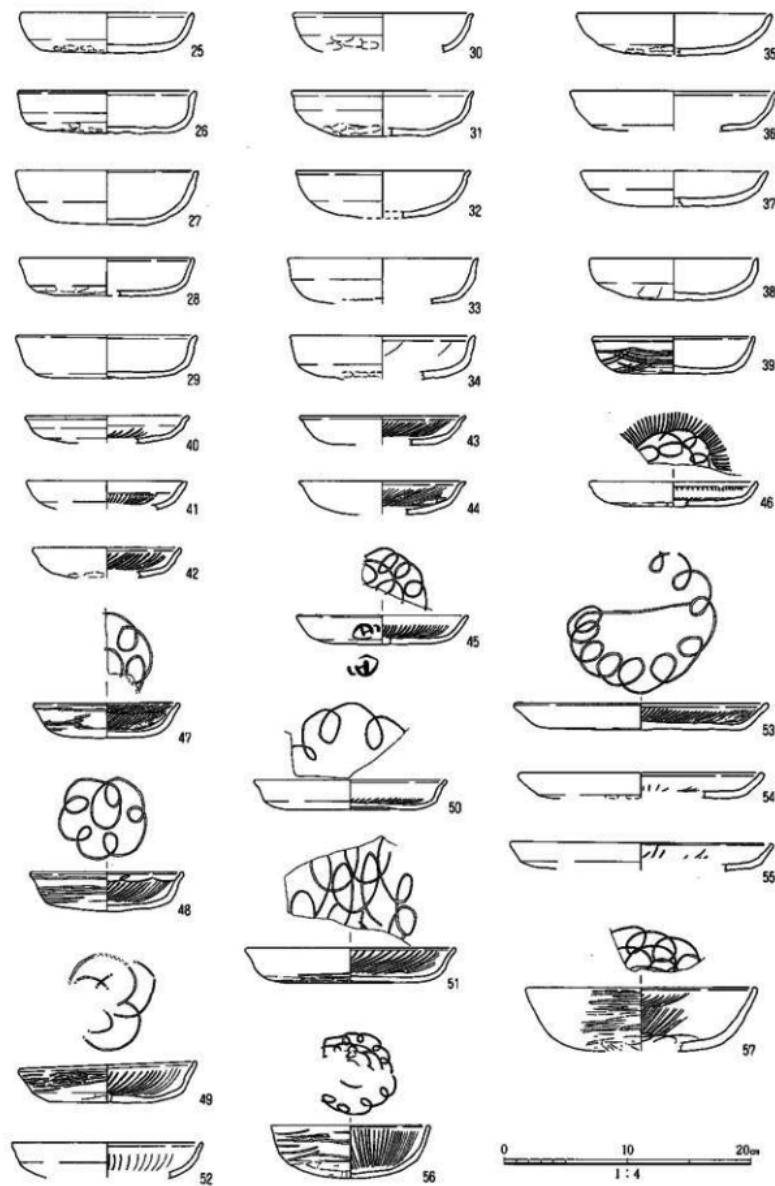


图24 NR501出土遗物(1)

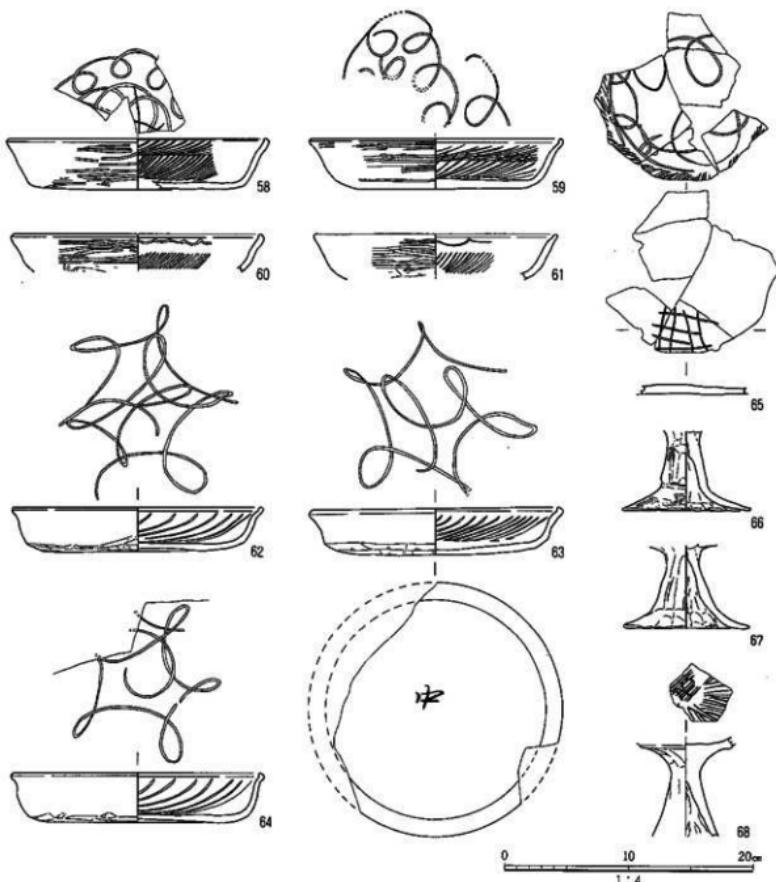


図25 NR501出土遺物(2)

ヘラミガキが省略されており、底部の全体にヘラケズリを施す。内面にはラセン状暗文と1段の放射状暗文をもつ。ラセン状暗文は58・59と比べて簡略化しており、放射状暗文の間隔も広い。63は底部外面に「中」の墨書がある。62~64は器形、調整ともに共通しており、焼成も硬質である。

暗文をもつ皿Aは45・46・53~55がある。45・46は口径13.4~13.8cm、器高2.0~2.3cmである。口縁端部を丸くおさめており、外面調整は口縁部が横方向のナデ、底部にはユビオサエおよびナデの痕が残る。内面には放射状暗文1段とラセン状暗文を施す。45は口縁部外面に「西」と思われる墨書がある。53~55は口径19.4~20.3cm、器高2.0~2.2cmである。口縁端部を肥厚させている。外面調整は口縁部が横方向のナデ、底部がナデおよびユビオサエで、内面には1段の放射状暗文を施し、53は内底面にラセン状暗文がある。

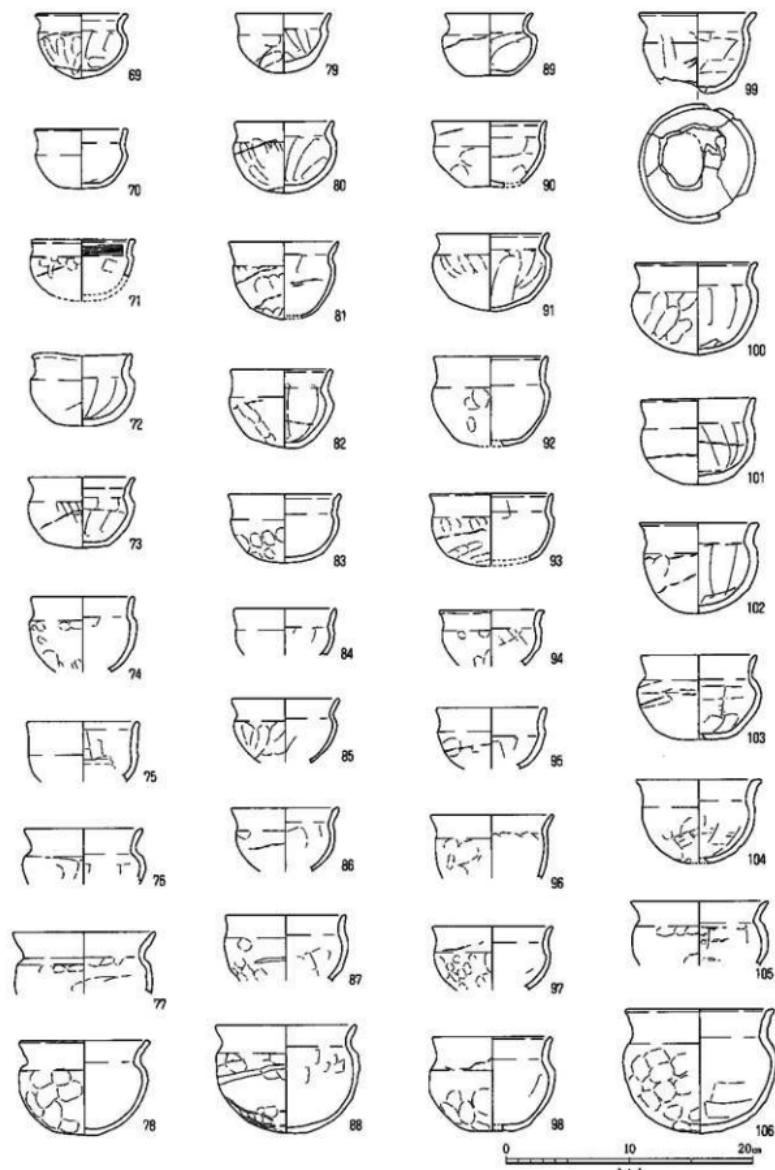


図26 NR501出土遺物(3)

65は杯の底部外面に格子状の線刻を施す。類似した線刻をもつ杯は、長原遺跡中央地区のNG86-109・87-35次調査でも出土している[大阪市文化財協会1992]。

66~68は高杯である(図25)。68は杯底部に段を有し、内面には放射状暗文およびラセン状暗文を施す。

69~106はミニチュア壺である(図26、図版15・16)。69・72・79・83・106は第5a層、70・71・73~78・80~82・84・85~87・89・91~93・95・96・98~105は第5b層、88・90は第5a層ないし第5b層、94は第6層からそれぞれ出土した。

口径は7.0~11.8cm、器高は4.7~10.5cmのものがある。体部は扁平な球形で、口縁部は外面に強いヨコナデを施すことによって短く外反するもので占められる。口縁端部は丸くおさめるものや平坦な面をもつものがある。体部の調整は外面がナデもしくはユビオサエ、内面が板ナデもしくはナデである。69・79・89などは、体部外面に粘土の継ぎ目が明瞭に残っており(図版15)、粘土紐を巻き上げて成形したことがわかる。総じて内面に対して外面の調整が粗雑である。99は底部が円形に欠損しており、意図的に打ち欠かれた可能性がある。なお、これらの壺には煤の付着がまったく認められない。

107~127は中型の壺である(図27、図版17)。107・111・119・125は第5a層、109・110・112~118・120~124・126・127は第5b層からそれぞれ出土した。

口径は13.2~19.0cm、器高は11.0~13.7cmのものがある。形態上、ミニチュア壺との区別が難しいが、外面に煤が付着し、実際に火にかけられたことが明らかな107より大きいものをこれに含めた。

108・126以外の器形は、体部が扁平な球形で、口縁部が外面に強いヨコナデを施すことによって短く外反し、体部と口縁部との境界に稜をもつ。口縁部の形態は、外反し端部を丸くおさめるものが主体を占めるほか、111~115のように口縁部が直立ぎみに立上がり、端部を短く折り曲げるものもある。体部の調整は外面がナデもしくはユビオサエ、内面が板ナデもしくはナデである。111は、体部外面にユビオサエのうち、中位付近に粗い横方向のヘラミガキを加えており、120の肩部にも同様のヘラミガキが見られる。また、124・125の体部下半には、成形時の型痕とみられる段がリング状に巡る。

108・126は外面にハケメ調整を施す壺である。体部から口縁部にかけて緩やかに外反し、境界に明瞭な稜は認められない。126は完形に復元でき、体部外面の上半には縦方向のハケメの下に横方向の粗いハケメが残り、内面にはヘラケズリを施している。108は胎土中に長石粒を多く含み、ほかと大きく異なる。

中型の壺のうち、107~109・121には外面に煤が付着していた。

墨画土器は128~167がある(図28・29、図版18・19)。128・132・134・153は第5a層、129~131・133・136~150・152・154~160・162・162~167は第5b層、135・151・161は第5aないし5b層からそれぞれ出土した。

156が把手付壺、157・158が把手付壺で、それ以外は外面調整がナデ・ユビオサエのミニチュアもしくは中型の壺である。

128~143は外面に人面を描いた墨画土器である。128~132・142・143はほぼ完形品である。これ

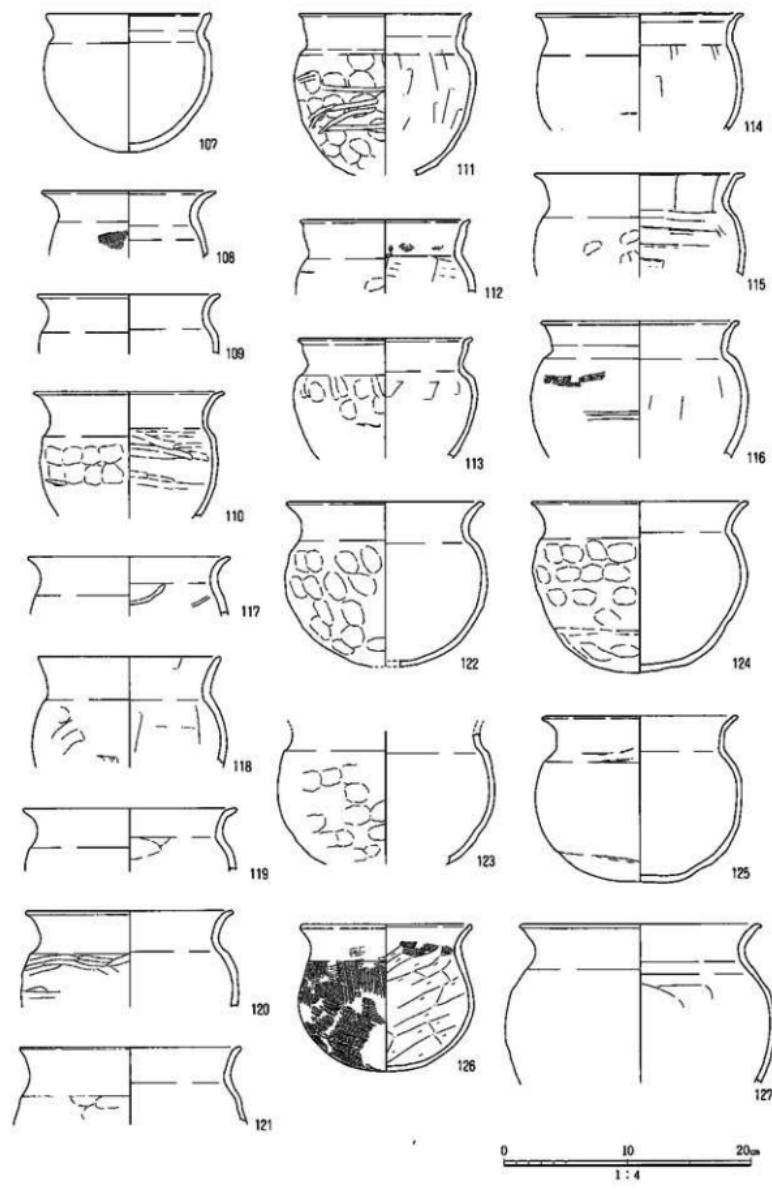


図27 NR501出土遺物(4)

らのうち、大きさのやや異なる128・130・142は顔や文様の表現が共通する。ともに口縁部の外外面に波状の文様を配し、外面の波状文下に直線を巡らす。体部外面には二面に人面を描く。長くつり上がった眉と目、団子鼻とその下に口髭もしくは顎のしわを表現したと思われる半円を描く。128・129・142は目の輪郭内に黒目を表現しており、特に142は上側の輪郭線と黒目が接し、三白眼の表現を意識している。器形・調整は無文のミニチュア壺・中型壺と大差ないが、肩部の稜がやや弱い。また、130のような法量の土器は無文のものには見られない。130は底部に直径約3cmの円形の欠損があり、意図的に穿孔された可能性がある。これら4点の墨画土器は、表現から同一人物によって描かれた可能性が高い。破片であるが159も同様の特徴をもつ。

131は、体部外面に目を表現したと思われる円とそれを囲む半円を連続して描くものである。器形・胎土は130と類似する。132は二面に顔を描くもので、縦横の短い直線によって眉・目・鼻を描き、顔の輪郭を長い縦線によって画する。あるいは髪の表現かもしれない。器形は130・131と類似する。133は四面に小さい顔を描くものである。顔の輪郭を円で囲み、その中を直線によって眉・目・鼻・口を表現する。143は四面に顔を描くもので、上部に弧状もしくは「へ」の字状の線を配し、その下に直線によって目・鼻を表現する。器形・胎土は無文の中型壺と大差ない。

ほかにも、破片のため全体の構図はわからないが、人面を表現した壺に134～141がある。135～140は目を表現した部分を図化したものである。141は体部に把手が付く大型品である。

144～167は人顔ではなく、直線もしくは弧線を描いた墨画土器である。145～147・156はほぼ完形の状態で出土した。構図が判るものには、体部外面に円弧を連続させる144・157、鋸歯状に直線を巡らす145・146・156、縦方向の直線を連続して配する147・153がある。ほかにも縦・横線を墨で描いたものが多く出土したが、破片のため全体の構図が判読しがたい。ここでは、口縁部を中心で図化できるものを示した(148～155・158～167)。

器形・胎土は無文のミニチュア壺・中型壺と共に多くのものがいるが、145・146は口縁部が短くほとんど外反しないという違いがある。145は焼成時に生じたと思われる剥離痕が体部外面に見られ、この剥離面の上から墨で線を描いている。また、156は扁平な体部から口縁部が短く直立する把手付壺で、底に低い高台を付けている。体部外面と口縁部内面には細かな横方向のヘラミガキを施し、その上から墨で直線を鋸歯状に巡らせていている。ほかにも、体部外面に円弧を描く157や縦・横の直線を配する158などの把手付壺もある。

上記以外のミニチュア土器には、壺168～171、壺172、高杯173～177、壺178～180がある(図30、図版15)。168・169・172は第5a層、170・171・173～180は第5b層からそれぞれ出土した。

168～170は椀形の壺で、外面にはユビオサエの痕が顕著に残り、粘土紐の継ぎ目も見られる。これに対して内面は平滑に仕上げられており、器壁は薄い。3点とも底部が円形に欠損しており、ともに焼成前に穿たれた孔が一部残存していることから、既に存在した孔を焼成後に再度打ち欠いた可能性がある。171は浅い椀形の壺で、底部には同様に焼成前の小孔が穿たれている。172は口縁部を折り曲げた尖底の壺で、これまで長原遺跡ではこの形態の出土例が多い。

173～176は杯部および脚部が低平な高杯で、177はやや器高が高い。ともに外面をユビオサエによっ

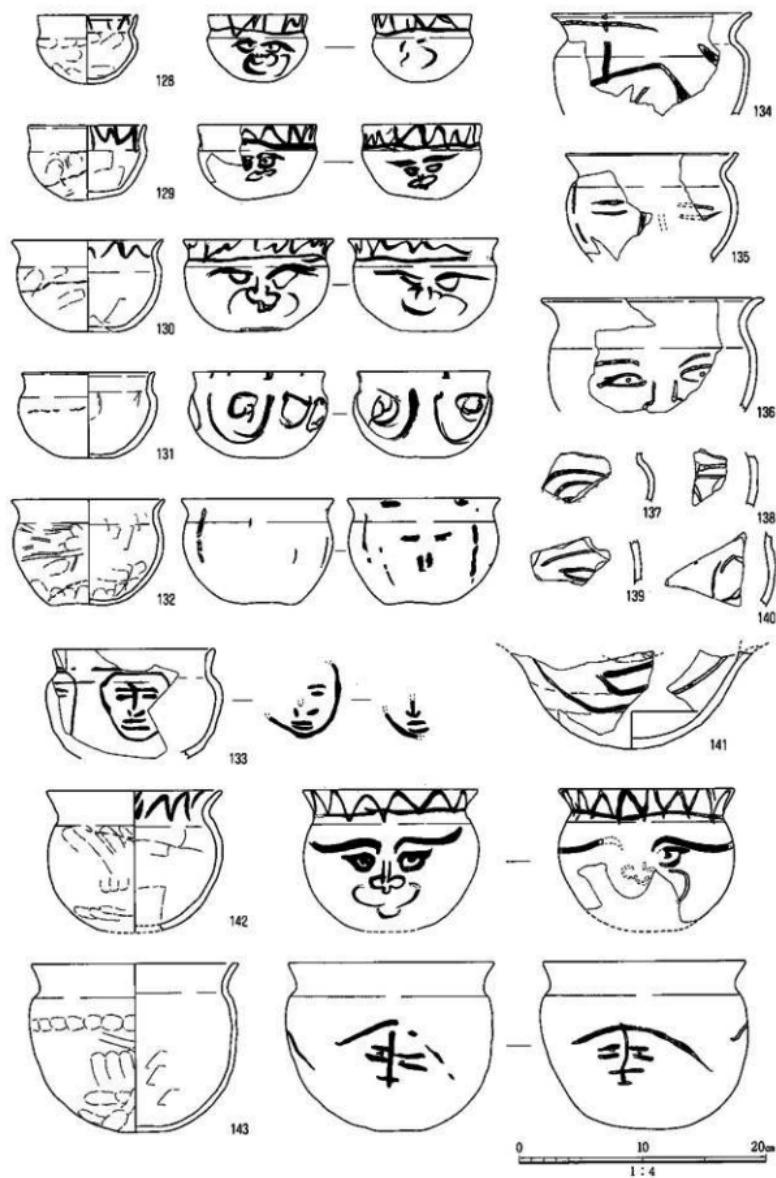


図28 NR501出土遺物(5)

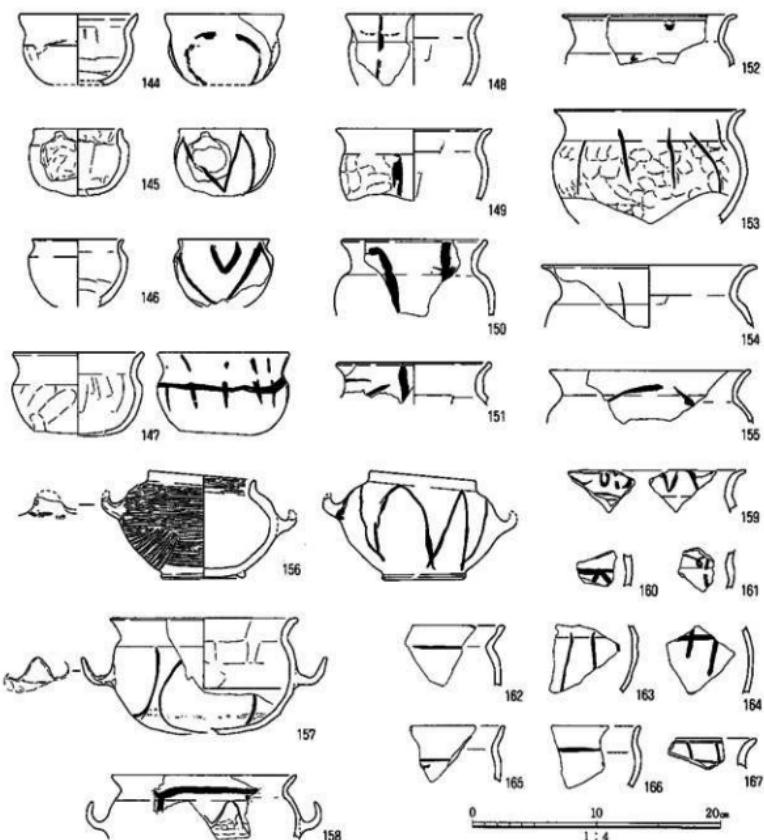


図29 NR501出土遺物(6)

て仕上げている。

壺は178～180を圓化した。178は短く退化した一対の把手を付けており、外面調整はユビオサエおよび粗雑なミガキである。179は体部を切り取ってそのまま焚口としたもので、180は折り曲げて底を作り出している。

墨画をもたない把手付壺には、181～186がある(図30、図版17)。186が第5a層、それ以外は第5b層から出土した。

181は完形品で、器壁は厚く粗雑なつくりである。把手は粘土塊を外側から貼付け、折り曲げただけのものである。182～184・186は体部の肩が張り、そこに薄い板状で平面三角形の把手を付けており、調整は体部外面がユビオサエ、内面がナデ、口縁部内外面がヨコナデである。口縁部の形態は緩やかに外反する183・186と、口縁部上端をわずかに折り曲げる182・184とがある。把手の接着方法

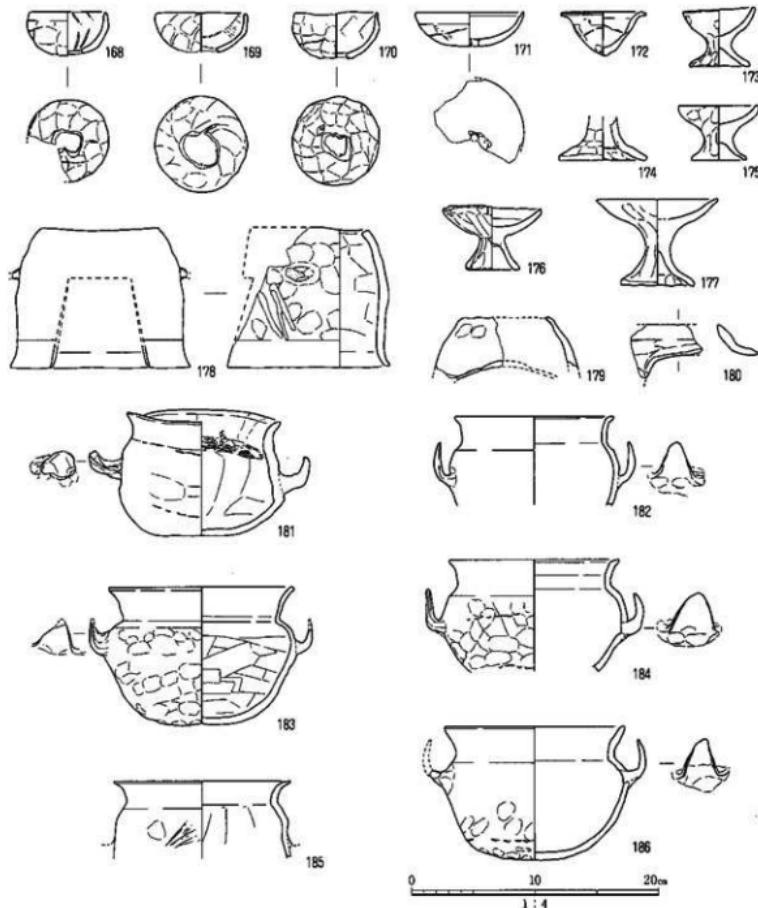


図30 NR501出土遺物(7)

は2種類あり、182・183が外から貼付けているのに対し、184・186が孔を穿って差込んでいる。185は体部の肩があまり張らない形態で、調整はほかと変わらない。把手は欠失しており、接着方法は剥離の痕跡から外から貼付けたことがわかる。

中・大型の壺は187～196、羽釜は197～201を図化した(図31)。188～190・201は第5a層、191～200は第5b層、187は第5a・5b層から出土した。

壺は口径16.5～28.4cmのものがあり、体部外面にタテハケを施すもので占められ、内面はハケのちヘラケズリを施すものが多い。口縁部を「く」の字状に折り曲げ、口縁端部をつまみ上げるもののが多

い。すべての個体に媒が付着していた。

羽釜は口径20.3~29.4cmのものがあり、すべて生駒西麓産の胎土である。比較的全体が復元できた201を例にとると、砲弾形の体部外面にタテハケを施したのち、上部に鉢を貼付け、鉢の上下にヨコナデを施す。内面は体部をユビオサエで整えたのち、口縁部にヨコハケを施し、最後に口縁部内外面にヨコナデを加える。

大型の鉢および鍋は202~204を図化した(図32)。すべて第5b層から出土した。

202は口縁部が内湾するもので、端部の一個所を折り曲げ片口とする。調整は体部外面にユビオサエを施したのち、口縁部にヨコナデを加える。内面調整はナデである。203は口縁部を折り曲げるものである。調整は体部外面にユビオサエを施したのち、口縁部にヨコナデを加える。体部内面には部分的にヘラミガキを施し、口縁部内面にはヨコハケが残る。204は把手をもつ鍋で、口縁部を折り曲げ外反させている。把手は体部に孔を穿って差込んで接合している。体部外面の下方に横方向のヘラミガキが、底部にはユビオサエの痕が残る。

205は把手付きの大型甕である(図32、図版21)。球形の体部から口縁部が外反し、体部の中位付近に一対の把手を差込んで付けている。外面調整は、口縁部にヨコナデを施したのち、肩部にタテハケを、最終的に体部下半から底部にかけてタテハケを施す。ほぼ完形に復元でき、外面に媒は付着していない。

須恵器は杯B蓋206~211、杯B212・213、杯A214~226、壺227~237・240~242、平瓶238、鉢239がある(図33・34、図版20・21)。215・222・225・229・231・232は第5a層、206・208~214・217~219・221・223・224・226~228・230・233・234・236~241は第5b層、207・216・220・242は第5aないし5b層、235は第6層からそれぞれ出土した。

杯類は杯Aが主体を占め、杯Bは身・蓋とも少なくまたほとんどが小片であった。208はほぼ完形の杯B蓋で、低く中窪みのつまみを付けている。206・207のつまみは扁平になりながらも宝珠の形態をとどめている。杯Bの蓋は口径が16.0~18.8cmである。杯Bの身は2点のみ図化した。212は高台が底部の内側に入り、口縁部が外反ぎみに開く古い形態をとどめており、213は高台が底部の外縁に付き、口縁部が短く立上がる。杯Aは完形に近い状態のものが多い。214は口径17.2cmと大きいが、それ以外は11.9~13.7cmの範囲におさまる。底部は不調整で突出ぎみのものが多く、口縁部と底部との屈曲は緩やかである。216は口縁部外面に「井」と思われる墨書きがある。

壺類は、肩部に稜をもち口縁部が大きく外反する壺H227~231が多く、細頸壺236・237も出土した。短頸壺は大きさの異なる233~235がみられ、ともにほぼ完形である。233は器高4.1cmと小型で、外面上半には自然釉が付着する。234は肩の張る形態である。235は短く外方に立上がる口縁部と卵形の体部をもち、体部下半には横方向のヘラケズリを加えている。ほかの須恵器より下層の第6層から出土しており、胎土もほかと比べて精緻である。240は体部が筒形の双耳壺で、短い頸部が付くと考えられる。外面には全体的に釉が付着し、色調はオリーブ黒色を呈する。

242は大型の直口壺である。体部外面には平行タタキのうち上半部にカキメを巡らせ、内面には同心円状の当て具痕が残るほか、外面のカキメに対応する範囲にヨコナデが見られる。肩部には三方に

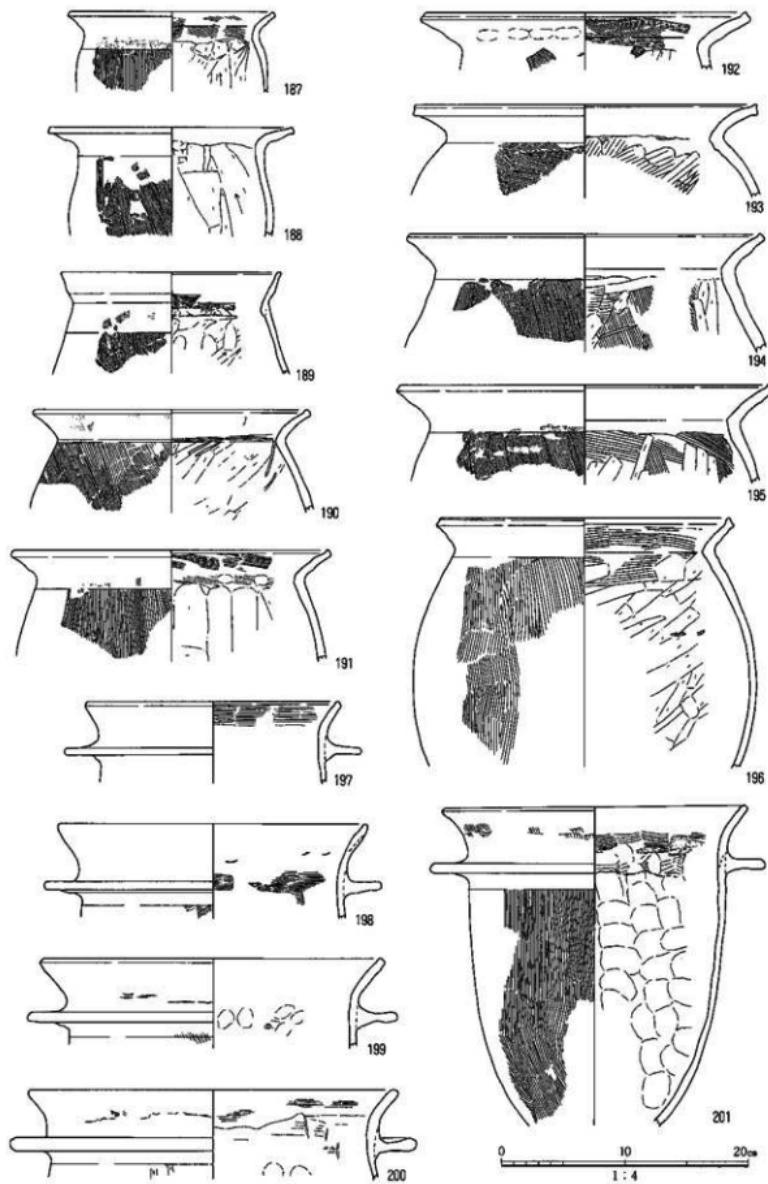


图31 NR501出土遗物(8)

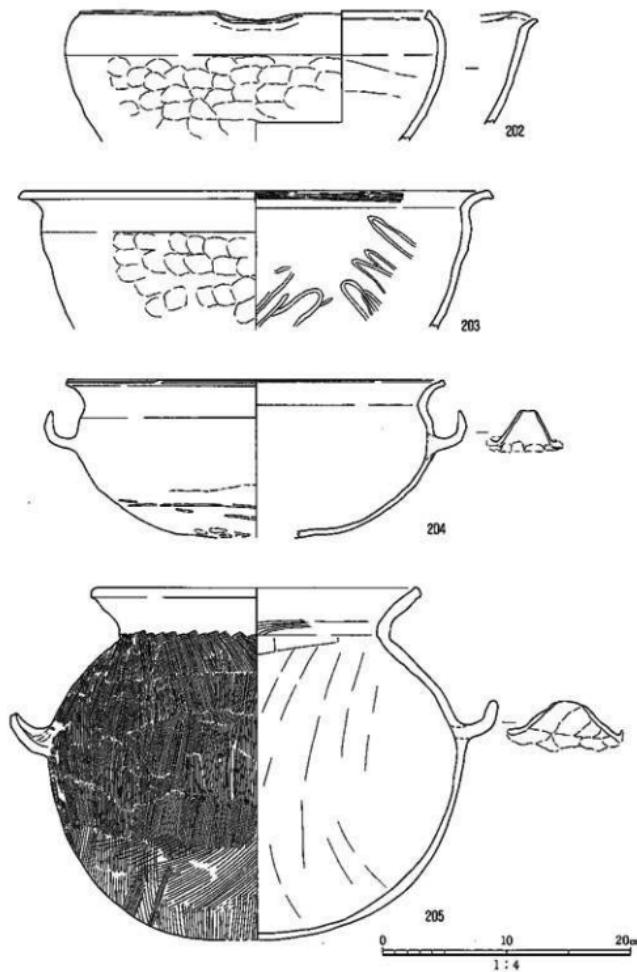


図32 NR501出土遺物(9)

円形浮文を貼付ける。器壁は厚く、重厚である。

以上のNR501から出土した土師器・須恵器のうち、第6層から出土した56・57・235などは平城宮土器Ⅰに位置づけられ、第5a・5b層から出土したものより型式学的に古い。第5a・5b層から出土した土師器・須恵器は、都城地域から出土する器形を基準にすると平城宮土器Ⅱが主体であり、そのうち第5a層から出土した62~64などは平城宮土器Ⅲに下るものである。

243~247は製塙土器である(図35、写真5)。これらはすべて第5b層から出土した。器壁が厚く、

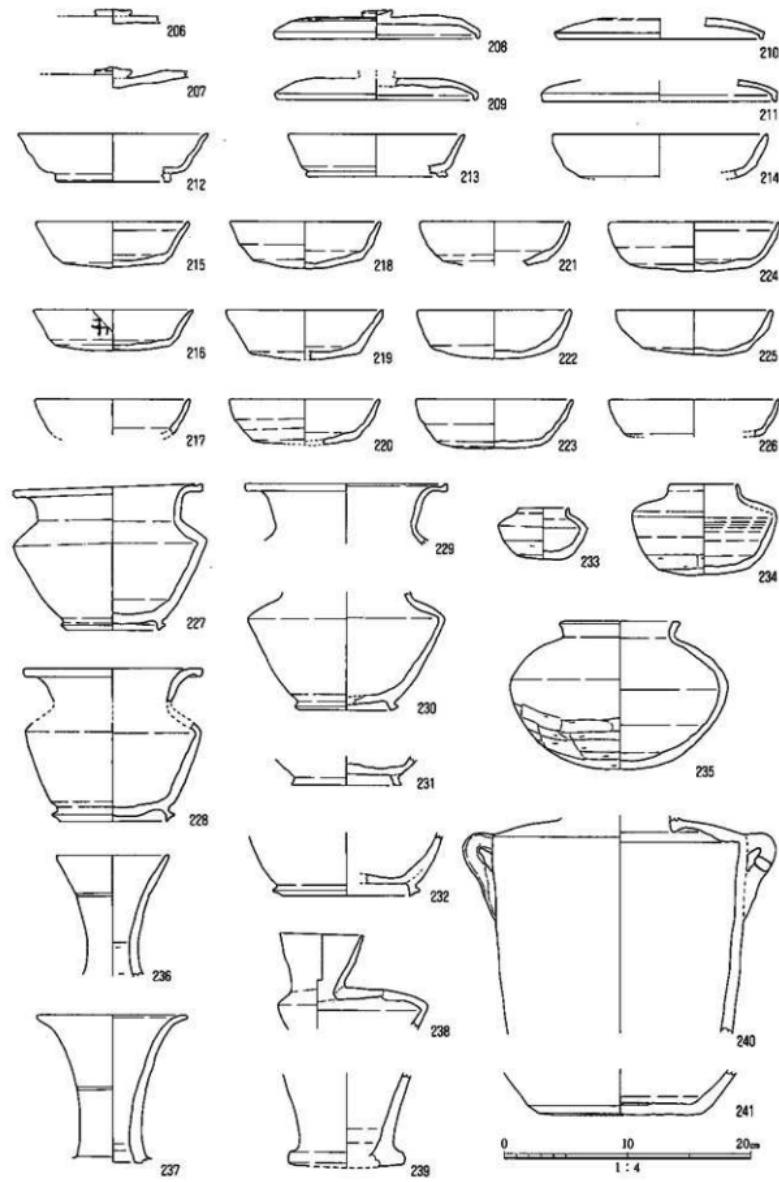


図33 NR501出土遺物(10)

胎土中に砂粒を多く含んでおり、247は口径10.0cmに復元できる。調整はユビオサエあるいはナデで、247は内面に板ナデによる工具痕が残る。246は内面に布の圧痕を残す。長原・瓜破遺跡出土の製塙土器編年では、IV期に属する[京嶋覚1992]。

248は壇と思われる土製品である(図35)。第5b層から出土した。二面が生きており、表面は被熱により黒く煤けている。胎土中には3mm前後の礫を多量に含む。

249～257は木製品である(図36、図版22)。257が第5a層、249～252・254～256は第5b層から出土し、253はNR501掘削中に出土したものであるが、正確な出土層準は不明である。

249・250は横棒である。肩が丸みをもち、表面をていねいに磨いている。249は綫幅4.6cmで、横幅は9.5cm残存する。249がツゲ材、250がヤブツバキ材を用いている(第Ⅲ章第2節)。251は長さ16.8cmの木針である。最大厚は0.8cmあり、基部の片方に挟りを入れている。ヒノキ材である。252は断面が方形の棒状の木材で、二面に2.5～3.2cm間隔で木針を打込んでいる。先端は両方とも面取りを行っており、長さは13.0cm、幅は0.7cmである。容器などの小物の木製品の部材とみられるが、詳細は不明である。ヒノキ材である。253は舟串である。幅2.5cm、厚さ0.5cmの細長い板の両側辺に三角形の切込みを2.5～3.0cm間隔で入れ、先端も三角形状に加工する。基部は欠損しており、現存長は24.2cmである。ヒノキ材である。254は断面方形の木棒で、2面に焼けた痕跡のある小穴が1個所見られる。小穴は直径1.0cmの円形で、底はU字形である。火鑽板と考えられる。両端は欠損しており、残存長は18.1cm、厚さが2.0cmである。ヒノキ材である。255～257は曲物の底板である。直径は復元で15.5

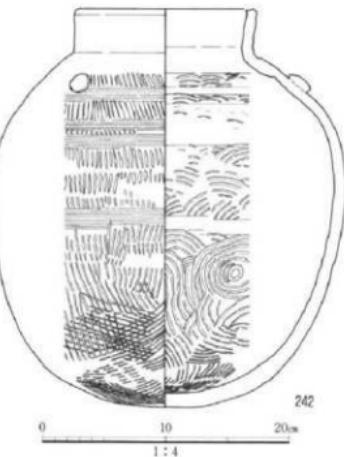


図34 NR501出土遺物(11)

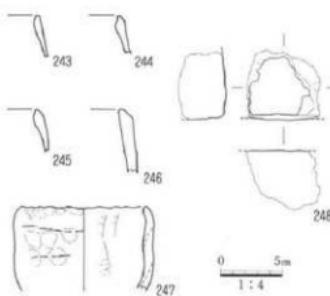


図35 NR501出土遺物(12)

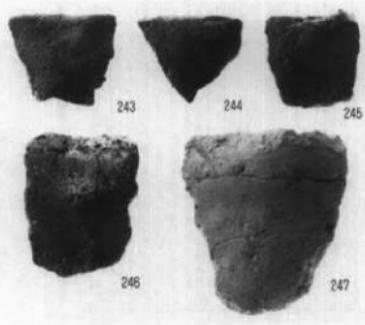


写真5 NR501出土製塙土器

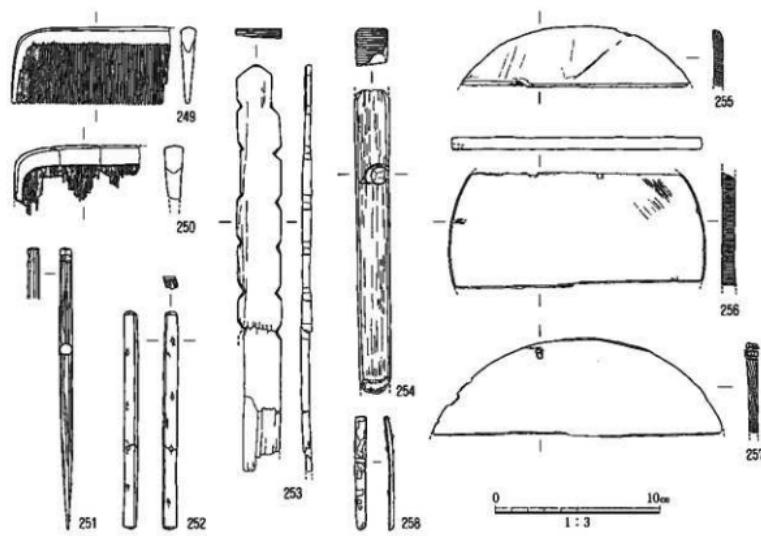


図36 NR501出土遺物(13)

~19.0cmになる。256は側辺に木釘を穿ち、257は平面の端に2孔を穿ったあと樹皮縫を通してある。また、255・256は片面に切り傷痕が残る。ともに、ヒノキ材を用いている。

258は棒状の鉄器で、第5b層から出土した(図36)。長さ6.8cm、幅0.7cm、厚さ0.3cmある。用途は不明である。

259・260は、第4d層の基底から出土した須恵器である(図37、図版21)。

259は高台をもつ長頸壺である。頸部が細くすぼまり、体部は上半に稜をもつ扁平な形である。260は大型の壺である。口縁部は直線的に斜め外方に立上がり、口縁端部は内傾し面をもつ。体部外面には目の粗い格子タタキ、内面には同心円の当て具痕が残る。同心円文と直交する方向には、幅約3mmの直線が凸部として残っている。意図的な文様ではなく、当て具のヒビが圧痕として残ったものとみられる。第5a~5b層出土遺物の年代と大きな差はない。

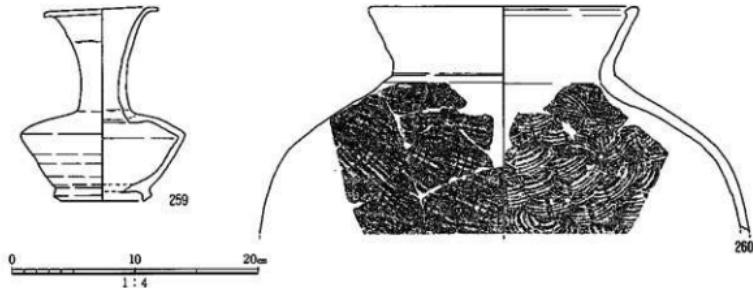


図37 NR501出土遺物(14)

表6 NR501出土遺物一覧(1)

番号	種類	形	口径	高さ	色	刻	地	区	場	住	掏掘	番号	種類	形	口径	高さ	色	刻	地	区	場	住	掏掘
25	土師器	杯	13.9	3.2	灰窯質色	-	2・3区	第50号(下部砂～基底)	図24			84	土師器	口付盃	8.1	-	浅黄色	2区	第50号			図26	
26	土師器	杯	14.3	3.4	にぶい褐色	2区		第50号(下部砂)	図20・24			85	土師器	口付盃	8.6	-	にぶい褐色	3区	第50号			図26	
27	土師器	杯	14.5	4.3	にぶい褐色	1・3区		第50号(第50号)	図24			86	土師器	口付盃	8.6	-	にぶい褐色	6区	第50号(下部砂)			図26	
28	土師器	杯	13.6	-	褐色	3区		第50号(底底)	図24			87	土師器	口付盃	9.6	-	にぶい褐色	3区	第50号(下部砂～基底)			図26	
29	土師器	杯	14.5	3.4	灰窯質色	1区		第50号(底底)	図20・24			88	土師器	口付盃	11.2	8.7	灰窯色	3区	第50号(第50号)			図26	
30	土師器	杯	14.1	-	灰窯質色	1区		第50号(砂)	図24			89	土師器	口付盃	7.0	5.0	にぶい褐色	2区	第50号(下部砂)			図26	
31	土師器	杯	14.7	3.6	灰窯色	2区		第50号	図24			90	土師器	口付盃	9.2	5.3	にぶい褐色	3・4区	第50号(第50号)			図26	
32	土師器	杯	14.0	3.7	にぶい褐色	2区		第50号(底底)	図24			91	土師器	口付盃	9.1	6.2	灰窯色	2区	第50号(下部砂)			図26	
33	土師器	杯	15.3	3.5	灰窯色	3区		第50号	図24			92	土師器	口付盃	9.1	7.3	にぶい褐色	7区	第50号			図26	
34	土師器	杯	14.8	-	灰窯色	2・3区		第50号(下部砂)	図24			93	土師器	口付盃	10.0	5.8	灰窯色	2・3区	第50号(下部砂)			図26	
35	土師器	杯	15.7	3.3	灰窯色	2・3区		第50号(底底)	図24			94	土師器	口付盃	8.4	-	褐色	1・2区	第50号			図26	
36	土師器	杯	15.5	-	にぶい褐色	2区		第50号(下部砂)	図24			95	土師器	口付盃	8.7	-	にぶい褐色	3区	第50号			図26	
37	土師器	杯	14.9	2.8	にぶい褐色	2区		第50号	図24			96	土師器	口付盃	9.8	-	にぶい褐色	2区	第50号(底底)			図26	
38	土師器	杯	13.4	3.3	にぶい褐色	2区		第50号	図24			97	土師器	口付盃	9.6	-	にぶい褐色	2区	第50号			図26	
39	土師器	杯	13.0	3.0	にぶい褐色	3区		第50号(下部砂～基底)	図24			98	土師器	口付盃	9.4	7.5	にぶい褐色	2・3区	第50号(下部砂～基底)			図26	
40	土師器	杯C	13.2	2.1	明瞭褐色	2区		第50号(砂)	図24			99	土師器	口付盃	9.4	8.4	明瞭褐色	2区	第50号(底底)			図26	
41	土師器	杯C	12.8	2.3	灰窯質色	2区		第50号	図24			100	土師器	口付盃	9.7	7.4	明瞭褐色	7区	第50号(下部砂)			図26	
42	土師器	杯C	11.9	2.4	褐色	2区		第50号	図24			101	土師器	口付盃	9.1	6.9	灰窯質色	3区	第50号(上部灰質土～基底)			図26	
43	土師器	杯C	13.4	2.3	褐色	1区		第50号(砂～底底)	図24			102	土師器	口付盃	9.4	7.3	灰窯色	2・3区	第50号(下部砂～底底)			図26	
44	土師器	杯C	13.2	2.7	にぶい黃褐色	1・3区		第50号(砂)	図24			103	土師器	口付盃	9.2	6.3	にぶい黃褐色	7・8区	第50号(下部砂)			図26	
45	土師器	瓶A	13.8	2.3	にぶい褐色	1区		第50号(砂)	図24			104	土師器	口付瓶	10.1	8.2	にぶい褐色	2・3区	第50号(底底)			図26	
46	土師器	瓶A	13.4	2.0	灰窯色	3区		第50号	図24			105	土師器	口付瓶	11.0	-	にぶい褐色	3区	第50号			図26	
47	土師器	瓶A	11.7	2.8	灰窯色	3区		第50号	図24			106	土師器	口付瓶	11.5	10.5	にぶい褐色	1区	第50号			図26	
48	土師器	瓶A	12.3	3.1	明褐色	2区		第50号(砂)	図23・24			107	土師器	口付瓶	13.2	11.0	明褐色	3・4区	第50号(砂)			図27	
49	土師器	瓶A	14.2	3.3	にぶい褐色	1・2区		第50号(砂)	図24			108	土師器	口付瓶	13.9	-	褐色	3区	第50号(下部砂～底底)			図27	
50	土師器	瓶A	15.3	2.4	灰窯色	4区		第50号(砂)	図24			109	土師器	口付瓶	14.5	-	褐色	3区	第50号			図27	
51	土師器	瓶A	16.8	2.8	明瞭褐色	6区		第50号	図24			110	土師器	口付瓶	15.0	-	褐色	2区	第50号(下部砂～底底)			図27	
52	土師器	瓶C	15.4	-	にぶい褐色	1・2区		第50号	図24			111	土師器	口付瓶	13.8	12.6	にぶい褐色	1・2区	第50号(砂～底底)			図27	
53	土師器	瓶A	20.3	2.2	にぶい赤褐色	2・3・7区		第50号(下部砂)	図24			112	土師器	口付瓶	13.5	-	にぶい褐色	3区	第50号			図27	
54	土師器	瓶A	19.4	2.0	にぶい赤褐色	2・7区		第50号	図24			113	土師器	口付瓶	13.9	-	にぶい褐色	2区	第50号(下部砂)			図27	
55	土師器	瓶A	21.0	2.2	にぶい褐色	3区		第50号	図24			114	土師器	口付瓶	16.5	-	にぶい褐色	2区	第50号(上部灰質土～下部砂)			図27	
56	土師器	瓶C	12.7	4.3	褐色	2区		第50号	図24			115	土師器	口付瓶	16.8	-	にぶい褐色	3区	第50号(下部砂)			図27	
57	土師器	瓶A	18.8	5.2	にぶい褐色	1・2区		第50号	図24			116	土師器	口付瓶	15.7	-	灰褐色	2区	第50号(下部砂)			図27	
58	土師器	瓶A	20.7	4.0	にぶい褐色	3区		第50号(砂)	図25			117	土師器	口付瓶	16.3	-	灰褐色	3区	第50号(下部砂)			図27	
59	土師器	瓶A	20.1	4.0	赤褐色	2・3区		第50号(砂)	図25			118	土師器	口付瓶	14.7	-	にぶい褐色	3区	第50号(底底)			図27	
60	土師器	瓶A	19.8	-	にぶい褐色	3区		第50号(砂)	図25			119	土師器	口付瓶	17.3	-	灰褐色	1区	第50号			図27	
61	土師器	瓶A	19.4	-	褐色	2区		第50号(砂)	図25			120	土師器	口付瓶	16.5	-	にぶい褐色	2区	第50号			図27	
62	土師器	瓶A	19.9	3.5	にぶい赤褐色	1区		第50号(底底)	図20・25			121	土師器	口付瓶	17.7	-	灰褐色	2区	第50号(上部灰質土)			図27	
63	土師器	瓶A	19.9	3.9	にぶい赤褐色	1区		第50号(砂)	図20・25			122	土師器	口付瓶	15.6	13.2	明褐色	3・7区	第50号			図27	
64	土師器	瓶A	19.3	4.0	褐色	1・2区		第50号(砂～底底)	図25			123	土師器	口付瓶	-	-	灰褐色	3区	第50号			図27	
65	土師器	瓶	-	-	にぶい褐色	2区		第50号(砂)	図25			124	土師器	口付瓶	17.1	13.7	褐色	2区	第50号(下部砂)			図27	
66	土師器	高杯	-	-	にぶい褐色	2区		第50号	図25			125	土師器	口付瓶	15.5	13.4	褐色	1区	第50号(砂)			図27	
67	土師器	高杯	-	-	にぶい褐色	2区		第50号	図25			126	土師器	口付瓶	13.6	12.0	にぶい褐色	7区	第50号			図27	
68	土師器	高杯	-	-	灰窯色	2区		第50号(砂)	図25			127	土師器	口付瓶	19.0	-	にぶい褐色	2・3区	第50号(下部砂)			図27	
69	土師器	高杯	7.0	5.2	灰窯色	2区		第50号(砂)	図22・26			128	土師器	口付瓶	8.0	5.4	灰褐色	3区	第50号(砂)			図28	
70	土師器	高杯	7.2	4.7	にぶい褐色	4区		第50号(底底)	図22・26			129	土師器	口付瓶	9.4	6.1	にぶい褐色	3区	第50号(下部砂)			図28	
71	土師器	口付瓶	8.3	-	にぶい褐色	2区		第50号(砂)	図26			130	土師器	口付瓶	12.1	7.3	にぶい褐色	3区	第50号(上部灰質土)			図28	
72	土師器	口付瓶	7.9	5.8	灰窯色	1区		第50号	図26			131	土師器	口付瓶	10.6	6.9	灰褐色	2区	第50号(下部砂)			図28	
73	土師器	口付瓶	8.5	5.6	にぶい褐色	2区		第50号(砂)	図22・26			132	土師器	口付瓶	12.3	8.5	にぶい褐色	1区	第50号(砂)			図28	
74	土師器	口付瓶	8.2	-	にぶい褐色	3区		第50号	図22・26			133	土師器	口付瓶	13.1	-	灰褐色	2区	第50号			図28	
75	土師器	口付瓶	9.0	-	灰窯色	7区		第50号	図26			134	土師器	口付瓶	16.0	-	明褐色	1区	第50号			図28	
76	土師器	口付瓶	9.5	-	にぶい褐色	3区		第50号	図26			135	土師器	口付瓶	13.9	-	にぶい褐色	3区	第50号(砂)			図28	
77	土師器	口付瓶	11.5	-	にぶい褐色	2区		第50号(砂)	図26			136	土師器	口付瓶	17.8	-	にぶい褐色	2・3区	第50号(下部砂)			図28	
78	土師器	口付瓶	10.2	7.7	灰窯色	2区		第50号(砂)	図22・26			137	土師器	口付瓶	16.0	-	にぶい褐色	3区	第50号(下部砂)			図28	
79	土師器	口付瓶	7.7	4.7	褐色	1区		第50号(砂)	図22・26			138	土師器	口付瓶	-	-	褐色	3区	第50号(下部砂)			図28	
80	土師器	口付瓶	7.9	5.7	にぶい褐色	2区		第50号(砂)	図22・26			139	土師器	口付瓶	-	-	褐色	3区	第50号			図28	
81	土師器	口付瓶	8.9	6.2	灰窯色	3区		第50号(砂)	図26			140	土師器	口付瓶	-	-	灰褐色	3区	第50号			図28	
82	土師器	口付瓶	8.6	6.3	灰窯色	2区		第50号(砂)	図22・26			141	土師器	口付瓶	-	-	にぶい褐色	2・3区	第50号(下部砂)			図28	
83	土師器	口付瓶	9.0	5.5	にぶい褐色	4区		第50号(砂)	図26			142	土師器	口付瓶	14.1	11.5	灰窯色	3区	第50号(上部灰質土～下部砂)			図28	

表6 NR501出土遺物一覽(2)

番号	器種	形狀	口径	高さ	色	質	地	地区	用	位	海抜	報告	番号	器種	形狀	口径	高さ	色	質	地	地区	用	位	海抜
143	土師器	甕(直腹)	16.8	13.7	灰青	-	2区	第5b号(上部輪底土)	2区	C23・28	202	土師器 釜	28.1	-	明褐色	3区	第5b号(高底)	3区	32					
144	土師器	甕(直腹)	9.4	5.7	灰	-	2区	第5b号	2区	B29	203	土師器 釜	37.3	-	暗褐色	2区	第5b号(下部輪底)	3区	32					
145	土師器	甕(直腹)	6.9	5.4	黄褐色	-	2区	第5b号(底底)	2区	B20・29	204	土師器 釜	30.2	12.6	灰	2区	第5b号(底底)	3区	32					
146	土師器	甕(直腹)	7.4	5.4	褐色	-	2・3区	第5b号(上部輪底土)	2区	C20・29	205	土師器 扁舟形	26.0	28.4	灰	2・3区	第5b号(下部輪底-底底)	2区	32					
147	土師器	甕(直腹)	10.2	6.7	灰青色	-	2区	第5b号(底底)	2区	B20・29	206	土師器 扁舟形	-	-	黑色	2区	第5b号	3区	33					
148	土師器	甕(直腹)	11.0	-	灰青色	-	2区	第5b号(下部輪)	2区	B29	207	土師器 扁舟形	-	-	黑色	1・3区	第5a・5b号(底底)	3区	33					
149	土師器	甕(直腹)	12.5	-	灰青色	1・2区	第5b号(上部輪底土-下部輪)	2区	B29	208	土師器 扁舟形	16.5	2.3	暗褐色	2・3区	第5b号(下部輪-底底)	3区	33						
150	土師器	甕(直腹)	11.4	-	灰青色	1区	第5b号	2区	B29	209	土師器 扁舟形	16.0	-	褐色	2区	第5b号	3区	33						
151	土師器	甕(直腹)	12.2	-	褐色	?	2区	第5a・5b号	2区	C29	210	土師器 扁舟形	16.4	-	灰色	3区	第5b号(下部輪-底底)	3区	33					
152	土師器	甕(直腹)	13.7	-	灰青色	3区	第5b号(下部輪)	2区	B29	211	土師器 扁舟形	18.8	-	黑色	2区	第5b号(下部輪)	3区	33						
153	土師器	甕(直腹)	15.2	-	褐色	1区	第5b号(沙-底底)	2区	C20・29	212	土師器 扁舟形	15.3	3.8	灰青	3区	第5b号	3区	33						
154	土師器	甕(直腹)	17.2	-	灰青色	1区	第5b号(下部輪)	2区	C29	213	土師器 扁舟形	14.2	3.4	灰色	2区	第5b号(下部輪)	3区	33						
155	土師器	甕(直腹)	16.2	-	灰青色	3区	第5b号(下部輪)	2区	C20・29	214	土師器 扁舟形	17.2	-	灰色	7区	第5b号	3区	33						
156	土師器	甕(直腹)	8.5	8.5	灰青色	2区	第5b号(下部輪)	2区	B29	215	土師器 扁舟形	12.2	3.7	深褐色	2区	第5b号(底底)	3区	33						
157	土師器	甕(直腹)	15.2	9.5	灰青色	2区	第5b号(下部輪)	2区	C20・29	216	土師器 扁舟形	12.8	3.3	灰色	1・3区	第5a・5b号(沙)	3区	33						
158	土師器	甕(直腹)	14.8	-	灰青色	3区	第5b号(下部輪)	2区	C29	217	土師器 扁舟形	12.4	-	深褐色	2区	第5b号	3区	33						
159	土師器	甕(直腹)	-	-	浅黄色	3区	第5b号	2区	B29	218	土師器 扁舟形	12.2	2.6	深褐色	2区	第5b号(底底)	3区	33						
160	土師器	甕(直腹)	-	-	赤褐色	2区	第5b号	2区	B29	219	土師器 扁舟形	12.6	4.0	深褐色	7区	第5b号	3区	33						
161	土師器	甕(直腹)	-	-	褐色	?	2区	第5a・5b号	2区	B29	220	土師器 扁舟形	12.0	3.6	暗褐色	2区	第5b号(沙-底底)	3区	33					
162	土師器	甕(直腹)	-	-	褐色	3区	第5b号	2区	B29	221	土師器 扁舟形	11.9	-	褐色	2区	第5b号(底底)	3区	33						
163	土師器	甕(直腹)	-	-	暗灰白色	2区	第5b号	2区	B29	222	土師器 扁舟形	12.3	3.9	灰色	1区	第5a号(下部輪)	3区	33						
164	土師器	甕(直腹)	-	-	暗灰白色	3区	第5b号	2区	B29	223	土師器 扁舟形	12.6	4.0	灰色	3区	第5b号(下部輪-底底)	3区	33						
165	土師器	甕(直腹)	-	-	褐色	2区	第5b号	2区	B29	224	土師器 扁舟形	13.6	3.9	灰色	2区	第5b号(下部輪)	3区	33						
166	土師器	甕(直腹)	-	-	灰青色	1区	第5b号	2区	B29	225	土師器 扁舟形	12.4	3.5	深褐色	1区	第5b号(沙-底底)	3区	33						
167	土師器	甕(直腹)	-	-	明褐色	3区	第5b号	2区	B29	226	土師器 扁舟形	13.7	-	黄色	3区	第5b号	3区	33						
168	土師器	口付瓶	3.5	3.5	灰青色	3区	第5b号	2区	B30	227	土師器 扁舟形	16.1	11.7	灰青	7区	第5b号(下部輪)	3区	33						
169	土師器	口付瓶	7.2	3.2	灰褐色	2区	第5b号(沙)	2区	B30	228	土師器 扁舟形	14.2	-	褐色	2・3区	第5b号(下部輪)	3区	33						
170	土師器	口付瓶	6.6	3.7	米黄色	4区	第5b号	2区	B30	229	土師器 扁舟形	16.2	-	暗褐色	3区	第5b号	3区	33						
171	土師器	口付瓶	8.7	2.7	灰青色	7区	第5b号(下部輪)	2区	B30	230	土師器 扁舟形	-	-	灰白色	2・3区	第5b号(底底)	3区	33						
172	土師器	口付瓶	6.1	3.5	米黄色	4区	第5b号(沙)	2区	B30	231	土師器 扁舟形	-	-	褐色	2区	第5a号	3区	33						
173	土師器	口付瓶	5.6	4.5	明褐色	2区	第5b号(下部輪)	2区	B30	232	土師器 扁舟形	-	-	暗褐色	4区	第5a号(沙)	3区	33						
174	土師器	口付瓶	-	-	灰青白色	8区	第5b号	2区	B30	233	土師器 扁舟形	4.0	4.1	灰色	3区	第5b号(底底)	3区	33						
175	土師器	口付瓶	6.2	4.4	灰青色	3区	第5b号(基底)	2区	B30	234	土師器 扁舟形	5.5	7.2	褐色	2区	第5b号(下部輪)	3区	33						
176	土師器	口付瓶	7.8	5.0	灰青色	3区	第5b号(下部輪-底底)	2区	B30	235	土師器 扁舟形	8.8	6.9	灰色	2区	第6号	3区	33						
177	土師器	口付瓶	-	-	米黄色	3・7区	第5b号(下部輪-底底)	2区	B29・30	236	土師器 扁舟形	9.1	-	褐色	2区	第5b号(底底)	3区	33						
178	土師器	口付瓶	14.4	11.2	明褐色	2区	第5b号(下部輪)	2区	B30	237	土師器 扁舟形	11.8	-	褐色	2区	第5b号	3区	33						
179	土師器	口付瓶	6.6	-	灰青色	2区	第5b号(下部輪)	2区	B30	238	土師器 扁舟形	6.7	-	灰青	7区	第5b号	3区	33						
180	土師器	口付瓶	-	-	灰青色	2区	第5b号(沙)	2区	B30	239	土師器 扁舟形	-	-	褐色	7・8区	第5b号	3区	33						
181	土師器	把手手握	12.4	10.1	米黄色	2区	第5b号(下部輪)	2区	B30・30	240	土師器 扁舟形	-	-	灰青	3区	第5b号(下部輪-底底)	3区	33						
182	土師器	把手手握	12.8	-	灰青色	3区	第5b号(下部輪)	2区	B30	241	土師器 扁舟形	-	-	褐色	2・3区	第5b号(下部輪)	3区	33						
183	土師器	把手手握	13.6	12.2	米黄色	3区	第5b号(下部輪-底底)	2区	B22・30	242	土師器 扁舟形	14.0	32.2	褐色	1・3区	第5a・5b号	3区	34						
184	土師器	把手手握	13.6	-	灰青色	2・6区	第5a・5b号(下部輪-底底)	2区	B30	243	土師器 扁舟形	-	-	深褐色	2区	第5b号	3区	35						
185	土師器	把手手握	14.3	-	明褐色	2・3区	第5a・5b号(下部輪-底底)	2区	B30	244	土師器 扁舟形	-	-	深褐色	2区	第5b号(下部輪)	3区	35						
186	土師器	把手手握	14.4	10.7	米黄色	3区	第5a・5b号(沙)	2区	B22・30	245	土師器 扁舟形	-	-	深褐色	2区	第5b号(下部輪)	3区	35						
187	土師器	甕	16.5	-	褐色	?	第5a・5b号	2区	B31	246	土師器 扁舟形	-	-	褐色	3区	第5b号(下部輪)	3区	35						
188	土師器	甕	19.5	-	褐色	1区	第5a号(沙-底底)	2区	B31	247	土師器 扁舟形	10.0	-	灰青	3区	第5b号(底底)	3区	35						
189	土師器	甕	17.6	-	褐色	1区	第5b号	2区	B31	248	土師器 扁舟形	-	-	褐色	2区	第5b号	3区	35						
190	土師器	甕	22.1	-	灰青色	1・3区	第5a・5b号	2区	B31	249	土師器 扁舟形	-	-	-	2区	第5b号(底底)	3区	36						
191	土師器	甕	25.4	-	灰青色	2区	第5b号(底底)	2区	B31	250	土師器 扁舟形	-	-	-	3区	第5b号(下部輪)	3区	36						
192	土師器	甕	25.6	-	褐色	2区	第5b号(下部輪-底底)	2区	B31	251	土師器 扁舟形	-	-	-	2区	第5b号(上部輪底土)	3区	36						
193	土師器	甕	27.3	-	褐色	3区	第5b号	2区	B31	252	土師器 扁舟形	-	-	-	2区	第5b号	3区	36						
194	土師器	甕	28.4	-	灰青色	2・3区	第5b号(下部輪-底底)	2区	B31	253	土師器 扁舟形	-	-	?	第5a・5b号	3区	36							
195	土師器	甕	28.8	-	明褐色	2区	第5b号(下部輪)	2区	B31	254	土師器 扁舟形	-	-	-	3区	第5b号(上部輪底土)	3区	36						
196	土師器	甕	23.4	-	灰褐色	2区	第5b号(沙)	2区	B31	255	土師器 扁舟形	曲腹板	-	-	8区	第5b号(下部輪)	3区	36						
197	土師器	甕	29.3	-	褐色	2区	第5b号(沙)	2区	B31	256	土師器 扁舟形	曲腹板	-	-	4区	第5b号(底底)	3区	36						
198	土師器	甕	24.7	-	灰青色	2・3区	第5b号(下部輪-底底)	2区	B31	257	土師器 扁舟形	曲腹板	-	-	3区	第5b号(沙)	3区	36						
199	土師器	甕	27.3	-	灰青色	2区	第5b号(沙)	2区	B31	258	土師器 扁舟形	-	-	-	2区	第5b号(底底)	3区	36						
200	土師器	甕	29.7	-	灰青色	1区	第5b号(沙-底底)	2区	B23・31	259	土師器 扁舟形	直腹板	8.7	15.8	褐色	4区	第4d号(底底)	3区	37					
201	土師器	甕	24.3	-	灰青色	1・2区	第5a・5b号(沙-底底)	2区	B31	260	土師器 扁舟形	直腹板	21.2	-	灰褐色	2・3区	第4d号(底底)	3区	37					

5) 平安時代

第3層までを重機で除去した後、第4a層上面で遺構検出作業を行い、水田・土壤などを検出した。

i) 水田(図38、図版11)

第4a層上面は、調査区東半が第3c層内からの擾乱でほとんど残存していないことから、上面での遺構検出作業は水成層で直接行われていた調査区西半で行った。その結果、ほぼ正方位の東西・南北方向の水田畦畔を検出した。また、調査区東半でも、南壁断面で削平をまぬがれた畦畔が約20m間隔で確認できた。調査区西半で検出した南北方向の畦畔は、約10m間隔であったことから、水田区画は本来、この間隔で東西に並んでいたと考えられる。調査区西半では、これに直交する南北方向の畦畔を検出したが、西端の畦畔は東側の2本とは方向が逆であった。検出した畦畔の幅は約0.4~0.7m、高さは約0.1mである。

この水田面上では、第3c層内から掘込まれた鋤痕や、ヒトや偶蹄類の踏込みが多く見られた。5・6区では、南東から北西方向に向けて鋤痕が2列に並んで連続しており、耕起作業の痕跡と思われる。

また、7区では、水田の上面が東西約7mの範囲で浅くU字形に窪んでいた。この範囲内にある東西方向の畦畔も窪みに沿っていた。第4a層上面には、窪みが始まる東西両端に南北方向のヒビ割れが走っており、割れの内部には第3層の砂層が入っていた。以上のことから、この窪みは本来の水田面の形状とは無関係で、水田埋没後に地面が陥没したことによるものと考えられる。

出土遺物からみて、この水田の時期は12世紀頃と考えられる。

ii) 土壌(図38、図版11)

7区で3基の方形の土壌SK401~403を検出した。SK402が南北2.2m×東西2.9m、SK401・403が東西3.5mで、深さは約0.2mあった。埋土は第3d層に由来する砂を中心とし、第4a・4b層に由来する粘質土の偽礫で埋っており、粘土を採取するための土取り穴と考えられる。土壌の上には第3c層が分布することから、第3c層底面の遺構である。

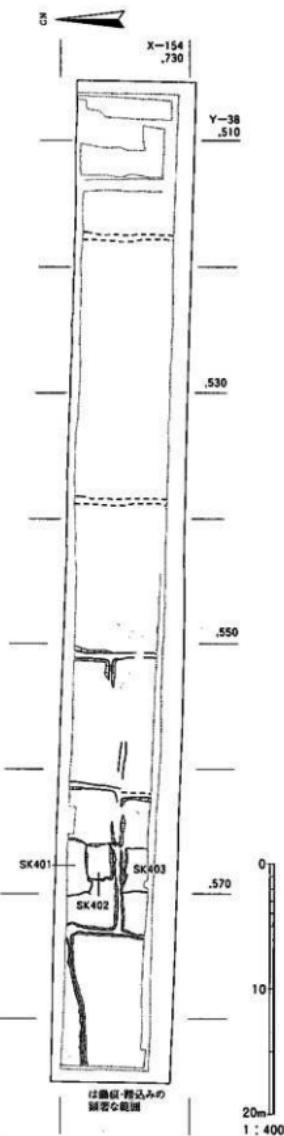


図38 第3c層底面・第4a層上面検出遺構

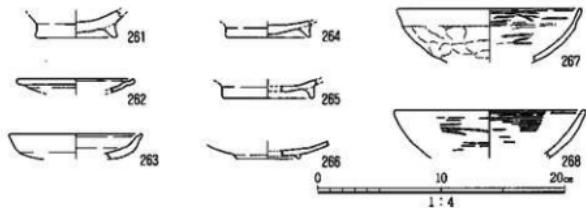


図39 第3～4b層出土遺物

iii) 出土遺物(図39)

261・264・267は第3層、262・263・265・268は第4a層、266は第4b層からそれぞれ出土した。261は土師器碗もしくは皿、262・263は土師器小皿である。261は厚手の低い高台が付き、胎土中に長石粒を多く含む。262はいわゆる「て」の字口縁の小皿である。復元口径は9.2cmである。263は口縁部が短く斜め上方に立上がる形態で、器壁は厚い。復元口径は10.7cmである。262は平安時代Ⅲ期新段階に位置づけられる。

264～266は黒色土器で、264がA類椀、265がB類椀、266がA類皿である。264・265は底部の器壁が厚く、高台も厚手である。266は底部が薄手で、断面三角形の低い高台が付く。264・265が平安時代Ⅲ期古段階、266が平安時代Ⅱ期中～新段階に位置づけられる。

267・268は瓦器碗である。口径は267が14.8cm、268が15.4cmに復元できる。調整は267が外面にユビオサエ、内面に粗いヘラミガキを施し、268が外面にヘラミガキが残り、内面にも密なヘラミガキを加える。267がⅢ-1期、268がⅡ-2期に位置づけられる。

以上のうち地層の年代を示すと考えられる遺物は266～268で、第3層および第4a層が12世紀代、第4b層が10世紀代に相当すると考えられる。
(大庭)

第Ⅲ章 遺物の検討

第1節 長原遺跡(NG01-14次)調査出土の動物遺存体について

宮路淳子・松井 章(独立行政法人奈良文化財研究所)

1)はじめに

長原遺跡01-14次調査地点(以後NG01-14)は、瓜破台地の北端部、出戸自然堤防の北東斜面に立地する。今回、NG01-14の発掘調査では、奈良時代前半(8世紀前半)の流路であるNR501から、455点の動物遺存体が出土した。そのうち種名を査定できたのは403点であり、その内訳は、スッポン(*Pelodiscus sinensis*)、イヌ(*Canis familiaris*)、ウシ(*Bos taurus*)、ウマ(*Equus caballus*)、の4種である(表9~13)。なかでもウマ、ウシの出土数が多く、同定できたもののうち98%を占める(図40)。ウマとウシの最小個体数比は、3:2である。

動物遺存体は、発掘時に肉眼観察によって取り上げられたものであり、土壤サンプルおよび水洗選別は行っていない。

以下に、出土した動物遺存体の概要を述べる。

2)出土した動物の概要

爬虫綱

スッポン *Pelodiscus sinensis*

完全な個体が大小2個体、頭を伸ばし、頭を甲羅の上に乗せた状態で出土している(図版33・34)。切痕は確認できなかった。

表7 NG01-14次調査出土の動物遺存体

爬虫綱

スッポン *Pelodiscus sinensis*

哺乳綱

イヌ *Canis familiaris*

ウシ *Bos taurus*

ウマ *Equus caballus*

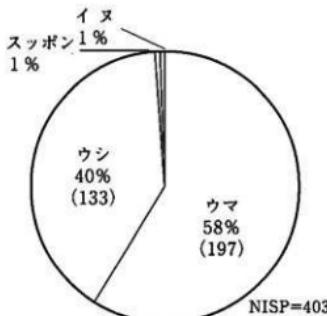


図40 NR501動物種別出土量比

哺乳綱

イヌ *Canis familiaris*

頭蓋骨と下顎骨が出土している(図版35)。頭蓋骨の額長が84.0mmを測り、奈文研所蔵の現生標本との比較から、中型犬クラスと推定できる[茂原信生・松井章1995]。

ウシ *Bos taurus*

破片数で133点出土している(図版23・24・28~32・35)。出土した部位の破片数は、上顎骨2点(右1、左1)、下顎骨14点(右6、左6、左右共1、左右不明1)、肩甲骨5点(右4、左1)、上腕骨8点(右5、左3)、橈骨6点(右4、左1、左右不明1)、尺骨3点(右1、左2)、橈・尺骨左8点、中手骨左4点、基節骨2点、中節骨2点、仙骨1点、寛骨3点(右2、左右不明1)、足根骨2点(右1、左1)、大腿骨5点(右1、左3、左右不明1)、脛骨5点(右4、左1)、中足骨6点(右3、左3)、距骨4点(右1、左2、左右不明1)、蹠骨4点(右2、左2)、胸骨3点、肋骨27点、遊離歯10点である。この他にほぼ全身骨格の出土例が1個体、存在する(図41・42・図版23)。

保存されやすい下顎骨のエナメル間での臼歯の計測値から形質を推定する。R263は後臼歯列長(M1~M3)79mm、R265は後臼歯列長90mm、R451は全臼歯列長(P2~M3)133mm、R514は全臼歯列長155mm、後臼歯列長は96mm、R270は全臼歯列長135mm、後臼歯列長は82mm、R291は全臼歯列長140mm、後臼歯列長は86mmを測る。NG95-14次出土のウシの後臼歯列長は93mmであり[久保和士ほか2000]、在来和牛の天然記念物である山口県見島牛の現生オスの後臼歯列長93.5mm[西中川駿ほか1991]、奈良文化財研究所所蔵の与那国島の現生和牛、オスが92mmにほぼ相当する。

全身骨格が出土している個体(ウシA)は、第三後臼歯が萌出を終えつつも摩耗がほとんど進んでいないので、年齢は3~5才と推定できる。体高は115~120cmと推定できる。

R265、R270は牡鈴で、R263はM3萌出中の3~5才である([Cornwall 1956]による)。

四肢骨では、上腕骨R334が最大長265mm、R495が最大長274mmで、西中川らによる計算式から体高を復元すると[久保和士・松井章1999]、それぞれ、105cm、110cmになる。その他の部位から体高を復元すると以下のようになる。橈骨を例にとると、R490が最大長283mm、R210が最大長263mm、R289が最大長281mm、R397が最大長270mmを測り、体高がそれぞれ120~125cm、110~115cm、120~125cm、115~120cmとなる。中手骨を例にとると、R623が最大長178mm、R330が最大長186mm、R358が最大長157mmを測り、体高はそれぞれ105~110cm、115cm、100cmとなる。ただ、出土した中手骨を現生標本と比較すると、全長は短いが幅は太いという傾向がうかがえる。なかには、関節面滑車が横に張り出し、変形する個体もみられ、激しい使役をうかがわせる(図版35)。大腿骨を例に取ると、R511が最大長334mmを測り、体高105~110cmと推定できる。脛骨を例に取るとR510が最大長314mm、R541が最大長322mmを測り、体高はそれぞれ、110~115cm、115cmと復元できる。中足骨を例に取ると、R509が最大長202mm、R224が最大長218mm、R517が最大長201mmを測り、体高110~115mmと推定できる。

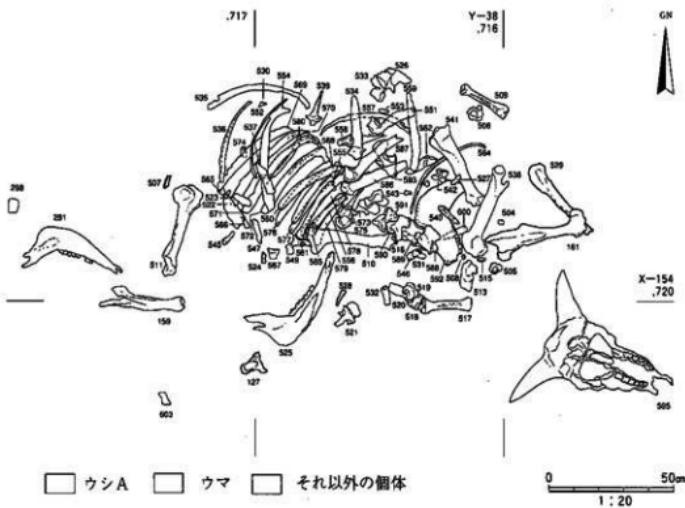


図41 ウシAの出土状況

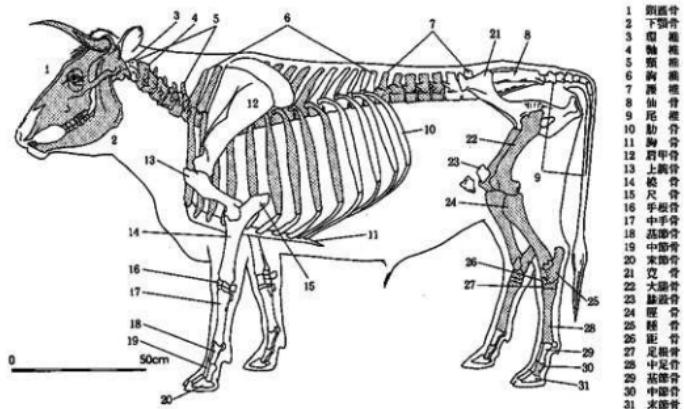


図42 ウシAの出土部位

以上の推定値から、長原遺跡出土のウシの体高は、大小2つのグループに分かれ、大きい個体群は、体高約120-125cm前後で、日本在来種の見島牛、口之島牛のオスに相当する。小さい個体群は、体高約110-115cmとなる。西中川ら[西中川ほか1991]によると、在来種の見島牛、口之島牛は雌雄差で大きさが異なり、本遺跡出土の大小2つのグループも、雌雄差によるものと考えられる。出土比は、小グループの方が若干多い。

ウマ *Equus caballus*

破片数で197点出土している(図版25-27・29-33)。出土部位の破片数は、下顎骨15点(右5、左9、左右共1)、環椎2点、頸椎1点、肩甲骨5点(右3、左2)、上腕骨5点(左4、左右不明1)、橈骨・尺骨13点(右7、左6)、中手骨9点(左8、左右不明1)、手根骨1点、基節骨6点(右1、左2、左右不明3)、大腿骨13点(右8、左4、左右不明1)、足根骨左1点、脛骨9点(右3、左6)、中手骨または中足骨5点(右1、左右不明4)、中節骨2点(左1、左右不明1)、中足骨10点(右3、左6、左右不明1)、距骨4点(右2、左2)、踵骨4点(右1、左2、左右不明1)、末節骨1点、寛骨5点(右1、左3、左右不明1)、遊離歯52点、肋骨1、椎骨1などである。

出土したウマの下顎臼歯列や主要四肢骨の計測値を、従来の計測値と比較すると以下のようになる[西中川ほか1991]。

R212は上腕骨の最大長276mmで、体高約130cmと復元できる。R623は橈骨最大長が335mm、R145が同、319mm、R346が同、306mm、R437が同、323mmを測り、それぞれ体高135-140cm、125cm、130cm、130-135cmと推定できる。R286の中手骨最大長は、220mm、R401が同216mmで、それぞれ体高135cm、130-135cmと推定できる。

R271の大腿骨最大長は、345mm、R371の橈骨最大長は、307mm、R266の中足骨最大長は、262mm、R179は同、254mm、R233は同、275mmで、それぞれ体高115-120cm、115-120cm、130cm、125-130cm、135-140cmと推定できる。

下顎臼歯列長を例にとると、R206は前臼歯列長176mm、R267は同180mm、R268は同179mm、R269は同175mm、R368は同180mm、R403は同171mm、R460は同169mm、R592は同176mmを測る。また、R209は、後臼歯列長76mmを測る(図43)。

出土したウマの年齢を推定すると、第三後臼歯が萌出中の個体が2個体(R268、R403)あり、これらは3-4歳に、第三後臼歯の萌出が終わり、臼歯列全体に摩耗が進行をはじめる個体が7個体(R206、R209、R267、R269、R367、R460、R592)あり、これらは5-6歳と推定できる([Cornwall 1956]より)。遊離歯も含めて、幼齢馬、老齢馬は見られない。

この他に、大きさや形状からウシかウマに相当すると考えられる椎骨や肋骨、頭蓋骨、四肢骨の破片62点と、細片となった、もともとの大きさも推定できない哺乳類の細片51点を含む。

3) 考察

i) 出土動物遺存体の概要

今回報告する動物遺存体は、8世紀前半の流路NR501からまとめて出土したものである。出土地点は、2区に集中し、なかでもウシがほぼ1個体分出土した地点を中心に集中する傾向にある。ウシとウマの骨は、破片数で全体の98%を占め、頭蓋骨、中軸骨、四肢骨それぞれが散乱状態を呈し、随所に鋭い刃物による切痕が観察できる。そのような点から、この付近、もしくはこの地で屠殺され、死後すみやかに解体され、この場所に直接投棄されたか、もしくはすぐ上流に投棄されたものが流水の作用で一部は流れ、残りがこの場に堆積したものと考えられる。

またウシの全身骨格の出土が特筆される。このウシは流路の肩部に横たえられた状態で、左右肩甲骨を欠くだけで全身骨格が揃う。一般に肩甲骨はト骨に用いられることが多く、その目的で取り去られたことも推定できる。

ウシの肩甲骨を用いたト骨は、中国古代にはじまって初期鉄器時代には朝鮮半島にも入り、韓国の光州市新昌洞遺跡(初期鉄器時代、低湿地)、釜山市樂民洞遺跡、慶尚南道統營郡煙臺島遺跡(いずれも三国時代、貝塚)などから出土している[金建洙2002]。

日本でもト骨にウシが使われるが、部位は肋骨が多く、肩甲骨を用いた類例は少ない。千葉県君津都市群遺跡(5世紀末~7世紀前半)では、ト骨にウシが使われているが、部位は肋骨のみである[松井章・宮路淳子1996]。他にも、静岡県浜松市伊場遺跡(8世紀)、宮城県多賀城市山王遺跡(8~9世紀初頭)などでも、やはりウシの肋骨が使われている[千葉孝弥2002]。ト骨の素材は7世紀頃まではニホンジカが圧倒的に多かったが、8世紀にはいってウシをト骨に用いた出土例が増加する。「狩猟獣から家畜へ、肩甲骨から肋骨へ」といった素材の時期的変化は、素材の入手し易さと一個体あたり得られるト占用材の量を反映したものとみられ、古墳時代後期以降にト占の目的や主催者および執行者、ト占の頻度が高まるなどの変化が生じた可能性」が指摘されている[宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局1996]。しかし、ウシの肩甲骨が使われている例は少ない。これは肩甲骨の骨体が薄く、保存条件に恵まれないため埋没状況に左右されやすく、出土数に反映されたためではないだろうか。

「養老既牧令」の第二六条、「官馬牛死条」には、「凡そ官の馬牛死なば、各皮、脳、角、膽を收れ。若し牛黃を得ば、別に進れ」とあり、これらが骨角器や皮革生産など、食肉以外にも経済的価値を持つとすると、民間の馬牛の処理も、この規定に準じていたことが考えられる。また、第二七条、「官私馬牛致死条」では、「凡そ公事に因りて、官私馬牛に乗りて、理を以て死を致せしむ、証見分明ならば、並びに徵ること、免せ。其れ皮穴は、所在官司出し売れ。価を送りて本司に納れよ。若し、非理に死失せば、微ち陪てしめよ」とある。今回出土したウシは、肩甲骨を取られただけで、角芯も取り去られず、他の骨の表面に明らかな刃物痕も見られない。皮が剥がれたかどうか明らかではないが、明確な解体の痕跡が見られないことから、こうした規定に従わなかった可能性が高いといえる。経済的価値のある部位を残して、流路に投棄、もしくは遺棄していることから、祭祀の可能性もあけることができる。

以下に、長原遺跡からこれまでに出土している資料も併せて、8世紀代のウシやウマの役割について

て考察する。

ii) 長原遺跡のウマ

今回、NG01-14次調査地から出土したウマは、幼馬や老馬は含まれず、年齢4~6歳の壮齢馬を中心であった。下顎骨臼歯や主要四肢骨の計測値から、古代の例としては大きい部類に属する。もつとも計測例の多い下顎臼歯列長は、180mm、180mm、179mm、176mm、175mm、171mm、169mm、176mmと平均175.8mmを測り、8世紀後半の平城京出土の170mm、175mm、170mm、167mmの平均170.5mm[松井章1984]を凌ぐ。長原遺跡では、これまでにも臼歯列長が184mmという大きさの個体が報告されており[久保ほか2000]、8世紀代の長原遺跡では、平城京より体格の大きいウマが飼われていたようである。さらに地方と比較すると、古墳時代から中世の千葉県南備当遺跡出土例が164mm、168mmで平均166mm、平安時代の神奈川県西方遺跡では151mm、160mm、166mm、168mmで平均161.3mmと大きく下回り、在来小型馬クラスに相当し、長原遺跡出土のウマの形質の大きさが分かる(註1、図43・44)。

また四肢骨12点の計測から、中型馬クラスが多いといえる。年齢は4~6歳の中にはば収まる。このように長原遺跡から出土するウマが、他地域から出土する個体に比べて、体格が優れた個体群が含まれていることが分かる。

長原遺跡の北東方に位置する、生駒山西麓の四条畷市や東大阪市では、從来から古代のウマに関連する遺物が多く出土し、5世紀とされる日下遺跡[堅田直1974]、5世紀後半から6世紀初頭とされる藤屋北遺跡[大阪府教育委員会2003]では、埋葬されたウマが出土している。先に挙げた養老既牧令で明らかのように、死んだウマやウシの皮、肉、脳、膾は経済的価値を有し、実際、多くの遺跡から出土するウシやウマは解体された後、廃棄されている例が圧倒的に多い。こうした一般集落において埋葬された例も、古墳に殉葬される例と同様、犠牲として埋葬された故に、全身骨格が揃って出土したのではないだろうか。また、「河内馬飼首」のように馬飼を姓に持つ集団が文献に見えることから、河内湖周辺から生駒山西麓にかけて大規模なウマの生産地(牧)が集中していたことが想定できる。なかでも長原遺跡では、5世紀前半にウマの足跡が検出され、後半にはウマの出土が増加する。また6世紀中頃の長原南口古墳では、葬送儀礼に伴いウマの四肢骨を立たせたまま犠牲とした例が見られ[久保和士1995]、ウマの生産に深く関わった集団の存在をうかがわせる。

iii) 長原遺跡のウシ

奈良時代に都のあった平城京でも、ウシの出土はウマに比べると多くない。長原遺跡をはじめとする河内平野の資料を集成した久保和士は、長原遺跡でウマが出土するのは5世紀中葉、ウシは7世紀前半で、河内平野全体でもその傾向は変わらず、ウシはウマよりも遅れて、実際に普及するのは6世紀後半から飛鳥時代前半と考えた[久保1999b]。

文献では、「日本書紀」安閑紀に、「別に大連に勅して云く、宜しく牛を雞波の大隅嶋と媛嶋の松原とに放つべし。ねがわくは名を後世に垂れむ」とあり、雞波の大隅、媛嶋にウシを放牧したという記事が見える。これが歴史的事実を反映し、牧の設置とみなすことができるするとすると、牛牧の設置は6世紀前半のことと考えられ、発掘調査での初見と一致する。佐伯有清は、同じく「日本書紀」安閑元年

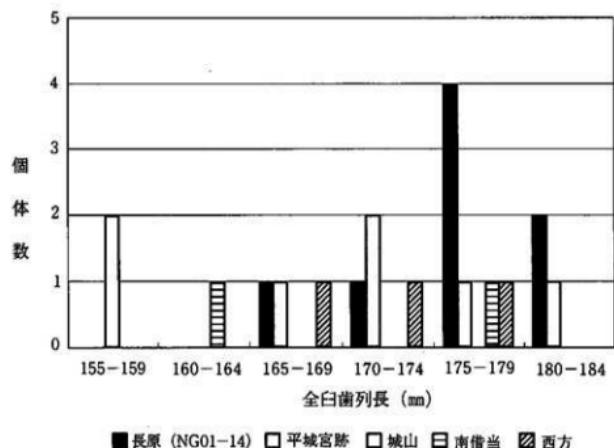


図43 古代のウマ (1)

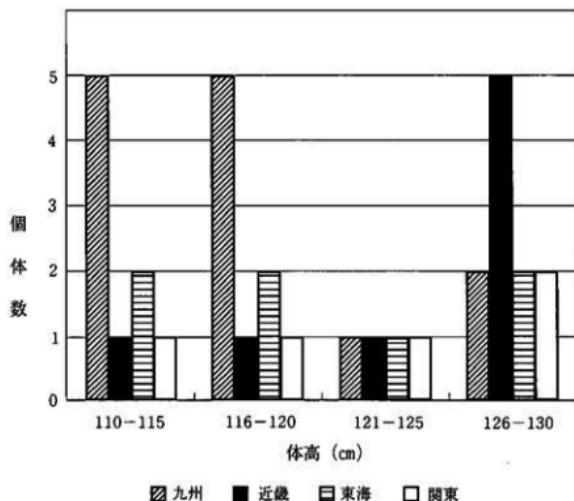


図44 古代のウマ (2)

の難波屯倉の設置と牛牧の設置との間に相関があるとし、屯倉経営の進展がウシの計画的な飼養を促したと指摘している〔佐伯有清1967〕。つまりウシを屯倉の耕作に利用するために、牛牧を設置したとし、さらに牛耕と条里制における長地形の地割の発生についても言及している。

古代のウシはこのように、主に農耕および運搬・荷役に用いられたと考えられるほか、腰牧令に、「其の乳牛には豆二升、稻二把を給へ。乳を取る日に給へ」と記載され、また長屋王木簡には、「牛乳煎人一口米七合五匁受稻麻呂 十月四日」(平城京左京三条二坊八坪長屋王邸跡出土)と記されている。他にも平城京左京三条二坊から「牛乳持參入米七合五匁受丙万呂九月十五日」と記された木簡が出土している。これらの木簡から、奈良時代の皇族、貴族はその位階に応じて牛乳を受給していたことが明らかになっている(長屋王邸宅木簡)。

今回出土したウシの四肢骨には、1)太く短い、2)関節面の変形という形態上の特徴がみられるものがあり、過重な使役によって、骨の形成に影響を与えた可能性を想定できる。養老令腰牧令によれば、「凡そ牧の馬牛、死耗せらば、年ごとに百頭に率りて論じて十を除け。その疫に死なば牧の側の私の畜と相准へて数、同じくば疫を以て除くことを聽せ」とあり、牧ではかなりの高率で馬牛が死んでいたことが分かる。

これまでに長原遺跡で出土しているウシの推定体高もウマと同様に、今回の125cmの例を含め、大きい個体が多く、藤原京や平城宮から出土したものに匹敵する。このように飛鳥時代から奈良時代にかけて長原遺跡から出土するウシやウマが、平城京から出土する個体よりも大きいものが多いことは、この遺跡が中央権力と密接な関係を有し、中央にすぐれた形質のウシ、ウマを供給する生産の場であった可能性を示唆するといえよう。しかし、出土するウシやウマの推定年齢が、若齢というより、永久歯の生え揃った働き盛りの個体が多いことは、この遺跡に牧の機能を想定するうえで否定的な要素となる。

iv) 駅伝馬

もう一つ、飛鳥・奈良時代のこの遺跡から出土するウシ、ウマを論じる際に看過できないのは、交通機関としての機能であろう。京嶋は、本地区付近に、河内平野を直線で東西に横断する古代幹線道路、「磯齒津路」を想定する〔京嶋覚2001〕。また墨書き土器や瓦の出土からは、本地区的東付近に公的建物が想定できることから(図45)、本地区が何らかの交通の要衝であった可能性が導き出せる。先に述べたように、出土したウシやウマに、牧で飼育されていれば必ず含まれてくるであろう乳歯段階の個体や、10歳以上の老齢の個体が見られず、働き盛りの壮齢の個体に集中することから、駅家などの公的機関に関連する可能性も考えられる。しかし、それだけではウマと並んで多数出土するウシの性格を十分に説明することが困難となる。

『日本書紀』卷第二十五、孝德天皇の大化二年(646)の詔勅によって、駅馬(はゆま)、伝馬(つたはりうま)の制度が定められた。そして律令制度によって定められた官道の各所には、「駅制」に基づいて駅が設けられた。『養老令』には、駅について次のような規定がある。

①駅には大路二十匹・中路十匹・小路五匹のウマを常備すること。

②駅馬のはかに伝馬を郡ごとに五匹おくこと。

佐々木慶一は、律令国家のウマ支配の特質について「律令国家の馬政策は、國家が良馬を独占的に所有し、それをもって騎兵を組織し、かつ駅馬・伝馬として交通機能の中枢を掌握することにある」と述べている[佐々木慶一1984]。長原遺跡から出土しているウマは、今回の調査(NG01-14)でもこれまでの調査でも、大きい個体が多く、年齢も老齢馬は含まれていないことは前述の通りである。厩牧令駅馬条には、「その大いに老い病んで乗用に堪へざるがあらば、便に隨ひて貨買し、得たら直、若し少なくば、駅馬は駅稻を添へよ。伝馬は官物を以て市ひ替えよ」と、乗用に堪えなくなった駅馬を売って新馬を購入する費用にあてることが規定されている。出土した遺存体が、駅馬である可能性も指摘しておきたい。

v)牛馬耕

長原遺跡でウマが出始めるのは5世紀中頃、ウシは6世紀初め(足跡)である。久保は、これまで長原遺跡から出土しているウシ・ウマについて、水田耕作との関わりを論じている[久保1999b]。耕作作業において、牛耕作は人耕の約2~3倍、碎土作業において人耕の約3~6倍の能率をもっているといわれており、当時の生産力の増大にウシは大きく寄与したものと考えられる。

vi)動物祭祀

今回、NR501からは、多数の祭祀土器が出土している。そこで同じ地点から出土した祭祀土器と動物遺存体の関連性についても留意しなければならない。

最も祭祀との関連をうかがわせるのは、ウシの全身骨格の出土である。このウシは流路の肩部に横たえられた状態で、肩甲骨左右以下の前肢が欠損しているだけで、ほぼ全身が遺存していた。すでに述べたように、左右の肩甲骨の欠損は、意識的に取り去られた可能性がある。

「養老厩牧令」に見えるように、死んだ牛馬は皮、脳、角、臍を取り、さらに牛糞があれば別に進上するようにとの規定や、牛馬を所轄する役所の管轄以外で牛馬を死なせた場合、皮と糞とを売りに出して、代金を所轄の役所に納めよという規定などから、死んだ牛馬は解体されねばならないはずである。骨の表面の解体痕、加工痕などの観察からは、このウシの皮が剥がれたり、内臓が取り去られた可能性は低いといえる。ウシが解体されることもなく、全身がこの流路の肩に放置され、肉や内臓が腐るにつれ、中軸骨や四肢骨がもとの位置から徐々にずれながらもほぼ全身骨が埋没したものと考えられる。

佐伯有清は、東アジアにひろがる動物祭祀を論じ、その動機を農耕儀礼と雨乞いとの2つに大別した。そして前者には、「古語拾遺」に見られる原始神道の中に、「宜しく牛糞を以て溝の口に置きて、男茎形を作りて以てこれに加へ」と、田をつくるにあたって豊穰を祈念し、田人に牛糞を食べさせる例や、蝗の害を除くのに、田の水口に男茎と牛糞を供える儀礼があったことを挙げ、後者には、「日本書紀」孝極紀に見られる「牛馬を殺して諸の社の神を祭ふ」という記事を例として挙げている。

一方、農耕儀礼と直接結びつかない殺牛祭神の信仰は、本例の時期である8世紀の前半から、民間でさかんになっていた。民間では、この時期、ウシを殺して亡魂や死魂といった怨靈神に捧げ、怨靈の祟りを鎮めることが盛んに執り行われたという[佐伯1967]。

このような、古代日本において動物祭祀が盛んに行われていたという見方に対して、井上光貞は古

第三節 遺物の検討

古代日本の動物供犠はあくまで例外的なものとして、否定的見解を述べた[井上光貞1984]。さらに中村生雄は、「古代日本の神祀りにおける贊には「神のものを神に戻す」という意味があった」とし、「日本においては中国的な犠牲儀礼が意図的に排除されていったという傾向が決してなくはなかった」と述べている[中村生雄2002]。

近年、古代から中世にかけての湿地遺跡の発掘が増加し、そこから数多くの動物遺存体が出土するようになった結果、各地の遺跡から、何らかの祭祀に伴うと考えられるウシやウマの出土例が増加し、動物祭祀が広い地域で行われていたことが確かめられつつある。

4)まとめ

今回NG01-14次調査で出土した動物遺存体について分析を行い、以下のような結果を得た。

- (1)ウマの下顎骨臼歯列長および四肢骨の計測から、体高復元を行った結果、体高は平均135cm 前後の中型馬であると推定できる。同時代(8世紀)の平城京内出土資料と同クラスであり、他の地域の資料よりはかなり大きい個体群である。
- (2)ウシは、現生標本と比較して、上腕骨や中手骨が短く太いという形態的な特徴がみられる。ウマと同様の方法で復元した体高は、110cm前後と130cm前後とに二分でき、それぞれメスとオスの性別2型を示すと考えられる。
- (3)ほぼ全身骨骼が出土したウシは、左右の肩甲骨を欠くが、他の部位は左右が揃っており、この付近で遺棄された個体と考えられる。解体された痕跡は認められなかった。
- (4)ウシの左右の肩甲骨が欠損していたことは、人為的な所作による可能性がある。肩甲骨は薄くて他の主要四肢骨に比較すると、残りにくいが、横たえられた場合、左右、どちらかが死体の表で露出して風化しても、もう片方が胴部の陰になって保存されやすいからである。

今回、貴重な本資料の分析を行わせて頂きました、(財)大阪市文化財協会の皆様には、心より御礼を申し上げます。

註)

- (1)牧が想定されている群馬県の白井遺跡群では、多数の足跡からウマの体高130cm前後と復元されており、中型馬クラスでやはり他遺跡に比して大きい。

第2節 長原遺跡から出土した木材の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

今回の分析調査は、長原遺跡東部地区(NG01-14次)調査時に出土した、古墳時代後期～飛鳥時代および奈良時代の木製品について樹種同定を実施し、木製品別の木材利用状況に関する資料を得る。

1) 試料

試料は、NG01-14次調査で出土した木製品10点である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表14に記した。

2) 方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3) 結果

樹種同定結果を表14に示す。木製品は、針葉樹1種類(ヒノキ)と広葉樹3種類(コナラ属アカガシ亞属・ヤブツバキ・ツゲ)に同定され、ヒノキが最も多く認められた。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

- ・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属
輪方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晚材部への移行は緩やか～やや急で、晚材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

表14 樹種同定結果

報告番号	遺構	器種	時代	樹種
13	NR801	木錐	古墳時代後期？	コナラ属アカガシ亞属
249	NR501	横櫛	奈良時代	ツゲ
250	NR501	横櫛	奈良時代	ヤブツバキ
251	NR501	木針	奈良時代	ヒノキ
252	NR501	不明木製品	奈良時代	ヒノキ
253	NR501	斎串	奈良時代	ヒノキ
254	NR501	火鑽板	奈良時代	ヒノキ
255	NR501	曲物底板	奈良時代	ヒノキ
256	NR501	曲物底板	奈良時代	ヒノキ
257	NR501	曲物底板	奈良時代	ヒノキ

- ・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では梢円形、単独で放射方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織がある。

- ・ヤブツバキ (*Camellia japonica* L.) ツバキ科ツバキ属

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形～角張った梢円形、単独および2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性II～I型、1～2細胞幅、1～20細胞高で、時に上下に連結する。

- ・ツゲ (*Buxus microphylla* Sieb. et Zucc. var. *japonica* (Muell.Arg.)Rehd. et Wils) ツゲ科ツゲ属

散孔材で、道管径は極めて小径、管壁は厚～中庸で、横断面では角張った梢円形、単独または2～5個が複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性II～I型、1～3細胞幅、1～30細胞高。

4) 考察

樹種同定を行った木製品は、古墳時代後期(?)の製品が1点、奈良時代の製品が9点である。古墳時代後期(?)の木製品は木鍤であり、樹種はアカガシ亜属であった。アカガシ亜属は重硬で強度の高い材質を有する。近畿地方で出土した木鍤は、材の一箇所に孔をあけて紐を通すものと、材の中央部を細くして紐を結ぶものとに大別され、後者は槌の子の類とされる[奈良国立文化財研究所1985]。これらの木鍤については樹種同定が行われた例もあり、針葉樹のヒノキ、広葉樹のシノキ、シキミ、ツバキ等の利用が確認されている[島地謙・伊東隆夫1988]。今回と同じアカガシ亜属は、滋賀県鴨遺跡や奈良県平城宮跡で確認されている。これまで確認された樹種をみると、ヒノキを除いていずれも重硬な材質を有する種類である。

奈良時代の木製品では、横櫛、木針、斎串、火鐵板、曲物底板、不明木製品がある。櫛が広葉樹のツゲとヤブツバキであった他は、全て針葉樹のヒノキに同定された。曲物底板、木針、斎串、火鐵板については、これまで近畿地方で行われた調査でもヒノキが多く確認されている[奈良国立文化財研究所1985、島地・伊東1988]。ヒノキは、木理が通直で割裂性が高く加工が容易であり、耐水性や防虫性に優れた材質を有する。これらの材質が利用された背景に考えられる。

一方、横櫛に認められた2種類の広葉樹材は、いずれも重硬で緻密な材質を有しており、細かな加工に適している。とくに、ツゲは民俗事例で櫛の材として第一とされており[農商務省山林局1912]、櫛としての加工性や強度等を基準に木材が利用されたことが推定される。近畿地方では、これまでにも古代の櫛について樹種同定が行われており、ツゲやツゲに次ぐ良材とされるイスノキが確認されている[島地・伊東1988、山田昌久1993]。今回の結果は、これまでの調査例とも一致している。しかし、櫛については、全体的に樹種同定を行った例が少なく、ツゲとイスノキの利用については、今後の資料蓄積を待つて評価するようにしたい。

第Ⅳ章　まとめ

2001年度に本事業に伴って行われた発掘調査はNG01-14次調査の1件であるが、墨画土器を含む大量の祭祀遺物や牛馬骨が自然流路から出土するなど、奈良時代の長原遺跡の実態を明らかにする上で重要な成果を得ることができた。以下では、この点について調査の成果をまとめ、遺跡全体のなかで位置付けてみたい。

1) NR501出土の墨画土器と牛馬骨

NR501の第5a～5b層から出土した出土した遺物は、ミニチュア土器(壺・瓶・竈・高杯)や墨画土器などの祭祀用土器を主体とした土器類・須恵器・斎串や横櫛などの木製品、多量の牛馬骨などである。出土土器はおむね平城宮土器Ⅱ～Ⅲにおさまり、流路出土とはい比較的まとまった時期(8世紀第二四半期)の資料である。

墨画土器は、図化したもので40点あり、小片で個体判別ができないため図化しなかったものも含めると、相当な数にのぼる。長原遺跡では、これまで3地点で人面墨画土器が出土しているが[村元健一2003]、いずれも1・2点と単発的で、これほどまとまって出土した例は今回が初めてである。平城京・長岡京といった都城以外の遺跡としても、出土数は多いといえる。人面墨画土器の最古の例は、藤原京下つ道側溝出土の8世紀初頭のものとされ[金子裕之2000]、今回の例は都城以外の地域としては比較的古い時期の資料である。人面墨画土器は、律令祭祀具のなかでも都城を中心に分布する特徴が指摘されているが[金子2000]、墨画土器が普及する比較的早い段階にこれらを用いた大がかりな祭祀が行われていたことは、長原遺跡と都との関係の深さを示唆する。

出土した墨画土器は、二面もしくは四面に人面を表現したものほかに、直線・曲線のみを描いたものがほぼ同数出土した。後者の墨画土器は、全体の構図が判明した個体をみると、縦線・斜線・円弧を体部に巡らしている。また、人面を表現するもののうち、同一人物によって描かれたと思われる4個体は、口縁部の内外面に鋸歯文を巡らせている。都城地域では、直線・曲線のみを描く墨画土器は少数派であるとされ[上村和直1994]、人面以外の文様の多用は今回出土した墨画土器の特徴といえる。使用された器種は中型の壺・ミニチュア壺・把手付壺・竈で、外面を丁寧に磨いた精製の把手付き壺にも墨画が描かれていた。壺は中・南河内地域通有のもので、都城型[都城の土器研究会1996]とされるものは皆無である。都城地域とは文様や器種の特徴が異なることも注目すべき点である。

これらとともに出土した大量の牛馬骨は、体高等を復元する上で計測可能な個体が多く含まれおり、当地域の牛馬の形質的特徴を知る上で貴重な資料を得ることができた。

出土状況は、ウシ・ウマの各部位の骨がバラバラに出土したもののはかに、ほぼ一頭分の全身骨格がまとまって出土したウシ(ウシA)に分けられる。前者の多くは後者と分布や出土層位が異なってお

り、両者が流路内で出土した経緯は異なっていたようである。前者の骨には、切痕や打撲痕が確認できることから、死後に解体され、骨になった状態で投棄されたものと判断できる。これに対し、後者のウシAは解体されずに肉が付いたままの状態で埋没したものである。角や革など経済的価値が高い部位を利用せずにそのまま残すという、律令の規定とは異なる特異な資料である。その中で、両前足が欠失していることから、肩甲骨が祭祀用に意図的に取り外された可能性が提示された。一方、解体後に投棄された牛馬骨についても、墨画土器やミニチュア土器などと混在して出土しており、これらの祭祀用土器との関係も無視できない。牛馬骨が流路内で祭祀遺物と共に伴する事例は他遺跡でも多く認められ、それが意味することについては今後の課題である。

第Ⅳ章第1節で報告されたように、今回出土したウシ・ウマは大がらな体格をもつものが多く、平城京出土のものとほぼ同じかそれ以上と、全国的にみても突出した存在である。また、年齢構成は幼少・老齢のものが含まれず、老齢になる以前に死亡したもので占められていた。このことは、優秀かつ働き盛りの牛馬が集められた結果であろう。さらに、ウシには四肢骨が太く、関節面が変形したものがみられるなど、過重な用役に利用されたことを示す個体も見られた。

長原遺跡は古墳時代中期以降、牛馬骨が多く出土する地域であり、牧としての生産地の可能性も念頭に置く必要があるが、今回出土した個体群の偏在性からは、むしろ消費地としての特殊性に注目する必要がある。これまでも、当地域の古代の水田開発・經營には、国家の直接的な関与が推定されてきたが、農耕生産物の確保や生産力の増大を目的として、優秀な牛馬が供給された可能性は高い。また、駅伝馬としての馬の利用の可能性が指摘されたことも、長原遺跡を交通史の中で位置づける視点として重要である。

2)奈良時代の長原遺跡

次に、今回の調査地で墨画土器や牛馬骨が大量に出土した意味を、遺跡全体の中で位置づけてみたい。まず、8世紀の長原遺跡の状況を簡単にまとめる。図45では奈良時代の遺跡の古地形と集落・河川・水路の分布を示した。

この時期、遺跡南半の台地(瓜破台地)上には、灌漑水路が巡らされ、広い範囲が水田域となっていた。水田は7世紀初頭に台地上に人工の水路を掘削して造成され、9世紀初頭に洪水によって壊滅的な打撃を受けるまで、幾度かの洪水被害に遭いながらも継続する。7世紀に開始された大規模な水田造成事業は、南河内の台地の広い範囲を開拓した国家的事業の一環とする評価が早くからなされている[広瀬和雄1983]。8世紀になると、水田区画に若干の変化が見られ、一部で条里に則った南北・東西の地割りが採用されたという指摘があるが[積山洋1992]、灌漑システムとその範囲に大きな変化はなかったようである[京嶋覺1990]。

谷を挟んだ水田域の西側には、倉庫を含む大型建物群、寺院(成本廃寺・瓜破廃寺)など、地域支配の中核となる施設群が分布する。大型建物群は7世紀代には瓜破遺跡側で見つかっている。これらは水田開発とともに出現し、7世紀中葉の難波宮造営と軌を一にする官衙風の配置をとることから、中央政権による直接的な水田經營の管理・拠点施設の可能性が高い[大阪市文化財協会2000b]。

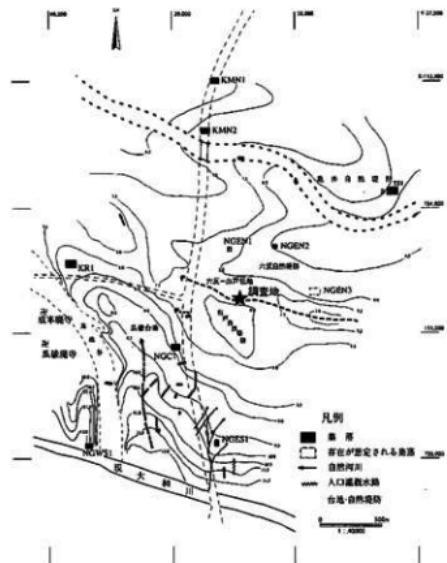


図45 奈良時代の長原遺跡地形復元図
(村元2003を一部改変)

8世紀になると、この拠点施設は喜連東遺跡へと移動する。移動の背景には、東西直線道路である「磯齒津路」が整備され、収穫物集散・輸送のための交通手段へ配慮したという指摘がある[京嶋2001]。

水田域となった東側の台地上には、これらとは別な小規模な集落が複数存在していたようだ。古代の長原遺跡の集落動態をみると[高橋工1999、村元2003]、複数の地点で建物や井戸が見つかっており、付近からは7~9世紀にかけての遺物が出土している。8世紀の状況については不明な点が多いが、複数の小規模な集落が継続して存在していた可能性がある。この時期に営まれた水田は、灌漑水路と水源の違いから複数のエリアに区分できることから[京嶋1990]、それぞれの小集落はこれらの耕作に携わった集団の居住域であったとみておきたい。

遺跡東北部の沖積平野の自然堤防(六反自然堤防)上にも、6世紀後葉から9世紀にかけての集落が分布する。これらの集落は台地上で水田耕作を行ったグループとは異なる可能性が指摘されている[高橋1999]。自然堤防上のNGO0-6次調査(NGEN3)では、重弧文平瓦をはじめとした多くの瓦や、埴、硯、銅錢、鉈尾など、一般集落とは趣を異にした遺物が出土している[大阪市文化財協会2003]。このことから、西側の喜連東遺跡とともに、「六反自然堤防」に分布する集落は交通の要衝地として重要な位置を占めていたという指摘もある[村元2003]。

以上のように、遺跡南半の水田域をめぐる状況には7~8世紀を通じて大きな変化はみられないが、遺跡北半では8世紀代に拠点となる施設が移動したり、特殊な遺物が出土するという新しい動きがみられる。その背景としては、それまでの中央政権を支える生産地域としての性格だけでなく、都城との物流・交通の要衝としても重要性を増したことが挙げられよう。

今回調査したNR501は、「六反自然堤防」に沿って南側を流れていた自然流路の一つである。大量のミニチュア土器や墨画土器を用いた祭祀や、牛馬の集中的な解体処理は、この付近で行われたのであろう。この場所で特殊な行為が行われたことは、8世紀代にみられる遺跡北半の動向と連動していた可能性がある。「六反自然堤防」上の集落の具体相とその性格については、今後の調査によって明らかにしていく必要がある。

(大庭)

引用・参考文献

- 東和幸2002、「波板状凹凸面牛馬歩行痕説」：日本考古学協会編『日本考古学協会第68回総会研究発表要旨』pp.116-119
- 飯田充晴1993、「道路築造方法について—埼玉県所沢東の上遺跡の道路跡を中心にしてー」：『古代交通研究』第2号、pp.71-78 古代交通研究会
- 井上光貞1984、「日本古代の王權と祭祀」 東京大学出版会
- 上村和直1994、「都城出土人面土器に関する二、三の問題」：『文化財論集』、pp.723-734
- 大阪市教育委員会・難波宮址頃影会1978、「IV 長吉六反(推定・城山古墳跡)試掘調査」：『平野遺跡群試掘調査報告書』
- 大阪市文化財協会1978、「長原遺跡発掘調査報告」
- 1979a、「大阪市下水道管渠工事に伴う平野区所在遺跡発掘調査(NG12次)報告書」
- 1979b、「大阪市下水道発進口建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG16次)報告書」
- 1979c、「関西電力管路埋設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG17)略報」
- 1980、「大阪市下水管渠築造工事(到達豊穴)に伴う長原遺跡発掘調査計画書」
- 1981a、「大阪市下水管渠築造工事(押込口)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80-1)略報」
- 1981b、「八尾～富田林局間同軸ケーブル方式工事(土木)に伴う長原遺跡発掘調査(NG80-2)略報」
- 1984a、「下水工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-1)略報」
- 1984b、「大阪市住宅供給公社長原六反用地ボーリング調査(NG83-5)略報」
- 1984c、「大阪市平野区長吉出戸における下水道工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-22)略報」
- 1984d、「大阪市出戸六反地区幹線下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-43)略報」
- 1984e、「仲東産業店舗建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-54)略報」
- 1984f、「吉内邸新築工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-63)略報」
- 1984g、「関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG83-65)略報」
- 1985a、「六反下水管渠推進工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-4)略報」
- 1985b、「長吉出戸地区下水管渠築造工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-18)略報」
- 1985c、「地中送電線工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-49)略報」
- 1985d、「関西電力管路新設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG84-86)略報」
- 1986、「大阪市土木局カルバート建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG85-17)略報」
- 1989、「(株)ビーバーハウスによる建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG88-6)略報」
- 1992、「長原遺跡発掘調査報告」V
- 1996、「大阪市教育委員会によるクラフトパーク建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG95-36)略報」
- 1997、「平成8年度大阪市都市整備局による長吉六反第1住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG96-79)略報」
- 1998a、「長原遺跡東部地区発掘調査報告」I
- 1998b、「平成9年度大阪市都市整備局による長吉六反第1住宅建設に伴う長原遺跡発掘調査(NG97-41)完了報告書」
- 1999、「長原遺跡東部地区発掘調査報告」II
- 2000a、「長原遺跡東部地区発掘調査報告」III
- 2000b、「瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告」
- 2001a、「長原遺跡東部地区発掘調査報告」IV
- 2001b、「八尾市都市計画道路久宝寺太田線建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG00-30)完了報告書」

書

- 2002a、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅵ
- 2002b、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅴ
- 2002c、『八尾市都市計画道路久宝寺太田線建設工事に伴う長原遺跡発掘調査(NG01-25)完了報告書』
- 2003、『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅵ
- 大阪府教育委員会編2003、『藤屋北遺跡現地説明会資料』
- 大阪文化財センター1980、『龜井・城山』
- 1986a、『城山』その1
- 1986b、『城山』その2
- 1986c、『城山』その3
- 堅田直1974、「東大阪市日下遺跡調査概要」考古学シリーズ2 帝塚山大学考古学研究室
- 加茂義一1976、「日本畜産史 食肉・乳酪篇」法政大学出版局
- 金子裕之2000、「考古学からみた律令の祭祀の成立」:『考古学研究』第47巻第2号、pp.49-61
- 金建洙2002、「韓半島のト骨」:『考古学ジャーナル』No.492、pp.18-21 ニュー・サイエンス社
- 京嶋覚1990、「水田遺構と古代の長原」:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.294-306
- 1992、「長原・瓜破遺跡の築塁土器」:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ、pp.155-160
- 2001、「道路状遺構と『磯曲津路』-長原遺跡の交通史的検討」:『立命大学考古学論集』Ⅱ、pp.223-249
- 久保和士1995、「南口古墳出土のウマについて」:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅲ、pp.407-413
- 1999a、「動物と人間の考古学」 真陽社
- 1999b、「動物遺体の調査結果と検討」:大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.107-120
- 久保和士・松井章1999、「家畜その二—ウマ・ウシ」:『考古学と動物学』考古学と自然科学② 同成社、pp.169-208
- 久保和士・松井章・宮路淳子・佐久間桂子2000、「長原遺跡95-14次調査出土の動物遺存体」:大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XV、pp.159-172
- Cornwall,I.W.1956 Bones for the Archaeologist. J.M.Dent & Sons Ltd.
- 古代の土器研究会1992、「古代の土器1 都城の土器集成」
- 1996、「古代の土器4 炊飯具(近畿編)」
- 児玉幸多1982、「古代の官牧について」:『論集房史研究』、pp.52-65 名著出版
- 佐伯有清1967、「牛と古代人の生活」 至文堂
- 佐々木慶一1984、「律令駅伝制の再検討」:『律令制と古代社会』、pp.5-31 東京堂出版
- 佐藤謙1992、「平安時代における長原遺跡の動向」:大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.102-114
- 茂原信生・松井章1995、「草戸千軒町遺跡出土の中世大骨」:広島県草戸千軒遺跡調査研究所編『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ -南部地域北半部の調査-』、pp.289-312
- 島地 謙・伊東隆夫編1988、「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣
- 鈴木秀典1982、「瓦器焼の耀年」:大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ、pp.278-284
- 積山洋1992、「水田遺構の分析」:大阪市文化財協会編『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.91-101
- 高橋工1999、「長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期~飛鳥時代の地形環境の変化と集落の動態」:大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.79-106
- 高橋工・杉本厚典・大庭重信・綿川一徳2000、「長原遺跡東北地区的基本層序」:大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅲ、pp.9-17
- 田辺昭三1981、「須恵器大成」 角川書店

- 千葉孝弥2002、「多賀市山王遺跡出土のト骨」：『考古学ジャーナル』No.492、pp.10-13 ニュー・サイエンス社
- 趙哲濟1995、「本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅳ、pp.41-44
- 2001、「長原遺跡の地図」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』XVI、pp.7-28
- 中村生雄2002、「供輶の深層」 東京大学出版会
- 奈良國立文化財研究所1985、「木器集成図録 近畿古代篇」
- 西中川駿輔1991、「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書
- 農商務省山林局編1912、「木材ノ工藝的利用」 大日本山林會
- 早川泉1991、「古代道路遺構に残された圧痕－波板状凹凸面の性格について－」：『東京考古』第9号、pp.117-141 東京考古学談話会
- 広瀬和雄1983、「古代の開発」：『考古学研究』第30巻第2号、pp.86-100
- 藤田正勝・宮路淳子・松井章2002、「瓜破遺跡(UR00-8次)発掘調査の動物遺存体」：大阪市文化財協会編『瓜破遺跡発掘調査報告』II、pp.128-133
- 松井章1984、「動物遺存体」：奈良國立文化財研究所編『平城京右京八条一坊十坪発掘調査報告書』、pp.54-56
- 松井章・宮路淳子1996、「郡遺跡出土の動物遺存体」：『郡遺跡群発掘調査報告書 II』財團法人君津都市文化財センター、pp.326-342
- 宮城県教育委員会・建設局東北地方建設局1996、「山王遺跡Ⅲ-仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書-」宮城県文化財調査報告書第170集
- 村元健一2003、「長原遺跡とその周辺における古代の様相」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』VI、pp.86-100
- 八尾市文化財調査研究会2000a、「V 太子堂遺跡第7次調査(TS97-7)」：『(財)八尾市文化財調査研究会報告』66、pp.59-73
- 2000b、「V 太子堂遺跡第8次調査(TS98-8)」：『(財)八尾市文化財調査研究会報告』66、pp.75-93
- 山田昌久1993、「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史」：『植生史研究』特別第1号、pp.242 植生史研究会

あとがき

長原遺跡の特徴のひとつに、5世紀以後、牛馬の骨が多く出土することがあげられます。そのなかには馬の墓と推定される遺構や、古墳での葬送儀礼で犠牲とされた例などもあり、馬は人々に身近な存在として、生活に溶け込んできました。牛の存在も6世紀後半以後、明確になってきます。今回の発掘調査では、調査地点かその至近の場所で、奈良時代に牛馬の解体処理が集中的に行なわれていたことが明らかになりました。一方、肩甲骨だけをはずされた牛の全身骨格がみつかったことは、律令の規定とは異なるため、新たななぞを呼ぶことになりました。

また骨と一緒に出土した多数の祭祀土器も、大阪市内で最大量の出土であり、大いに注目されるところです。

長原遺跡の発掘調査始まって今年でちょうど30年を迎えました。旧石器時代から中世にかけて、どの時代においても重要な発見が相次ぎましたが、今回も、ほとんど前例のない貴重な調査結果となりました。今後、動物遺存体や祭祀の研究に大きく資することを願ってやみません。

最後になりましたが、関係各方面の皆様方に厚くお礼申し上げるとともに、今後ともより一層のご支援をお願い申し上げる次第です。

(積山 洋)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- TK73型式 21
- 飛鳥II 24
- 簀串 49, 71, 72
- イヌ 27, 30, 55, 56
- 生駒西遺産 24, 45
- ウシ 6, 10, 27, 30, 32, 55, 56,
58, 59, 60, 62, 63, 64,
72, 73
- ウマ 6, 10, 27, 30, 32, 55, 58,
59, 60, 62, 63, 64, 72,
73
- 瓦器 10, 54
- 韓式系土器 12, 18, 21
- 黒色土器 10, 54
- 初期須恵器 12, 18, 21
- 水田 5, 7, 12, 18, 21, 53, 71,
74
- スッポン 27, 30, 55
- 製塙土器 47, 49
- 塙 49, 74
- 火鐵板 32, 50, 71
- ヒヨウタン 12, 18, 23, 24
- 平玉 21
- 布留式 16
- 平城宮土器I 47
- 平城宮土器II 47, 72
- 平城宮土器III 47, 72
- 墨画土器 27, 30, 32, 35, 39, 41,
72, 73, 74
- 墨書 30, 37, 45
- 曲物 49, 71
- ミニチュア 23, 24, 27, 30, 32, 35,
39, 41, 72, 73, 74
- 木鏃 12, 22, 24, 71
- 弥生土器 13, 16
- 横椭 32, 49, 71

〈地名・遺跡名に関する用語〉

- 伊場遺跡 59
- 瓜破遺跡 73
- 老原遺跡 1
- 亀井遺跡 1
- 木の本遺跡 1
- 喜連東遺跡 74
- 日下遺跡 60
- 郡遺跡 59
- 山王遺跡 59
- 藤原北遺跡 60
- 磯齒津路 62, 73, 74
- 城山遺跡 1
- 新昌溝遺跡 59
- 太子堂遺跡 1
- 長原遺跡 1, 5, 7, 21, 39, 55, 60,
62, 63, 72, 73, 74
- 難波宮 73
- 西方遺跡 60
- 藤原京 62, 72
- 平城京 60, 62, 64
- 南傍当遺跡 60
- 煙臺島遺跡 59

**Archaeological Report
of the
Eastern Sector of Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume VII

A Report of Excavation
Prior to the Development of the Eastern Sector of the Nagayoshi Area
in 2001

March 2004

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features, and others, in this text

SD : Ditch

SK : Pit

NR: Natural Stream

CONTENTS

Foreword

Explanatory notes

Chapter I Excavation of northeastern sector of Nagahara Site	1
S.1 Background and Location	1
1) Location	1
2) Background of excavation	1
3) Progress of research	5
Chapter II Results of research	7
S.1 Stratigraphy	7
1) Stratigraphy at the Research area	7
S.2 Features and finds	16
1) The late of Yayoi Period and early of Kofun Period	16
2) The middle of Kofun Period	18
3) The late of Kofun Period and Asuka Period	22
4) Nara Period	27
5) Heian Period	53
Chapter III Examination of finds	55
S.1 Animal remains of Nagahara Site	55
1) Introduction	55
2) Outline of animal remains	55
3) Examination	58
4) Conclusion	64
S.2 Tree species of wooden remains	70
1) Sampling	70
2) Methodology	70
3) Results	70
4) Examination	71
Chapter IV Conclusion	72
1) Ceremonial pottaries and the cattle and horse bones in NR501	72
2) Nara Period of Nagahara Site	73
References and Bibliography	75
Postscript and Index	
English Contents	
Reference Card	

報告書抄録

ふりがな	ながはらいせきとうぶらくはつくつちょうさほうこく7							
書名	長原遺跡東部地区発掘調査報告書							
編著者名	大庭重信・宮路淳子・松井章							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35 TEL 06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
長原遺跡	大阪市平野区 長吉出戸	27126	34° 36' 00"	135° 34' 40"	20010607 ~ 20011207	736m ²	長吉東部地区土地 区画整理事業	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物			
長原遺跡	耕作地	弥生時代			弥生土器			
	流路	古墳時代	水田・溝・溝群・ 自然流路		土師器・須恵器・韓式系土器・砥石・平玉 木製品			
		飛鳥時代	自然流路		土師器・須恵器・ヒヨウタン			
		奈良時代	自然流路・溝		土師器・須恵器・木製品・鉄製品・動物遺存体			
		平安時代	水田・土壤		土師器・黒色土器			
			鎌倉・室町時代			土師器・瓦器		

原 色 図 版







図 版

第4a~7d層
(東部南壁、北西から)



第4d~10層
(西部南壁、北西から)



第5b~12d層
(東部深掘り、
北東から)



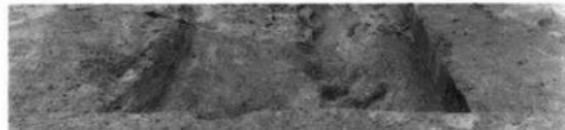
図版二
地震痕跡・古墳時代前期の遺構



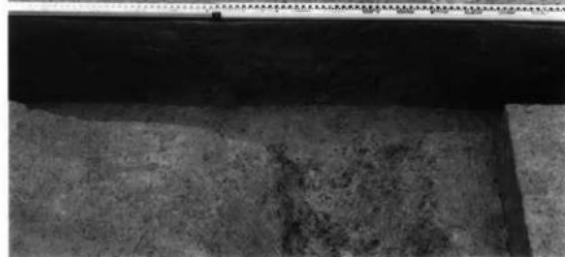
水平断層(中央南壁、
北東から)



SD901(北から)

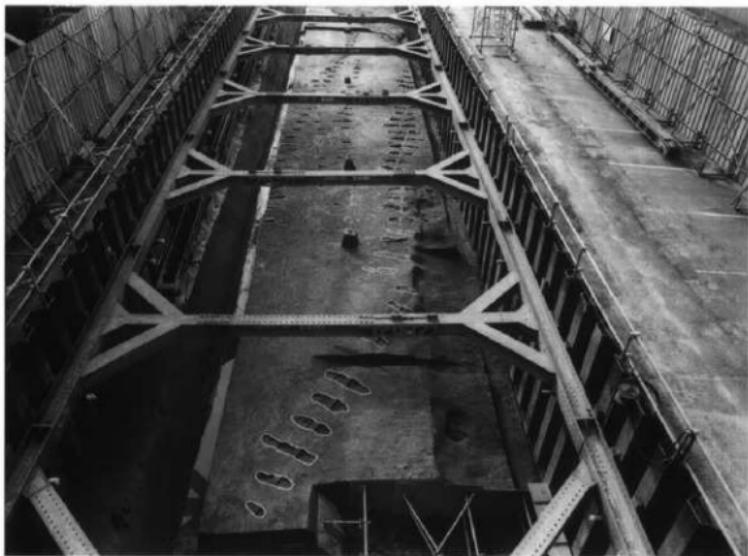


SD901断面(北から)





第9a層上面検出水田跡(東から)



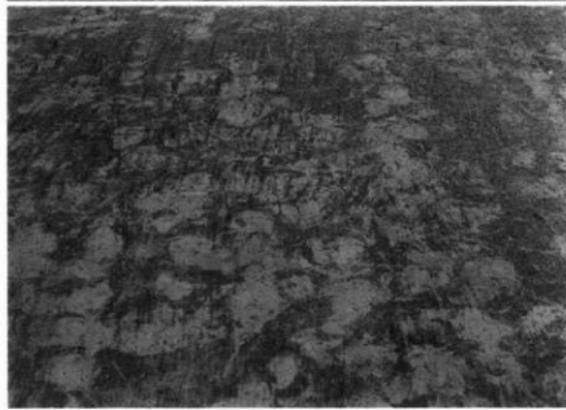
第9a層下面検出溝群(東から)



溝群B～E(北から)



溝群Dと南壁地層断面
(北から)



第9a層下面の窪み群
(2・3区、南から)

NR702甕14、横瓶23
出土状況(北から)



NR702甕15、
ヒョウタン18
出土状況(北から)



NR702大甕24
出土状況(北から)



図版六 奈良時代の遺構



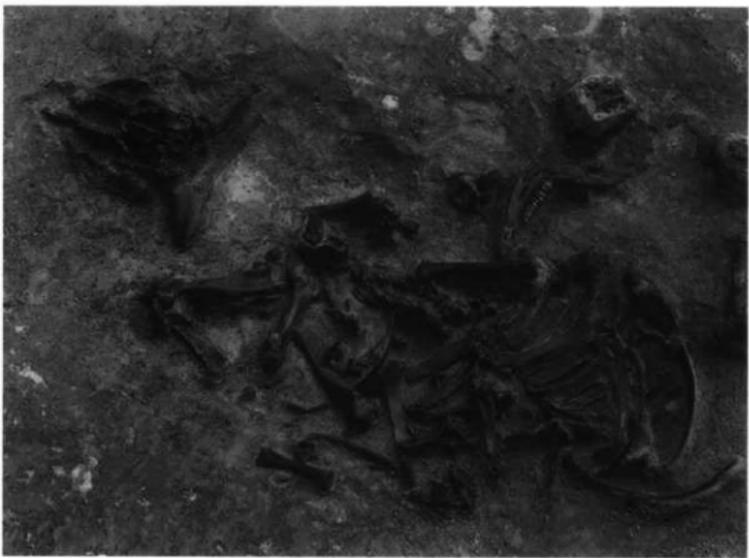
NR501全景(東から)



NR501南北断面(1・2区間畦、北西から)



NR501遺物出土状況(2区、西から)



ウシ A 出土状況(2-3区、北から)

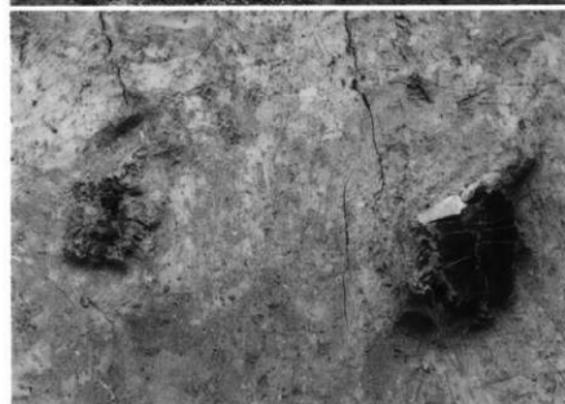
ウシ A 中足骨R517・足
根骨R518・距骨R519
・踵骨R520出土状況
(2-3区)



イヌ頭骸骨R593出土
状況(2-3区)



ヌッポンR581・582
出土状況(1-1区)





NR501遺物出土状況(1-1区、東から)



NR501遺物出土状況(2-5・3-7区、南から)



ウシ後頭骨R421ほか、
把手付壺181、短頭壺
234出土状況
(2-5区、東から)



ウシ下顎骨R265ほか、
横椭249、ミニチュア壺91
出土状況
(2-5区、東から)



ウシ桡・尺骨R210、
墨画土器132出土状況
(1-1区、東から)

第4a層上面検出水田跡
(6区、北西から)



第3c層基底面検出土壙
(7区、北西から)



第3～4a層
(中央南壁、
北西から)



圖版一二 NR702出土遺物（一）



14



16



15



22



20



23



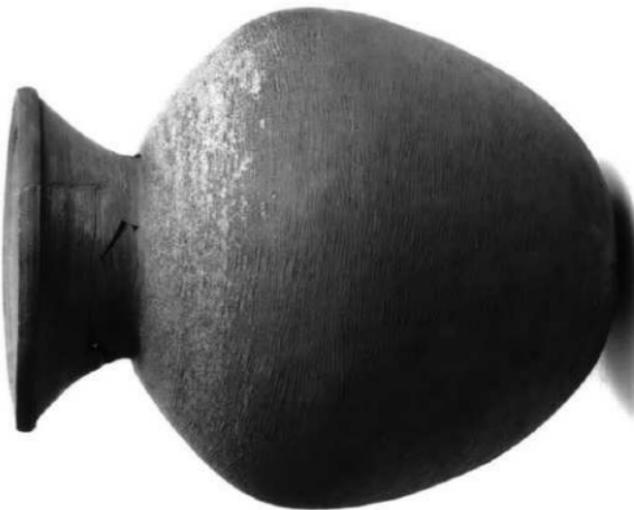
17

圖版一三 NR702出土遺物 (二)

19



20



圖版一四
NR501出土遺物（二）



25



48



26



44



27



49



29



56



38



53



62



59



63



64



173

176



168

170



169

171底部



82

69



79

69底部

圖版一六
NR501出土遺物 (三)



89



80



72



81



73



90



83



91



101



102



107



126



125



122



124



181



186



184



128



131



129



132



130



143



142



142



143



144



145



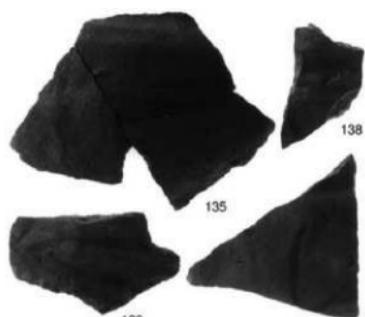
146



147



148



149



150



151



215



223



218



225



220



224



222



208



227



242



233



234

259



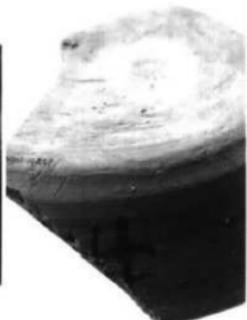
235



205



47



245

図版二二 古墳時代前期～奈良時代の木製品・石製品



第9a層 (12)、第9b層 (7・8)、NR801 (13)、NR702 (18)、NR501 (249～251・253・254)





595

ウシ頭蓋骨(R595)



421

ウシ後頭骨(R421)



453

ウマ頭蓋骨(R453)

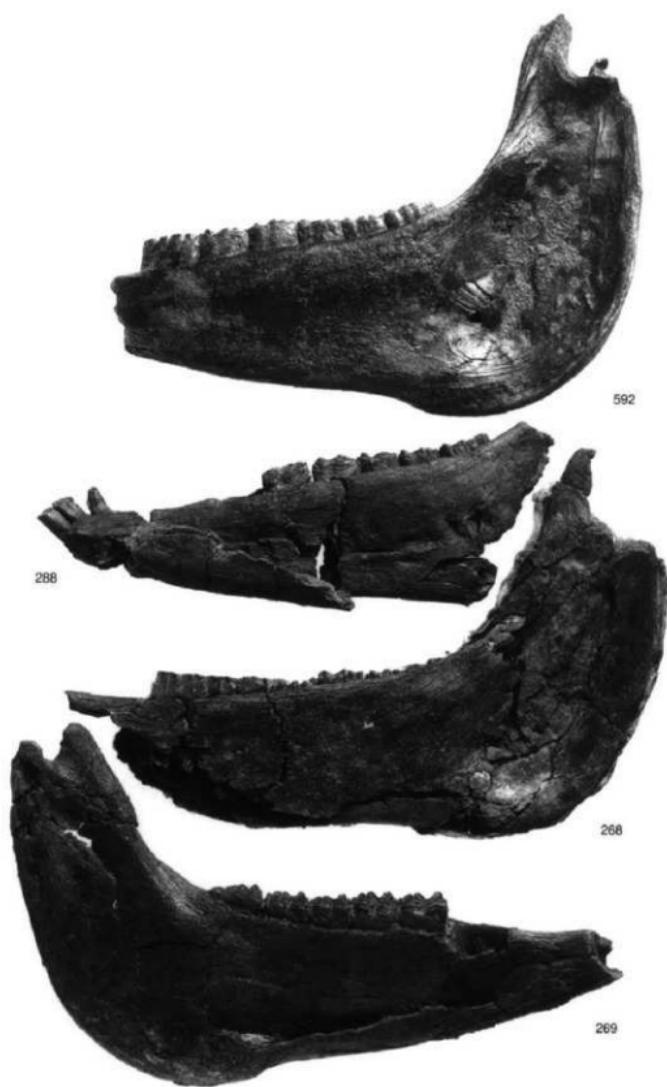


249

ウシ頭蓋骨(R249)



ウマ下顎骨(R206・209・403・655)



ウマ下顎骨(268・269・288・592)



525



265



291

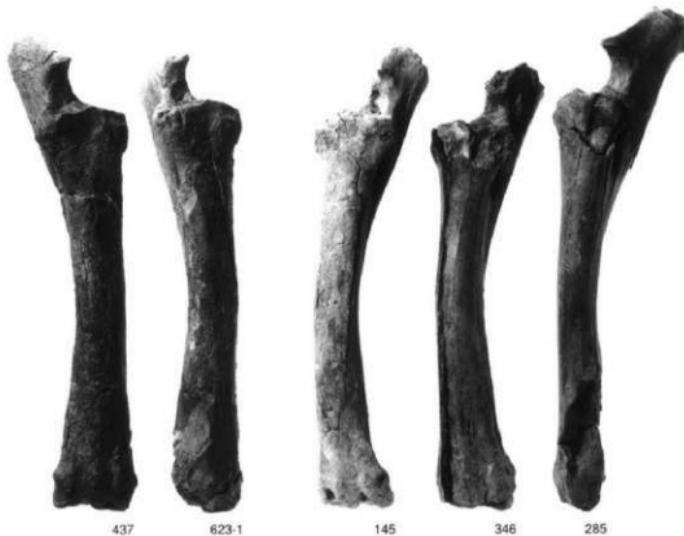


ウマ脛骨(R355・371-1)、ウマ上腕骨(R212・356)



ウシ上腕骨(R257・334・375・495)

図版三〇 NR501出土動物遺存体（八）



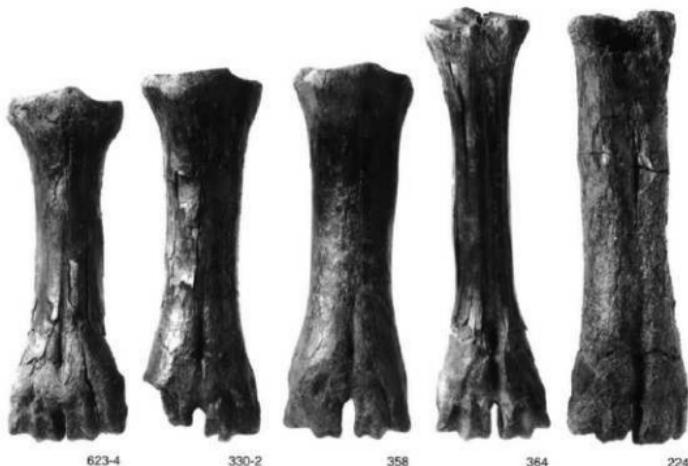
ウマ 挿・尺骨(R145・285・346・437・623-1)



ウシ 挿・尺骨(R210・289・397)



ウマ中手骨(R227・286・430)、ウマ中足骨(R233・266・274・332)

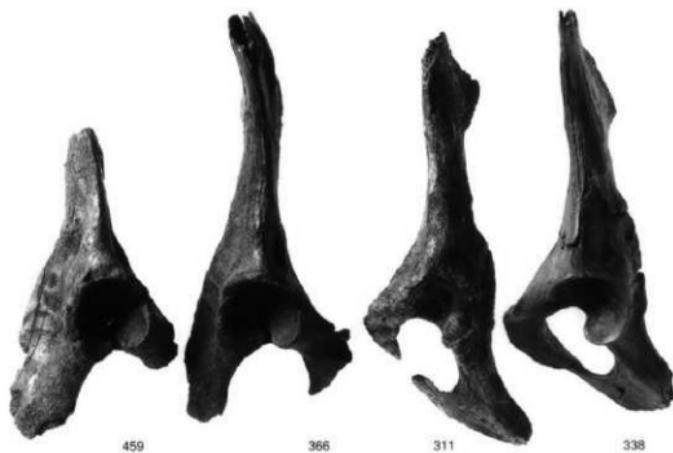


ウシ中手骨(R330-2・358・623-4)、ウシ中足骨(R364・224)

図版三一
N R 5 0 1 出土動物遺存体 (一〇)



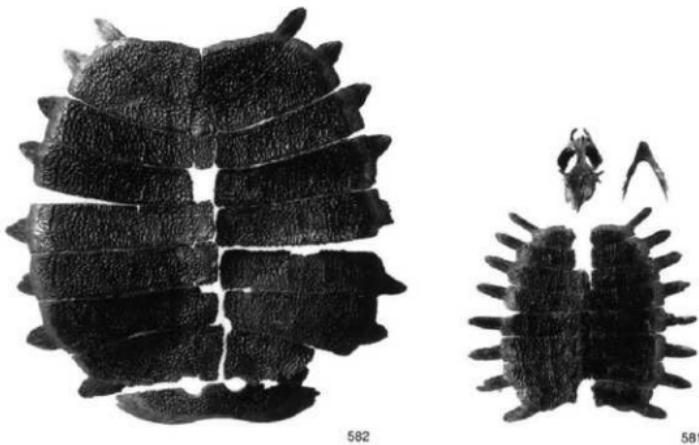
ウマ肩甲骨(R171・262)、ウシ肩甲骨(R250・315)



ウマ寛骨(R311・338)、ウシ寛骨(R366・459)



ウマ大腿骨(R161・261・278・583)



スッポン(R581・582)

図版三四
NR501出土動物遺存体（一一）



スッポン (R581)



スッポン (R582)

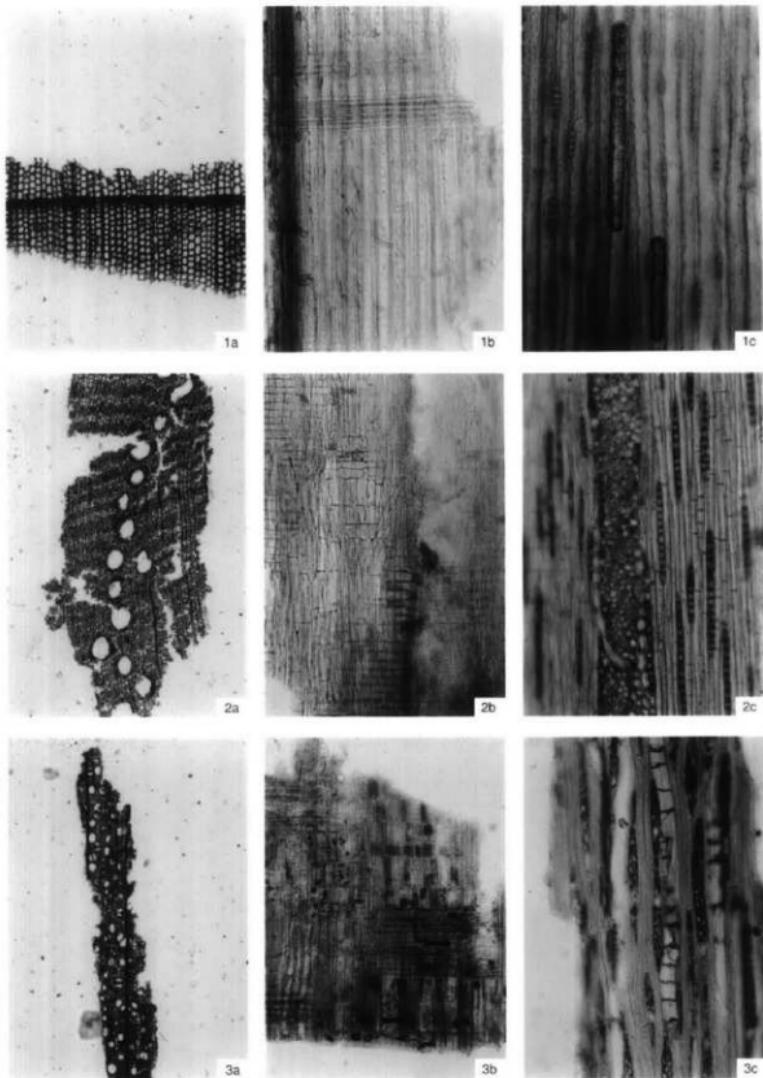


形態変異が見られるウシの四肢骨
上：ウシ上腕骨（R441）
下：ウシ中手骨（R479-1）
(それぞれ上は現生標本)



イヌ頭蓋骨（R593）
(上は現生標本)

図版三六
木製品に使用された材組織



1. ヒノキ(256)
2. コナラ種アカガシ亜属(13)
3. ヤブツバキ(250)
a : 木口 b : 梢目 c : 板目

— 200 μ m : a
— 200 μ m : b · c

大阪市平野区 長原遺跡東部地区発掘調査報告Ⅷ

ISBN 4-900687-74-X

2004年3月31日 発行◎

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂 1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区漆江南 2-6-8

**Archaeological Report
of the
Eastern Sector of Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume VII

A Report of Excavation
Prior to the Development of the Eastern Sector of the Nagayoshi Area
in 2001

March 2004

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Report
of the
Eastern Sector of Nagahara Site
in Osaka, Japan**

Volume VII

**A Report of Excavation
Prior to the Development of the Eastern Sector of the Nagayoshi Area
in 2001**

March 2004

Osaka City Cultural Properties Association